雉郎。いや、よく判りましてござりまする。御神木が自然に枯れたとあつては、御家の不吉、第一には味方の勇氣を挫く基。私どもに罪を塗りつけ、楠を枯らしたはわれ〳〵の仕業と御披露なさる思召とは、はじめから察して居りました。いかにも雉郎、尋常にお仕置をうけませう。

正武。むゝ。さすがは兄だけに分別ある奴。けなげにも好くぞ申した。亡きあとは弔らうて遣はすぞ。

雉郎。亡きあとよりも息あるうちに、今ひと言申上げたうござりまする。左ほどの罪もないものに大罪人の名を負はして、お仕置なさるは味方の爲。味方のためといふは軍の爲。軍は怖ろしいものでござりまするな。御神木の枯れましたるは誰が業でも無し、神の業。無用の軍をやめよといふ神様のお告かと存じまする。

正儀。むゝ。（思案す。）

雉六。さうぢや、さうぢや。おそろしい軍が何十年つゞく事か。このやうな怖ろしい世のなかに生きてゐるよりは、死んだ方が却つて優しかも知れぬなう。しかし我々もおめ〳〵と寃罪には死ぬまい。兄弟のたましひが一つになつて御神木はおろか、楠のお家までも枯らしてみせうわ。

五郎。え、、今更となつて兎かう申すな。それ引立てい。

家來。はあ。

正儀。待て、待て。正儀すこしく存ずる旨もあれば、直ちに成敗を加ふるな。あらためて沙汰するまでは、唯そのまゝに繫ぎ置け。

五郎。心得申した。

（五郎兵衛は先に立ち、家來二人に雉郎と雉六を引立てゝ下手に入る。正武はあたりを窺ひて摺寄る）

正武。左馬どの。今はあたりに人もなし。和殿の心中、正武あらためて承はりたう存ずるが……。

正儀。改まつたる問、何事であるな。

正武。これ御覽ぜい。（懷中より前幕の密書を出す。）

正儀。（取りてよむ。）おゝ、これは……。

正武。かの獵夫等の矢先にかゝりて、敢なくなりし旅人の襟を裂きて獲たる密書。察するところ間者を放ちて、味方の心を惑はさんとする、敵の手だてでござらうな。智慧自慢の細川赤松等にも似合はしからぬ、あざとき巧みではござらぬか。

正儀。いや、これは敵の手だてゞ無い。

正武。や、さては和殿、なこと足利に降參したか。

正武。いや、降參はせぬ。和睦した。

正武。え、、降參も和睦も同じことぢやわ。

（正武赫と憤ほりて物をも云はず、太刀に手をかくる。正儀も太刀をひき寄する。正面の襖をあけて、正儀の室伊賀の局、三十七八歳、下げ髪、小袿、緋の袴にて出づ。上手の垣のかげより河内の太郎正勝、烏帽子、直垂にて出づ。）

伊賀。和泉守どの、暫らく。

正勝。父上もしばらく。

（侍人は止めながら席に着く。）

正武。（哮る。）不忠不義の楠正儀。たゞ眞二つに擊ち放すのぢや。止むるな、支ふるな。

正勝。御立腹御もつともには存ずれども、これはあまりの珍事、われ〳〵も夢のやうに覺えます る。これにはおそらく仔細のあること、先づ、先づ。

（強ひて制すれば、正武は澁々に座に直る。）

伊賀。唯今太郎も申すごとく、これは夢のやうなる珍事、年來の怨敵たる足利に降參なんど物に狂はせたまひしか、但しは深き御所存あつてのことか。

正勝。なにとぞ仰せ聞けられてくださりませ。

（兩人詰め寄る。）

正儀。泉州。唯今かの獵夫共が申せしことを、お身はなんと聞いたぞ。

正武。田夫野人の習、軍はおそろしいとか申して居つた。

正儀。田夫野人とて侮るべからず、民の聲は天の聲ぢやぞ。元弘建武のむかしより、今にいたるまで四十餘年、日本國中に兵亂やむ時なく、武士はたゝかひに疲れ、民は戰に苦しみ、秋の田は屍に埋まれて、刈るべき粟もなく、夏の川は血に濁りて、飲むべき水もつきなんとす。あはれ斯くてあらんには、家はほろび絶え、人は死失せて、この世も終りとなるべきぞ。唯今かの雑郎とかいふ奴、軍はおそろしいと叫びしは、おそらく彼一人の聲にあらず、天下の人の聲であらうよ。

正武。天の聲か、人の聲か、そのやうな謎めいた詮議はわれ〳〵の知るところでない。もとより何人も戰ひを好むにあらねど、第一には朝廷へ御奉公、二つには年來の弓矢の意地、これ

正儀。　かために家を惜まず身を惜まず、河内半ケ國を以て天下の大敵にあたり、一族一門の血をそゝぎ盡して最後まで戰ふのではござらぬか。

われ〳〵一門の血をそゝぎ盡すは敢て悲しむに足らざるも、天下の人の血をそゝぎ盡すは、正儀の忍びぬところぞ。この末いかに成りゆくやらんと、ひそかに傷み思ふ折柄、京都の細川赤松より再三申し越したる儀あり。よつて曩に上洛の砌、かれらと忍びやかに對面して、和睦の談合もおほかた整うたり。今日手に入りたるこの密書は、いよ〳〵足利殿の聽許を得て、正儀にあらためて上洛せよとの狀であるぞ。

（このあひだに上手の垣のかげより紀の六郎左衛門入道、直垂、草履にて出で來り、無言にてこの問答を聽きゐたりしが、正儀の詞終るや、唾吐くごとくに嘆息して去る。）

伊賀。　それほどのお覺悟あらば、なぜ最初より斯う〳〵と打明けてくださりませぬぞ。南朝の春はおとろへて、北朝の北山おろし烈しきを、けふまで支へて來りしは御身ひとりの軍配と思しめすかや。皆これ一族郎等の力でござりませうぞ。まして上には十善の帝おはします。誰に許され、たれに計りて、これほどの大事を定めたまひしか。しかと御返答あそばされませ。

正勝。　げに母上の宣ふごとく、一家の浮沈とも云ふべきこの大事を、かつて何人にも洩したまはず、父上御一存を以て輕々しう定めたまひしは、正勝にも合點がまゐり申さぬ。

正武。　やあ、措かれい、方々。かやうな不覺人に物いふは、下世話に申す馬の耳に念佛とやらぢや。左馬がこのたびの處置は、悉皆狂氣の沙汰と見るのほかはあるまい。それならば其れでよし。亂心狂氣の大將は牢か檻につなぎ置いて、太郎どの、和殿代つて大將の采をとられい。不肖ながら和田正武、うしろ見をいたさうぞ。かゝるところに長居は無益ぢや。さあ、お立ちやれ。（起ちかゝる。）

正勝。　とは申せども今一應は……。

正武。　えゝ、意見などはもう遲いわ。今となつて鬼やかうと猶豫らふは、さては太郎、和殿も父の臆病風に誘はれたか。左もなくばそのやうな親は潔よく見捨てられい。大義親をほろぼすとは今のことぢやぞ。

正勝。　むゝ。

（正勝も決心して起たんとす。）

伊賀。　待たれよ、先づ待たれよ。わが夫ながら左馬どのは、さほどの不覺人ともおぼえませねば、

妾より今一度、あらためて御意見申上げ、さて其上にて兎も角も……。

正武。　日頃より男優りときこえしお局、どのやうな御覺悟あるかは知らぬが、魂も骨も腐りはてた卑怯者に、意見の釘鎹が利きまするかな。（あざ笑ふ。）

正勝。　（思案する。）利かねば利かぬまでのこと。先づ一旦は母にまかして……。

伊賀。　あすの朝までお待ちくださりませ。

正武。　むゝ。しからば此場はこのまゝに立別れ、次第によつては明日より敵味方ぢや。今にしておもへば彼の楠がいはれなくして枯れたるも、かゝる不吉の知らせでありしか。

（正武は庭に降立つ。）

正儀。　泉州。

正武。　なんぢや。

正儀。　今宵は熊王の元服ぢやが、かねて約束の通り、和殿が烏帽子被せてくれうかな。

正武。　おゝ、取りまぎれて失念いたし居つたが、なにさま今宵は熊王の初冠。えゝ、折がわるけれど是非がない。これも武士が一生一度の祝儀ぢや。いかにも正武、烏帽子親となつてとらせう。祝儀は戌の刻、まだ少しく間もあらう。衣服をあらためて見參するぞ、（云ひすてゝ下手に去る。）

正儀。　今聞くごとく、今宵は熊王の元服。祝儀の用意いたせ。

正勝。　熊王の祝儀もさることながら、差當つたる一大事は……。

伊賀。　いや、それは母にまかして置きや。

（正勝は不安の體なるを、伊賀は幾たびか眼で諭す。）

正勝。　では、よろしう願ひまする。

（正勝は一禮して奥に入る。）

正儀。　伊賀、和御前も次へたて。

伊賀。　いえ、立ちますまい。御返答によつては伊賀、覺悟がござりまする。（ふところ刀をとり出して屹とみる。）

正儀。　むゝ。さては正儀と刺しちがへん所存な。いしくも覺悟せられたり。さりながら正儀のかう思ひ立つたるは、きのふ今日のことにあらず、多年胸を苦しめたる末に、今ぞやうやく時節到來、はじめて安堵いたしたのぢや。正武正勝等が申すこと、そのいはれ無きにあらねど、かれらは一方をのみ觀て、一方をみず。南朝あるを知つて、天下あるを知らず。ま

だ〳〵眼が小さいぞよ。

伊賀。でもござりませうが、わらはが存じまするには……。

（伊賀はなほ云はんとする時、上手の垣のかげより、湯淺五郎兵衞走り出づ。）

五郎。申上げまする。

正儀。何事であるぞ。

五郎。唯今奥庭へ異形の變化あらはれ出で、組みとめんとは存ずれども、變幻自在、手に餘つてござりまする。

正儀。なに、奥庭へ不思議のものが現はれしとか。（微笑む。）多寡が天狗の所爲であらう。伊賀、兎もかくも見てまゐれ。我もあとより續いてゆかうぞ。

伊賀。はあ。

（伊賀は起つて庭に降り、五郎兵衞もしたがひて上手に去る。）

正儀。今朝は彼の楠が枯れしといひ、今宵はまた妖怪があらはれしといふ。國家まさに亡びんとする時、やゝもすれば不祥のことのみ多きは、今もむかしも變らぬ例ぢやな。

（正儀は獨語ちつゝ起たんとす。下手の木かげに熊王丸うかゞひ居りて、このとき忍び出で、擊つてかゝらんとして進み得ず。やがて思ひ切つて緣にのぼらんとする時、正儀ふり向くに、熊王あわてゝ隱る。正儀は心づかずして奥に入る。熊王はあとを見送りてわが心弱きを悔む。）

（二）

おなじく奥庭　櫻花爛漫として、闇にも白く咲きみだれたり。

（下手より伊賀の局は長刀かい込み、手松明をふり照して出づ。）

伊賀。怪しき者のあらはれしと、注進に依てとりあへず、實否を見とゞけにまゐりしが、闇にも白き櫻のほかには、眼に見ゆるものもなし。（あたりを照してみる。）花の神が戯れに姿をあらはして、女子どもに歌の所望か。あるひは天狗が形を變じて、男どもの力を試めさうとか。いづれにしても疾う〳〵來つて正體をみせ候へ。

（風の音。上手の櫻のかげより木の葉天狗二人出で、伊賀に飛びかゝるを、伊賀は長刀にてあしらひ、天狗はかなはずして上手の木立に逃げ入る。伊賀つゞいて追はんとする時、櫻のかげより楠。

正成、甲冑、弓を持ちてあらはる。）

伊賀。　や、おのれも天狗か。但しは人か。

正成。　むかしは人、今は魔界の王となつて、あるときは天帝と戰ひ、ある時は人間に下る。

伊賀。　して、世にありし時の名はなんと。

正成。　楠河内の判官橘の正成。

伊賀。　なに、正成公とや。はゝあ。

（伊賀は地に平伏す。このとき下手より楠正儀は湯淺五郎兵衛に手松明を持たせて出づ。）

正儀。　父正成公、人間に七たび生れかはらんとこそ仰せられたれ。魔道に墜つるなんどとは聞きも及ばぬことぞ。必定曲者ごさんなれ。伊賀かならず油斷すな。それ。

（五郎兵衛を見かへれば、五郎兵衛走りかゝつて組まんとするを、正成は磴と突き退ける。）

正成。　あら面倒や。今はなにをかつゝむべき。正成公の正體みせ申すぞ。

（冑をぬげば紀六郎左衛門入道なり。）

伊賀。　おゝ、そちは……。

五郎。　六郎左衛門入道か。

正儀。　戯れも事にこそよれ。正成公は藁人形を以て敵をあざむき、六郎左衛門は天狗を以て味方をあざむく。それとこれとは天地の相違ぞ。夜陰におよんで奥庭をさわがしたるは、當座の粹狂か、但しは心あつてのことか、仔細はいかに。

六郎左。　こゝろなき人の目にこそ、たはむれとも粹狂とも見ゆべけれ。腹心の家來を天狗にいでたせ、それがしも亦かゝる姿となつたるは、冥の廳におはす正成公尊靈に代つて、不忠不孝のお身を懲さんためぞ。覺悟あれや。

（六郎左衛門はつか〳〵寄つて、正儀をひき据ゑ、持つたる弓にて打つ。）

六郎左。　なう、殿。この六郎左衛門を僞者と見きはむるほどの眼を持ちながら、理非をわかつ眼は持ちたまはぬか。それがしの天狗は假の姿、殿はまことの天狗に魅れて候ふぞ。この弓を御覽ぜられい。これはおん父正成公、湊川御最期の際までも、身に添へて持たせたまひたる、名譽の弓とは御存じなきか。されば こそ二代の正行公、忠義も弓もとりつたへて、歸らじとかねて思へば梓弓、なき數にいる名をぞとゞむる。この一首の歌をなごりとして、四條縄手の露と消えさせたまひぬ。弓はその後おん手に傳はり、あつぱれ三代の楠よと、敵にも味方にも知られたまひしに、今や年來の志をひるがへして弓矢の本末をわすれ、

父にも似ず兄にも劣りし不忠不義不孝の振舞、これは抑もなんと云ふことぞ。すこしく恥を知りたまへ。

正儀。　幼き頃よりそちの懐に抱かれて、兎もかくも人となつたる正儀、主従とはいへ父子も同様。その入道がまごゝろを籠めたる今の折檻、骨身にしみて嬉しう思ふ。さりながらこのたびの一條は、正儀一人の安楽を望むにあらず。南北兩朝の和平をむすびて、萬民塗炭の苦みを救はうが爲ぞ。この心を知らぬものどもは、不忠とも云へ、不義ともいへ、憎まば憎め。そしらば誹れ、ありとあらゆる悪名をわが一身にひき受けて、たゞ〳〵天下の康きをのぞむのみ。正儀のこゝろに陰りなきは、梵天帝釋弓矢八幡、父上兄上の尊靈も知しめさうぞ。

六郎左。　えゝ、その口賢いがお身の疵ぢやよ。理を非にまげて云ひ瞞めうとも、この六郎左衛門は請取らぬぞ。やあ、殿。弓矢の意地はしばらく措くとしても、南朝の大厦をさゝふる一木の楠、いま俄に仆れては、南朝の御代はなんとならうぞ。おそれ多くも時の帝はなんとならせ給ふぞ。それ、うけたまはらう。

正儀。　さればこそ正儀、まづ足利と和睦して、南北朝の合體を計らんとこそ存ずるなれ。楠足利が黨を組んで、たがひに敵として戰ふあひだは、南北の統一思ひもよらず。天に二つの日なく、地に二つの王なし、いつまで南北にわかれて相爭ふべき。天下は一に歸するが自然の道理ぞ。入道、合點がまゐつたか。

六郎左。　（頭を掉る。）いや、われらは無骨一邊の田舎武士、詞戰ひではお身にはかなはぬ。お身はなんとでも勝手にお云やれ。われらはまた我等の勝手にする。太郎どのを始めとして和田どの恩地どの、楠三代のお家には人らしき武士も數々あれば、これらの人々と談合して、最後の覺悟を決むるまでよ。かたきの臺所に這ひつくばうて、尾を掉つて餌をあさる。それは犬のすることぢや、犬猫のすることぢや。紀の六郎左衛門、畜生の眞似してまでも、命が惜いとは存じ申さぬよ。（罵る。）

伊賀。　夫に揺り寄る。）先刻は和田どのに亂心狂氣と罵られ、今また入道には犬畜生と辱しめられ、かくても武士の面が立ちまするか。わが子にも一族にも郎等にも見はなされ、家を汚し、名を汚し、生きて甲斐ある身とおぼしめすか。さりとは日頃にも似給はぬ、見苦しいことでござりませうぞ。

六郎左。　この上は論は無益ぢや。

（又もや弓をふり上ぐれば、五郎兵衛は見かねて遮る。）

五郎。　あゝこれ、入道。日ごろの癖とは云ひながら、殿にむかつて餘りの無禮ぞ。

六郎左。　えゝ、なんの無禮。かゝる卑怯者を殿とはいふまい。犬……犬を打つのぢや。

正儀。　（嘆息する。）日ごろ親しむ妻子郎等すらも斯くまで我を卑むものを、まして年頃のかたきたりし足利方、さては天下の大小名、この正儀を不覺者よと、さこそ嘲り笑うであらうな。

六郎左。　それを知りつゝ降參とは……。

正儀。　身を犧牲にして世を拯ふのぢや。

六郎左。　えゝ、まだ云ふか。

（打たんとするを五郎兵衛は遮る。この時、下手より三輪七郎出づ。）

七郎。　熊王どの元服の用意、萬端とゝのひ申した。和泉守どのお待受けにござりまする。

伊賀。　しからば兎もかくも設けの席へ……。

五郎。　御出座願はうし存じまする。

正儀。　おゝ。

（正儀は塵うち拂うて起つ。六郎左衛門は顔をそむけて物いはず。皆々つゞいて起つ。一日幕をひき付けて、すぐに引返す。）

（三）

舞臺一面に薄緣をしき、三方折り廻して襖。

（上手に楠正儀、つゞいて楠正勝。すこしく下りて志貴新八郎侍座す。下手に和田正武、つゞいて三輪七郎。すこしく前にすゝみて熊王丸、茶筌髷、直垂にて坐す。湯淺五郎兵衛立ちかゝりて熊王の髪を搔きあげてゐる。好きところに燈臺、瓶子、三方、土器等ありて、正儀の前にて烏帽子をのせたる三方を置く。）

五郎。　（髪を搔きあげ終る。）髪あげ相濟み申した。（正儀は會釋して退く。）

正儀。　熊王、元服めでたう候ふぞ。烏帽子の役は和田和泉守。髪あげの役は湯淺五郎兵衛。かの人々に挨拶せられい。

熊王。　和田どの。湯淺どの。かたじけなう存じまする。（一禮す。）

正武。　熊王、およそ初冠の祝儀に於て、おのが烏帽子親と賴むは、日ごろより何事に付けても、

日本映畫學校圖書

この人をこそと心にたのみ思へばなり。和殿すでに正武を烏帽子親と頼むからは、それがしと生死進退を俱にすること、異存はあるまいな。その返答確と承はつたる上ならでは、めつたに烏帽子は被せまいぞ。（正儀を尻目にかけて云ふ。）

熊王。　その御念にはおよびませぬ。生死……進退……誓つて違背つかまつりますまい。（云ふ聲すこしく顫へてきこゆ。）

正・武。　むゝ。さらば祝ひ申さうぞ。

（正武は中央にすゝむ。新八郎は心得て、烏帽子をのせたる三方を正武の前に直す。正武、烏帽子をとりて熊王のかしらに置く。）

正武。　烏帽子名は小次郎正寛。（いひ聞かせて、更に左右を見かへる。）方々にも御披露申す。

（云ひ終りて正武は舊の座にかへる。熊王は默禮して烏帽子の緒をむすぶ。五郎兵衞進み出で、櫛を以て再び熊王のおくれ毛を搖きあげる。）

五郎。　御祝儀相濟み申した。

熊王。　殿、おん禮申上げまする。

正儀。　おゝ、あつぱれの男となつたぞ。みな祝へ。

正勝。　和田小次郎どの。

皆々。　祝着ざふ。

（日々に祝へば、熊王は頭を下ぐ。）

正儀。　さて小次郎。そちも已に烏帽子被たる上は、今までの童にあらず。武士の嗜み、とりわけて武邊の心がけを忘るゝな。元服の式終りしのちは、一座の者がたがひに初陣の物語りして、さかづきを廻らすが楠の家例ぞ。誰にもあれ、いざ先づ語つて聞かせよ。

正武。　われ等が初陣の物語は、いくたびか云ひ古し聞馴れて珍らしうもあるまい。一座のうちには年壯の太郎どの。かの住吉初陣の功名話を、この席にて語り聞けられい。

正勝。　いまだ若輩のそれがしが方々の聽く前にて、贋れがましう語らんほどの功名も手柄もござらぬに……。この儀は御免。

熊王。　いや、いや、推して申さんも如何なれど、彼の住吉の軍ものがたり、御内の方々より直々にうけたまはるは今宵が初度、なにとぞお聞かせくださりませ。

正儀。　小次郎も所望といふぞ。そちの詞の足らざるところは、父が補うて申さうほどに、臆せず語れ。

正武。いざ疾う、疾う。

（二人に促されて、正勝は少しく座をすゝめて形をあらためる。）

正勝。さらば少しく語り申さう。それがしの初陣は正平十八年七月、攝州住吉の合戰候ふ。敵の大將は同國の守護職たる赤松太夫の判官光範、人數はおよそ三千餘騎ときこえ申した。味方はそのなかばにも足らぬ小勢を三手に分ちて、先陣はかく申す正勝、住吉の社を左手にみて、眞一文字に走せむかふ。

熊王。むゝ。（思はず膝をすゝむ。）

正儀。足輕どもの矢軍に半晌あまりを移せしが、敵はさすがに赤松なり、左右の備を張りひろげて、三面よりつゝみ擊たんとす。あらおぼつかな。かくては網の魚とならんずるぞ。先づ左手の敵より追んまくりて、旗下を横より脅かせと、正儀みづから馬を立てゝ濱邊の方へ討つて出づ。

熊王。してその敵の大將は。

正勝。その手の敵の大將は、宇野六郎光連。こゝ大事の場所を破られじと、岸の松原を足場としで、追つつ返しつ戰うたり。

正儀。あつぱれ敵や。いで其儀ならば目に物みせんと、水に馴れたる軍兵二百餘人を海にむかはせ、水中より引詰め引詰め散々に射る。これには敵もたまり得ず、しどろになつて散亂す。

熊王。むゝ。

（熊王は拳を握りてまた進む。正武はこれに屹と眼を注ける。）

正勝。されども六郎は名を惜む武士、おくるゝ味方を勵まして、ひと歩も退かじと戰ひしが、運つきては是非もなし、身には數ケ所の痛所を負うて、松が根を枕に生害す。

熊王。むゝ。して、その首級をあげたるは。

正儀。最期の際に正儀ゆき合うて、首は手づから受け取つたり。六郎すでに討たれたれば、その日の軍は……。

熊王。むゝ。

（熊王はいよ〳〵激して膝をすゝむるを、正武屹とみて、俄に聲をかける。）

正武。しばらく。（正儀のものがたりを遮る。）やあ、小次郎。おのれ決鬪眼して抑もなんとするぞ。退れ、すされ。

（五郎兵衞と七郎は素破やと走りかゝつて熊王を組み止めんとす。）

熊王。騒がれな、方々。忍ぶとすれば色に出でて、われにもあらで唯今の無禮、和田殿おん目に觸れて恥かしや、口惜しや。（涙をぬぐふ。）この上はなにをか包み申すべき、小次郎正寛は殿をかたきと狙ひ申した。

（皆々は顔を見あはせる。）

正儀。（騒げる色もなく。）不思議のことを聞くものよ。正儀身に取つて仇と怨まるゝおぼえ無し。さては小次郎、そちも此度の和睦をいさぎよしとせず、憤りの餘りにわれを刺さうとか。

熊王。まことそれがしは北朝の帝をいたゞく者、このたびの和睦を喜びこそすれ、怨むべきいはれ候はず。七年このかた、殿を仇と狙ひしはわたくしの恨、一分の意趣にて候ふぞ。

正儀。わたくしの恨とはいよ〳〵心得ぬ。して、そちは何者の子ぞ。

熊王。今うけたまはりし住吉の軍に、討ち負けたる赤松殿こそ累代の主君、討死したる宇野六郎こそ現在の父で候ふなれ。

正武。さては宇野六郎の子供にて、父の仇を討たんがために、この城内へ入込みしか。

熊王。父が討たれしみぎりは、それがし甫めて十一歳、をさなごころにも其無念やみ難く、素性をかくして參り仕へ、あはよくば大將に一太刀怨みまゐらせんと、ひそかに時節を待つといへども、斯くとは知し召されぬ我が殿のあつき御情にほだされて、討つべきかたきを討ちも得ず、いたづらに今日まで送りぬ。七年といへば長き月日、そのあひだに取つ置いつ、もだえに悶え、迷ひに迷ひて、なやみ續けし苦しさは、いかばかりかと思召す。推量あれや、方々。（泣く。）

正武。それほどの望みありとも知らず、行末は物の用にも立つべき者ぞと、われも共々に不憫をくはへ、烏帽子兒とまでして得させしに……。

熊王。その御恩を思ひまはせば、空おそろしく勿體なく、手づから烏帽子を置かれしときは、さながら大磐石をいたゞく心地、頭も碎くるばかりにおぼえて候ふぞ。和泉守どの。迚ものおん情には、烏帽子被せたるこの首を介錯しては給はらぬか。小次郎、これにて自害つかまつる。

（腰刀をぬかんとするを、正武は制す。）

正武。はやまるな、小次郎。かく尋常に名乘るからは、死ぬるも生くるも大將の沙汰を待て。あたら若者、むざとは殺すまいぞ。なう、左馬どの。

正儀。和泉守が申すごとく、あたら健氣の若者をいかでか妄にうしなふべき。あまり殊勝の心に

めでて、正儀討たれて遺りたうは思へども、われにも年來の望みあり。事成就するまでは惜しき命ぞ。ついては小次郎、復讐の儀は思ひたえて、むかしの主君に歸參せよ。赤松は都にあり、途中は人を以て送らせうぞ。

熊王。　かさね〳〵の御芳志、小次郎謝するに詞無し。さりながらかたきの首をひつさげて歸らんと、一旦誓つて出でたる某、その本意をも得遂げずして、唯おめ〳〵と戻らるべきか。死ぬにも死なれず、かへるにも歸られぬ、この身の果を何とせん。（ぢつと思案して、落ちたる烏帽子を拾ひとる。）和泉守どのにこの烏帽子を返上申す。

正武。　む、。さては再び烏帽子をきぬ所存な。

熊王。　それがしの覺悟を御覽あれ。

（熊王は刀をぬきて頭髪を切拂ひ、烏帽子にのせて正武の前におく。）

熊王。　烏帽子名の正寛をそのまゝに、今よりあらためて正寛法師。お見知り置きくだされい。

正勝。　して、正寛御坊のおちつく先は。

熊王。　往生院の上人を師とたのみて、敵と味方の菩提を弔はん。

正儀。　殊勝にも覺悟せられたり。この正儀も弓矢をとつて鬪諍に生涯を送りし身の上、未來の苦患を救うてくだされ。

熊王。　これまで仇と狙ひし殿も、今となりては恩怨無二。

正武。　こゝろを清うし、身を淨うして、出家堅固に得道あれ。

熊王。　この上は一刻も早う法の門出……。方々の御武運長久を祈り申すぞ。

五郎。　今うけたまはつて知つたる小次郎殿の素性來歴。

新八郎。　さすがは勇士の子たるに恥ぢず、いにしへの曾我殿儕にも劣らぬ孝心。

七郎。　われ〳〵一同感に堪へて、おぼえず落涙仕つた。

正武。　げに方々の云はるゝ通り、宇野小次郎、あつぱれ武士ぢや。それについて左馬どのに問ふことあり。小次郎ほどの若者すらも、身を敵中に投げ入れて、親のかたきを狙うたぞ。和殿の親御は誰に討たれた。

（正儀默して答へず。）

正武。　そのかたきの足利と、今更和睦のさかづきしては、この小次郎法師にも笑はれうぞ。

正儀。　その小次郎も恨みを捨てた。

正武。　恨みを捨てたは情のためぢや。

正儀。われは天下の人のためぢや。和殿はいよ〳〵降參な。

正武。え〻、又しても天下の爲……。さらば正儀。

正儀。枯れたる楠が再び芽をふくとも、正儀の決心は再び動くまいぞ。

正武。む〻、この上はかさねて云ふまい。それほど軍がおそろしくば和殿も小次郎のあとを追ひ、その烏帽子など搔なぐり捨て〻、墨染の法衣にさまを變へ、念佛題目の六字七字、勝手に唱へて世を送られい。我等には又われらの覺悟がある。いざ方々。

（正武は席を蹴つて起てば、正勝も決心して起つ。五郎兵衞も七郎もつゞいて起ち、下手の襖を荒らかにあけて去る。正儀、熊王、新八郎の三人殘る。）

新八郎。おだやかならぬ彼の方々の振舞、あるひは一同袖をつらねて當城内を退散せらるゝかとも相見え申すが……。

正儀。おそらく千劍へ立籠りて、最後までも鬪ふ覺悟と察せらるゝぞ。勇氣にはやる彼等の目には、この正儀がよく〳〵の卑怯者と見ゆるであらうよ。（さびしく笑ふ。）臆病者か剛者か、百年の後ならでは判るまいなう。

熊王。むかしの熊王は知らず、今の正寛法師は南北兩朝にゆかりなき身の上、いづれを敵、いづれを味方と定むべき。たゞ〳〵國治りて民安かれと願ふのみ。

正儀。その太平も近きにあらうぞ。

（上手の襖を細目にあけて、伊賀の局うかゞひ居り、始終を聽きて、嘆息す。）

第三幕

（一）

水分村の獵夫住家。壁など壞れたる破家。上手は竹藪。下手には田畑など遠くみゆ。前幕の翌朝にて遠雷の聲きこゆ。

（雉六は竹緣に出でて矢竹を削り、妹お村は爐に楢を折りくべてゐる。）

雉六。楢が大分燻るやうぢやの。

お村。きのふの雨に濕つたので、今朝は兎かくに燻つてなりませぬ。

雉六。　なんぼこゝらは山家でも、三月の末に蚊いぶしは些と早からうぞ。はゝゝゝ。いや、早いと云へばなんだか雷の音がきこえるやうぢやが、けふの天氣はどうであらうな。（空を視る。）

（奥より兄の雉郎出づ。）

雉郎。　雉六、けふも日和はおぼつかないの。時ならぬ雷が鳴るではないか。

雉六。　花もちり果てぬに雷が鳴るとは、旬外れの陽氣ぢやなう。

雉郎。　このごろの世の中では、夜も晝も春も夏もごつちやになるのは不思議もあるまい。

雉六。　兎もかくも濕れる覺悟で出ねばなるまいよ。

雉郎。　むゝ、おれも今の中に弦調べでもして置かうか。

お村。　兄さん。お前達はけふも殺生に出る氣でござんすかえ。

雉六。　さればこそ此通り、朝飯も濟まぬうちから矢竹を削つてゐるではないか。

お村。　きのふの大事に黐りもせず、又も弓矢を持ち出して、二度のあやまちしたら何となさる。一度なればこそ赦しもすれ、二度が三度と度かさなつては、いかにお慈悲ぶかい殿様でもなか〳〵赦しては下さりますまい。

雉郎。　あやまつて人をあやめ、あまつさへ御神木の楠に矢を射かけた科人、所詮助からね命と一旦は覺悟をきめたが、殿様のおなさけで、ゆるして歸すと聞いたときには實に夢のやうであつたよ。なるほど、妹の云ふ進り、これに黐りて弓矢を捨て、獵夫渡世をやめる筈ぢやが、日頃から諄くもいふ通り、今の世の中ではさうもなるまい。

雉六。　おれ達も元は百姓、人なみの田畑も有つてはゐたが、年々つゞく軍のさわぎで、田も畑もふみ荒され、詮事なしに今の渡世ぢや。この上に弓矢をすてたら、盗みでもするよりほかはあるまい。現在の證據は隣村の次郎作、むかしは相應の木綿商人であつたが、今では盗人の仲間に這入つた。

雉郎。　又この村の孫七は、立派な酒造りの家に生れたが、一昨年のいくさに店を焚かれて、今は野武士となつたと云ふぞ。かれらも腹からの惡人ではないが、世につれて盗人ともなり、野武士ともなり、やがては人が獸にならう。それもみんな軍のためぢや。

雉六。　これが當の世の中なら、たとひ過失にもせよ人を殺したからは、けふ一日は稼業をやすんで、追善供養でもする筈ぢやに、それを打捨てゝ殺生に出ようとは、これもやつぱり世につれて、獸のやうな怖ろしい料簡になつたのであらうよ。

お村。　ほんに情ないことでござんすな。世間の人は兎も角も、せめてお前達だけは……。

雉郎。　いや、いや、おれは生れ付いての片意地者ぢや。殿様が軍を止めぬうちは俺も殺生をやめまいと、一旦心に誓つたからは、死んでも誓ひは破るまい。かういふ時世に生れたがおたがひの不運、又かういふ片意地の兄を持つたが、お前の不運とあきらめて、もう云ふな、いふな。

雉六。　出端にそのやうな愚癡を云ふと、きのふのやうなけちがつくぞ。兎かう云う間に湯でも沸かして、早く朝飯の支度をせい。

お村。　あい。

（お村は爭ひかねて、又もや爐にむかへば、雉六は再び矢を削り、雉郎は弦を入れたる桶を持ち出づ。雷の音遠くきこゆ。下手より三輪七郎は家來數人を具して出づ。）

七郎。　誰そあるか。

お村。　はい。（門に出づ。）どなた様でござります。

（七郎つか〳〵と庭に進み入る。）

七郎。　われ等はお城の武士ぢやが、このたび千劍の城、にはかにお手入れとあるに依て、當村内の百姓どもにこと〴〵く夫役を申付くる。今日午の刻までに相違なく集まらうぞ。

雉郎。　して、なんの御用意でござりまするな。

七郎。　要害堅固の千劍の城、かねて用意は整うてあれど、若殿を始めまゐらせ、和田どの其餘の御一門、俄にかしこへ御引移りと相成るのぢや。

雉六。　それは又どういふ譯でござりまするな。

七郎。　えゝ、おのれらの知る所でない。たゞ此方の指圖次第に働けばよいのぢや。

雉郎。　いや、働きますまい。

七郎。　なんと。

雉郎。　大方また軍の御用意でござりませうが、わたくしどもは軍は大嫌ひでござりまする。お城を取毀つお役なら、なんどきでも罷り出ませうが、堅固の上にも堅固に取り立てる、お城普請のお手傳ひはどうぞ御免くださりませ。

お村。　あゝ、これ、兄さん。そのやうなことを……。

（心配して制すれども、雉郎は顏をそむけて取合はず。）

七郎。　さりとはおのれ不屈奴。年來御領内に住みながら、勝手を云ひたて、夫役の御免を願ふな

雉六。　んどとは、どの口を以て申すぞ。多寡が五日か十日の御奉公、つゝしんでお受けをいたせ。たとひ五日が三日でも、夫役はもう〳〵御免でござりまする。なんの彼のと名をつけて一年三百六十日の中、半分は夫役に取らるゝ。それでは第一に商賣がなりませぬ。わたくしどもは軍のお手傳ひに生れて來たのではござりませぬ。

七郎。　やあ、云ひたきまゝの雑言、もはや容赦はいたすまいぞ。

（太刀に手をかけて進む。兄弟も弓矢と山刀をひきよせて身構ふれば、お村はあわてゝ遮ぎる。七郎は家來を見かへれば、家來共は走りかゝつて兄弟を引立てんとす。兩人は弓と山刀にて鬪ひしが、雉郎は庭にて七郎におさへられ、雉六は縁の上にて家來共に押伏せらる。お村はうろ〳〵してゐる。この以前より伊賀の局は旅姿にて侍女ひとりを連れ、熊王丸は旅僧のすがたにて出で、門口にうかがひ居たりしが、此時、伊賀の局は先づ聲をかける。）

伊賀。　七郎、待ちや。

七郎。　や、お局には思ひも寄らぬところへ……。

伊賀。　仔細はみな聽きました。その獵夫の成敗はしばらく妾にあづけてたもれ。

（伊賀の局は内に入る。熊王も笠をとりて續いて入る。）

お村。　おゝ、熊王どのには……。

雉郎。　きのふに變つたそのお姿は、どうなされたのでござりまする。

熊王。　仔細あつて熊王は昨夜俄に發心して、かやうに様を變へたのぢや。

三人。　へえ。（顔を見あはせる。）

七郎。　して、それがしをお止めなされたは。

伊賀。　この兄弟の夫役を免さうためぢや。

七郎。　仰せではござりまするが、唯今かれらを赦す時は、ほかの者共もこれを見習うて、一々故障を申し立つるは知れたこと。かくては御用が勤まりませぬ。

伊賀。　いや、この二人には、わらはが別に頼むべき用事がある。どうぞ妾に貸して給れ。どうでもならぬか。

七郎。　いや、左様ではござりませぬが……。

伊賀。　行きがかりとは云ひながら、武士に手向ひした雉郎とやらの兄弟、七郎に一應の詫をしや。

雉郎。　はあ。

（雉郎は土に手をつく。家來共も雉六の手をゆるめる。）

七郎。お前さまの御用とあれば、強ひて兎かう申すべきではござりませぬ。しからば兄弟。このたびの夫役は免してつかはす間、お局の御用を何なりともうけたまはつて、せい〳〵油斷なく仕つれ。

二人。かしこまりました。

七郎。夫役の催促も當家が最後、これより直ちに歡心寺に罷り越すであらう。お局、熊王どの。おわかれ申す。

（七郎は家來を引具して下手に去る。）

雉郎。そこはあまり端近うござりまする。

雉六。むさ苦しくとも先づあれへ、どうぞお通り下さりませ。

（お村は緣にのぼりて、敷皮一枚を据ゑる。伊賀と侍女、熊王は内に入りて、伊賀は敷皮に坐り、熊王もつゞいて坐す。）

雉六。して、わたくしどもに御用と仰せられまするは。

熊王。方々はこれより吉野へまゐらるゝ。就てはそち達のうち一人、案内者としてお送り申してくれまいか。

雉六。なんの御用かと存じましたら、それは又お易いこと。わたくしが早速お供をいたしませう。

伊賀。早速の承知過分に思ふぞ。妾もむかしは吉野の御所に宮仕へしたるものなれど、年月經たれば行手も分かず。

熊王。又それがしは志すことあつて、攝州へまかり向ふ筈なれば、道中のおん供仕りがたく、然るべき案内者をと思ふにつけて、大儀ながらそち達を頼みにまゐつた。

侍女。こゝろは猛くとも女子ばかりの道中、萬事よろしう頼みまする。

雉郎。かしこまりました。弟がお供申しますれば決して御心配はござりませぬ。しかしお見うけ申せば、お前樣には御家來衆もお連れなされず、吉野へは何しにお越しなされまするな。

伊賀。今は包みても詮なきことぞ。殿はこのたび足利家と和睦遊ばされた。

雉六。え、和睦……。それはほんたうでござりまするか。

熊王。いかにも和睦と決定せられた。但しこれは殿の御一存にして、他の方々はことゞ〳〵く不同意。御子息ならびに御一族は、今早朝を以て當城を立退き、千劍へお引移りに相成る筈ぢや。夫役の催促はその爲であらうぞ。

伊賀。わらはも固より不同意にて、推して御意見申上げたれど、何事も天下のためとのみ仰せら

れて、肯き入れたまはねば力及ばず。わらはも今より城を去つて、吉野の御所へまゐり着き、お宮仕へに生涯を送る覺悟。

熊王。それがしもまた別に仔細あつて、敵にも味方にも身をよせず、往生院の御弟子となりて、一生おこなひ濟す覺悟。

お村。では、お前さまは佛の御弟子に……。きのふお目にかゝつた時には、元服の御祝儀申上げましたに、打つて變つたそのお姿、けふは何と申上げてよからうやら……。

（お村は打凋れて差しうつむく。默して聞きゐたりし雉郎と雉六は俄に膝を打つ。）

雉郎。足利方と和睦とは、さすがは殿様、よいところへ御氣がお注きなされました。なう、雉六。

雉六。一日も早く世が治まるやうにと、蔭ながら祈つて居りましたが、蟻の思ひも天とやらで、やう〳〵念がとどきまして、こんな嬉しいことはございませぬ。

（ふたりの喜ぶ顏を、伊賀の局はぢつと視る。）

伊賀。妾をはじめ、一族一門不同意の和睦が、そち達はさほどに嬉しいか。

雉郎。わたくし共ばかりではございませぬ。軍の騷ぎもこれかぎりで、世が治まると聞きましたら、近郷近在の村々では、餅でも搗いて祝ひませう。

熊王。すりやそれ程までに……。（嘆息して。）これを思へばこのたびの和睦は、殿にも深き召思のある事と察しられまするな。

伊賀。わらはは女子の世間見ず、たゞ一圖に殿をお怨み申したが、天下擧つて太平を望むからは、和睦も今は餘儀ないことか。

雉郎。軍をやめるは天道様の思召でございませう。

雉六。天に逆うては亡びまする。

伊賀。いづれにしても亡ぶる家ぢや。せめて最後を潔よう、弓矢の意地を立て拔いて……。

熊王。いや、こゝで兎かう申すも詮なきこと。一先づ吉野へお越しあつて、ゆる〳〵と御勘考遊ばしませ。しからば雉六、道中の御介抱よう致してくれ。くれ〴〵も賴んだぞ。

雉六。委細心得て居りまする。

お村。して、お前様は……。

熊王。先刻も申せしごとく、出家の門出に攝州住吉へ赴き、父が最期のあとを弔らひ、それより當國へ戻る心得ぢや。御案内は雉六にたのみたれば最早安堵。それがしはこれにてお別れ申さう。お局には道中御無事で……。

伊賀。折もあらは吉野へまゐれ。

熊王。かさねてお目にかゝりませう。

（一禮して縁に降り立てば、お村は手傳ひて草鞋など穿かせる。）

熊王。さらば御免。

（お村は熊王の忘れたる笠をさゝぐ。熊王は笠をうけ取りて、兩人は顏を見あはせる。）

お村。熊王どの。

熊王。おゝ。

お村。夢のやうございますな。

熊王。元服と同時に剃髮したる熊王、人の一生を一夜に送つた。

（雷とゞろきて、稲妻颯と閃めく。）

お村。あれ、稲妻が……。

熊王。（空を仰ぐ。）たちまち來つて忽ち消ゆ。はかなきは稲妻のみかは。戀も……望みも……なさけも……仇も……。皆これ刹那の影でありしよ。

（熊王は飄然として去る。お村は門口に出て見送る。）

伊賀。妾もすぐに……。案内たのむぞ。

雉六。はあ。

雉郎。とは云ふものゝ、やがて一と雨まゐりませうに、暫くお待ちなされましては……。

伊賀。はて、濕るゝを厭ふ身ではないわ。（起ちあがる。）

（二）

獣心寺境内、楠公首塚の前。正面に土を小高く盛りて、楠正成墓と刻みたる石碑を建つ。あたりには樹木おひ茂りて、うしろには赤坂の城遠くみゆ。

（和田正武はうしろ向きになりて墓を拜す。左右には、楠正勝、紀六郎左衞門、湯淺五郎兵衞、三輪七郎を始めとして、郎等大勢が武裝して控へたり。雷鳴りて、稲妻すさまじく走る。正武やがて拜し終りて立つ。）

正武。いかに方々。左馬の頭はわれ〳〵の諫めを容れず、年來の怨みをすてゝ、足利といよ〳〵

和議を結ぶといふ。かゝる不覺人といつまでか爭ふべき。われ〳〵はこれより金剛山に立ち越え、千劍の城に引籠りて、飽までも戰はんと存ずるなり。さればこそ楠公尊靈の見そなはす前において、あらためて他念なきを誓うたれ。南木神社の楠はむなしく枯るゝとも、われ〳〵は空しく枯れ果つまじきぞ。遠くは敏達天皇、近くは判官正成公によつて、天が下にとゞろき渡りたる楠の家に、正儀ごとき日本一の卑怯者を出しつること、かへす〴〵も無念ざふぞ。家門の恥辱は血を以て雪むるのほか無し。河内の山々かばかりに高くとも、われ〳〵一門の血を以て、峰より谷にそゝぎ下さん。この盟を忘れたまふな。

六郎左。　あれ見られよ。金剛山のいたゞきに、ひとむらの黑雲屯して、さながら下界を窺ふかとも見えつるぞ。雲のうちには雷の神います。土の下には正成公の靈います。天神地神ふたつながら照覽あれ。武士が血を啜つて誓ひしこと、かならず詐りあるべからず。

正勝。　それがしも左樣存ずればこそ、不忠の親を見かぎつて、方々と進退を俱にしたれ。けふの誓にそむく者は、身を天雷に碎かるべきぞ。

五郎。　われ等もおなじく主を捨て、これまでおん供せしからは、地獄の底へ墮つるまでも、滅多に離れ申すまじ。

七郎。　今更ならねど、城を枕にするは勇士の本意ぞ。あれに聳えし山々は、われ〳〵の骨を埋むる土とこそ存ずれ。

正武。　おゝ頼もしゝ潔よし。南朝の帝、やまとの奥に行宮を定めたまひしより、吉野の花ひらき花落ちてこゝに三十餘年、南風競はずとは申せども、われ〳〵は常に朝廷と運命をおなじうしぬ。楠の家のほろぶる時は、すなはち南朝のほろぶる時なり。南朝の末、楠の終りは朽木を倒すやうに果敢なきものではあるまじきぞ。花のふゞきを散らすがごとくに、畫くべく歌ふべく、悲しく壯ましくこそあるべけれ。方々は何とか思ふ。

六郎左。　しぼみて枯るゝも、開きて散るも、花の命は一つぞ。運つきなん時は潔よく死ぬまでよ。

正勝。　そのときは六郎左衞門、若殿ばらの先を駈けうぞ。

五郎。　おの〳〵決心せし上は、空しくこゝにあらんも詮無し。

七郎。　雨を冒して千劍へ立越え。

正武。　口々の用意つかまつらんは如何。

七郎。　勿論のことぞ。さらばこれより打立たん。

（みな〳〵起ちかゝる。雷雨の音ます〳〵烈し。）

六郎左。　又ひとしきり雷雨はげしく。

正　勝。　黒雲低く掩ひ來て。

五　郎。　天も晦く、地も冥く。

七　郎。　晝はさながら夜となつたわ。

正　武。　さりとて何程のことやあるべき。いなづまは闇を劈く。われ〳〵も闇を衝いて行かうぞ。

（正武は先に立ちて行きかゝる。電光雷鳴すさまじく、うしろの方にて落雷の聲す。みな〳〵見かへる。）

正　武。　おゝ、雷が落ちた。

六郎左。　山河草木震動して、天地もくづるゝかと思はれしは。

五　郎。　天の怒か。

七　郎。　神の罰か。

正　勝。　げに凄まじのありさまや。

正　武。　いつはりの人がこの世に多ければこそ、天も怒りて禍を降したれ。罪あるものは天を恐れよ。正しきものは恐るゝことなし。いさふれ、方々。

皆々。　心得申した。

（みな〳〵相前後して向うに走り去る。雷雨やみて天やうやく明るし。上手の木かげより楠正儀は志貴新八郎を具して出で、彼等のあとを見送る。）

新八郎。　唯今の落雷で、幸ひに雨も晴れ申した。

正　儀。　落雷は程遠からぬところと覺ゆるぞ。南木神社に禍なかりしか。見とゞけてまゐれ。

新八郎。　はつ。

（新八郎は引返して上手に入る。正儀は首塚の前にひざまづきて拜す。下手より雉郎とお村出で來りて窺ふ。正儀拜し終りて起ちあがれば、雉郎とお村は進み出づ。）

雉　郎。　殿様。

（正儀は無言にて見かへる。）

雉　郎。　熊王殿より承はりますれば、いよ〳〵和睦ぢやさうにござりまするな。お目出たいことでござりまする。

正　儀。　なぜめでたいな。

雉　郎。　楠のお家と足利のお家とが、こゝで和睦を遊ばせば、今から後は天下太平、日本中がどの

くらゐ喜ぶか知れませぬ。

お村。　數なりませぬわたくし共まで、蔭では拜んでをります。

正儀。　天下を救ふ正儀のこゝろざしは、妻にも子にも一族にも知られず、却つて土民のおのれ等に知らるゝか。いかにも正儀、天下の靜謐をねがふために、志をまげて京方と和睦した。死して名をのこすは易く、生きて恥を忍ぶは難し。正儀の苦しき胸を推量せよ。

雉郎。　若殿をはじめ和泉守どの、一旦は千劍に籠城あるとも、殿樣おはさぬ上からは、御運の末も見えて居りまする。恐れながら遠からず落城でござりませう。

正儀。　不憫ながら彼等は見殺しぢや。われはこれより上洛して、かねて申しあはせたる如く、南朝北朝の帝かはる〴〵に立つの約束をとゝのへ、萬民の安堵を謀るであらう。家の存亡子供等の安否など、かへりみるべき場合でないぞ。

雉郎。　かさね〴〵ありがたい思召、なんともお禮の申上げやうがござりませぬ。殿樣が弓矢の意地をすてゝ、いくさをお止めなさるとあれば……。

お村。　兄さん、おまへも意地を捨てゝ……。

雉郎。　む、。（持つたる弓を折つて捨つ。）わたくしもこれから殺生を止めにして、もとの百姓になりませう。

正儀。　六十餘州豐なりといへども、耕す民なくんば石原同然ぢや。民は國の基といふことを忘るるな。

雉郎。　はあ。して、これから御上洛遊ばせば、いつごろお歸りでござりまする。

正儀。　時誼によらばこの城は細川か畠山に引き渡して、常分は都にとゞまらうも知れぬ。正成公以來世にきこえたる赤坂の城に、菊水の旗は再び見られまいぞ。

（正儀は城の方をのぞみて黯然。上手より新八郎走り出づ。）

新八郎。　殿、大事でござりまする。

正儀。　大事とは……。

新八郎。　雷は恰も社頭に落ちて、さらでも枯れたる御神木は、眞二つに裂けて倒れ申した。

雉郎。　あの、御神木の楠が……。雷に擊たれて倒れましたか。

お村。　おそろしい事でござりましたな。

正儀。　わが家の運命を司るがごとき彼の楠、むかしながらに立つときは、凡夫はなほ萬一の望をつながん。さるに依て、天は先づこれを枯し、更に雷を以てこれを倒せり。われ今にして

いよ〳〵天のこゝろを覺りぬ。楠は枯れてゆく、世は榮えゆく。天下の爲にはめでたいなう。

（正儀は打笑む。雑郎とお村は感激して平伏す。）

——幕——

弟切草

明治四十五年（大正元年）一月作。
明治四十五年五月。明治座初演。

初演當時の役割――鷹飼晴頼（市川左團次）その弟晴次（市川壽美藏）晴頼の妻たちばな（阪東秀調）平井保昌（市川市十郎）鬼童丸（市川荒次郎）藤内（市川左升）むすめ百合（市川松蔦）など。

登場人物――鷹飼晴頼。その弟晴次。晴頼の妻橘。平井保昌。市原野の鬼童丸。家來藤内。その娘百合。家來五郎、六郎。童など。

（一）

花山天皇の御宇、三月のなかば。

洛中鷹司室町、鷹飼晴頼の屋敷。二重屋體にて、すべて藤原時代の屋敷のかまへと知るべし。庭には袖垣、松柳の立木などありて、下のかたは築地なり。

（晴頼の家來五郎、六郎のふたりは、庭前をはき、水を打ちなどす。晴頼の妻橘、廿三四歳、さげ髪、小袖、被衣、草履、神詣でより戻りし體にて、十七八歳の侍女百合を召連れて出づ。）

唯今お歸りでござりましたか。

六郎。　存ぜぬことゝて、御出迎へもつかまつりませぬ。
（橘はかつぎをぬぎて縁に上る。）

百合。　上加茂下加茂のゆき戻り、さぞお疲れでござりませう。

橘。　身にねがひのあるものは、伊勢熊野へすら詣るものを、多寡が二响か三响のまゐり下向、疲れたと云うては神へ恐れあり。あすも又まゐらうぞや。

百合。　雨風の厭ひなく、かならずお供をいたします。
（家來藤内、五十餘歳、烏帽子、狩衣、草履にて出づ。）

藤内。　おゝ、御參詣相濟みましたか。娘、そなたも一心に拜んで來たであらうな。

百合。　あい、あい。

橘。　下向の途中で占方にゆき逢ひ、吉凶を占うて貰うたれば、殿は御運めでたいとのことであつた。

藤内。　殿は御運めでたい……（打笑みて。）それはまことにお目出たい儀で、わたくしも先づ安堵つかまつりました。

橘。　但しほかに大いなる禍がある。よく〳〵心せよとのことであつた。

藤内。　ほかに大いなるわざはひがある……（眉をひそめる。）それはまた容易ならぬ儀で、わたくしも苦勞が一つ殖えました。

橘。　とかくに苦勞は絶えぬ世ぢや。（思案しつゝ。）けふは交野の原にて追鳥狩の御遊とうけたまはりましたが、殿のお手柄はどうであらうな。

百合。　日本一の鷹の司と、世のきこえたる殿なれば、定めて今日もあつぱれのお手柄でござりませう。

藤内。　春の獲物は雉ばかりぢやが、もし澤山の獵があれば、上より殿にも分けてくださる。これ五郎よ、六郎よ。今夜は貴樣たちも、御馳走のお相伴にあづからうぞ。

五郎。　いや、有難い、ありがたい。

六郎。　して、いつ頃お歸りであらうな。

藤内。　さればよなう。夕鳥狩とうけたまはつたれば、日暮れでなうてはお歸りはあるまいよ。
（橘にむかひ。）先づそれまでは奥でゆる〳〵御休息遊ばしませ。

橘。　では、藤内。華壇の見まはりを忘れまいぞ。

藤内。　決して油斷はいたしませぬ。

橘。　百合も來や。

百合。　はい。

（たちばなと百合は打連れて奥に入る。）

五郎。　これ、藤内どの。われ〳〵にはどうも判らぬことがあるぞ。

六郎。　殿様も奥様も、二口目には華壇の見まはりを怠るなと、毎日きびしう云はるゝが、あの華壇にはどんな大事なものが植ゑてあるのぢや。

五郎。　われ〳〵の見たところでは、なんだが詰らぬ草のやうなものばかりぢやが、あのなかに何か尊いものでもあるのかな。

藤内。　いや、それは云ふまい。貴様達はたゞ正直に番をしてゐればよいのぢや。

六郎。　なんぼ我々が新參ぢやと云うて、さう分隔てはせぬものぢや。

五郎。　おなじく番をするにしても、その仔細がよく判つてゐれば、こつちの氣の入れ方も違ふといふものぢや。かくさずに話してくだされ。

六郎。　話してくだされ。

藤内。　さう云へばそれももつともぢやが……。（考へて。）いや、いや、滅多にはいふまい。貴様達に話してよいか悪いかを、一應殿様に伺つてからのことでなければ、どのやうなお叱りを受けうも知れぬ。とかくに口は禍の門ぢや。

（晴頼の弟、次郎晴次、廿歳前後、美男なれども愚なり。烏帽子、狩衣にて、とまり木に据ゑたる白斑の鷹を持ち、奥より出でゝこの問答を聽きゐたりしが、やがてつか〳〵と進み出づ。）

晴次。　藤内、おのれは流石に賢いものぢや。新參のそやつ等に、うか〳〵と大事の祕密をしやべつてはならぬぞよ。五郎も六郎も、わしが叱つて遣るほどに、それへ出い。はて、出いといふに……。

五郎。　はあ。

六郎。　（たがひに顔をみあはせて笑つてゐる。晴次はじれて縁をふみ鳴らす。）

晴次。　え〳〵、なぜ出居らぬ。はゝあ、きこえた、兄上がお留守ぢやと思うて、わしを馬鹿にするのぢやな。さりとは憎い奴ぢや。これ、藤内。そのやうな不所存な奴等、けふかぎりに長の暇をつかはして、門前から追ひまくつてしまや。

五郎。　え

六郎。　はて、そのやうにおむづかりなされまするな。萬事は藤内が心得てをりますれば、お前様

の御名代に、五郎めも六郎めもわたくしが嚴しく叱つてやりまする。

五郎。なにとぞ長のお暇だけは御免なされてくださりませ。

晴次。おのれらは屹とあやまるか。

六郎。この通り、手をついておわびを申上げまする。

晴次。この後ともに、大事の祕密を聞き出さうなどと巧らんではならぬぞよ。

五郎。六郎。心得ましてござりまする。

晴次。おゝ、よい、よい。では、けふの所はゆるして遣るぞ。

藤内。それ、お赦しが出たを幸ひに、早う、早う。

（眼で知らすれば、五郎六郎は心得て早々に立去る。）

藤内。あれ、御覽じませ。お前さまに叱られたので、一縮みになつて逃げてゆきました。

晴次。おゝ、さうであらう。あやつ等は兎角にわしを侮つてならぬ。今度又あのやうな不埒があつたら、容赦なしに追ひ出してしまや。よいか。

藤内。今度御機嫌を損じましたら、すぐに追ひ出してしまひまする。

晴次。あのやうな奴等は毎日追ひ出しても大事ない。ぢやが、藤内。そちの娘の百合なう、あれは姿もこゝろも美しいものぢや。あれは決して追ひ出してはならぬぞ。

藤内。はい、はい。いや、わたくしはほかに御用もござりますれば、もう御免を蒙りまする。（早々に立去らんとす。）

晴次。はて、せはしない男ぢや。まあ、待ちやといふに……。もしも百合を追出すと、わしも一緒に出て行つてしまふぞ。よいか。

藤内。よろしうござりまする。

（藤内去る。晴次はあとを見送る。）

晴次。これ、欺すとおのれも勘當ぢやぞ。よいか、わかつたか。藤内、藤内。

（晴次はのび上りて呼ぶ。奥より百合出づ。）

百合。次郎様、これにおいでなされましたか。

（晴次はみかへりて、俄に莞爾する。）

晴次。おゝ、百合か。まあ、これへ來や。

（鷹をおきて坐す。百合も坐る。）

百合。おあづかりの大事のお鷹を、こゝへ持出してどうなさるのでござります。

晴次。　これは源の頼光殿よりあづかつた、冬の山といふ名鳥ぢや。白斑はさながら雪のやうにも見ゆれば、冬の山と名をつけられた。頼光殿もなか〳〵風流な武士ぢやなう。

百合。　仰せの通りでござります。して、羽翅の痛み所はもう癒りましたか。

晴次。　おほかたは癒つたやうにも見ゆるので、試しに庭さきで放してみようと思ふのぢや。が、まあそれはあとでもよい。（百合の顔をつく〴〵ながめて。）そちは相變らず美しいものぢやなう。

（百合は恥かしげに俯向く。）

晴次。　ほんにいつ見てもあでやかなものぢや、京難波津を隈なく獵つても、そちのやうな美人はふたりとあるまい。これ、わしにばかり物云はして、俯向いたばかり……。こりや、わしを嫌うてゐるのぢやな。

百合。　いえ、いえ、なんでお前を嫌ひませう。

晴次。　いや、嘘ぢや。世間の奴等がわしを阿呆ぢやなどと云ひふらすに因つて、そちもわしを嫌ふのであらう。（涙ぐむ。）

百合。　（摺寄る。）もし、次郎様。うはべにみえぬ人心、口で云はねば判らぬはもつともながら、主と家來の隔てこそあれ、お前とわたしとは乳兄弟、子供のときから一緒に育つて、仲ようあそんだではござりませぬか。だん〳〵成長するにつけ、世間の人は兎やかうと、お前のことを悪う云ふ。

（百合も思はず眼をぬぐへば、晴次は頭をたれて聽く。）

百合。　それが口惜さ、腹立たしさに、こつちも身貫屑の意地が出て、世間で悪う云へばいふほど一倍いとしさが增すものを、なんでおまへが憎からう。阿呆でも不具でも大事ございませぬ。わたしはいつまでもお前の味方ぢや、かならず僻んでくださりますな。これ、わかりましたかえ。

（顔をのぞいて優しく云へば、晴次も眼をぬぐふ。）

晴次。　そちの心はよう判つた。世間の者どもにはなんとでも云はしておけ。わしも六位の藏人晴頼の弟ぢや。鷹を使ふことならば人にはおくれぬ。そちと生涯仲よう暮して、阿呆のなんのと悪口いふ者どもを、羨ましてやらうぞ。なう、百合。さうであらうが……。

百合。　ほんにさうでございます。もう泣くこともなんにもございませぬ。

晴次。　そちも泣いてゐるではないか。

百合。いえ、いえ、わたしは泣きませぬ。

（百合もなみだを拭へば、晴次も涙をぬぐふ。この時、築地の塀を乗り越えて、鬼童丸、十七八歳、大わらはを襟につかれて垂れ、直垂の袖をくゝり、袴を膝のあたりにくゝりて素足、腰に大太刀を横へて出づ。こなたの二人はこれを見ておどろく。）

晴次。これ、これ、案内もなしに入込んだは誰ぢや。

（鬼童丸つか〳〵と進みよりて、彼の鷹に目をつける。）

鬼童丸。その鳥は頼光のか。

晴次。お丶、頼光殿から預かつたのぢや。

鬼童丸。頼光めが日本一と自慢する冬の山とはそれか。

（鬼童丸は縁に片足踏みかけて、鷹を取らんとす。晴次はあわて丶遮る。）

晴次。あゝ、これ、なにをするのぢや。

百合。仔細も云はずに大事の鳥を……。

晴次。さうぢや、さうぢや。斷りなしに人のものを取つてゆく奴は盗人ぢやぞ。

鬼童丸。（あざ笑ふ。）云ふまでもなく、われは盗人、市原野にすむ鬼童丸といふ者ぢやよ。

百合。え。

鬼童丸。彼の頼光めには恨みがある。わすれもせぬ先月の末、かれが屋形へ物盗まうとて忍び入つたを、宿直のさむらひどもに搦め取られ、大將の前にひき出されたが、頼光めはなさけを知らぬ奴ぢや。ひと思ひにこの素首を刎ねもせず、獣かなんどを扱ふやうに、鐵の鎖でわれを縛つて、厩の隅へなげ込んだわ。えゝ、いま〳〵しい奴。おのれ、鬼童丸の大力を見知らしてくれうと、その夜のうちに鎖を引き切つて、もとの古巣へ逃げ歸つた。

晴次。なに、鐵の鎖を引き切つたと……。えらい力の男よなう。

鬼童丸。が、そのまゝでは胸が晴れぬ。なにがな返報をと狙ふうちに、頼光めが祕藏する冬の山といふ鷹が、羽翅をきずつけて飛ぶことかなはず、鷹飼晴頼のもとへ手當をたのんだと聞く。これぞ勿怪の幸ひぢや。先づその鳥を引攫うて、頼光めが自慢の鼻をあかしてくれうと、晴頼の留守を見込んで押して來た。さあ、これだけ云うて聞かしたら、お身たちにも故障はあるまい。邪魔せずに渡せ、わたせ。

（鬼童丸は鷹を取りにかゝるを、晴次はなほ遮る。）

晴次。いや、いや、なんぼ云うてもお身には遣られぬ。よそから預かりの大事の鳥を、うか〳〵

人手に渡したら、兄上に叱らるゝわ。

鬼童丸。　えゝ、阿呆めがなにをぬかすぞ。怪我せぬうちに、退け、退け。

晴次。　こりや無體ぢや。百合、早う人を呼んでたも。

百合。　父さん、早う來てくださりませ。

晴次。　盗人ぢや。

百合。　ぬすびとぢや。

（ふたりが日々に呼び立てるを、鬼童丸は耳にもかけず、晴次等をつき退けて、鷹を奪ひ去らんとす。ふたりは遣らじと爭ふほどに、鷹はおどろきて飛び立ち、緒を振り切りて空中に舞ひあがる。）

百合。　あれ、あれ、鳥が……。

晴次。　逃げてしまうた。

鬼童丸。　えゝ、なんのことぢやい。

（三人はあきれて空を眺むるところへ、藤内を先に五郎六郎走り出づ。）

藤内。　盗人はそやつかな。

百合。　おあづかりの鳥を盗まうとして、たうとう逃してしまひました。

藤内。　いや、太い奴ぢや。それ、縛れ、くゝれ。

鬼童丸。　賴光めが祕藏の鷹、奪うても逃してもつまりは同じことぢや。これですこしは胸も晴れた。

五郎。　おのれ等近寄つて鬼に咬まるゝな。

六郎。　なんの……。

（五郎六郎は走りかゝつて組まんとするを、鬼童丸は突き退け蹴放して寄せつけず。晴次は小さ刀に手をかけてうろ〳〵する。藤内も加勢して組み付くを、鬼童丸は投げ退けて、庭にひらりと降立ち、もとの築地を乘り越えて逃れ去る。）

藤内。　おのれ、逃してなるものか。待て、待て。

（藤内、五郎、六郎はかれがあとを追ひつゝ走り去る。奥より橘出づ。）

橘。　はて、騒がしい。なにごとであつたぞ。

百合。　鬼童丸といふ奴が、不意に押しかけてまゐりまして……。

橘。　おゝ、冬の山を奪うて行つたか。

百合。　遣らじと爭うてゐるうちに、せき緒は切れて飛び去りました。

橘。　え。（思はず空をみる。）こりや困つたことぢやなう。これ、次郎どの。兄上が留守の間に、

あづかりの鳥を端近う持ち出して、おもひも寄らぬあやまちを仕出し、その云譯はなんとせらるゝ。相手は名におふ源氏の棟梁、頼光どのが祕藏の逸物、たゞ逃したでは濟みますまいぞ。

百合。　わたくしもお傍にありながら、このやうな粗相を仕出し、なんとも申譯がございませぬ。

橘。　そなたは女子ぢや、叱つても詮ない。次郎は男、しかも鷹飼晴頼の弟ともあらうものが、たとひ盜人に逢へばとて、あづかりの鳥を失うてならうか。鷹飼が鷹を取らるゝは、武士が太刀兜を奪はるゝも同じこと。おのが命を取らるゝとも、大事の鳥を兩袖にかゝへて死ぬるが習ぞや。家のおきて、兄の教、子供のときから知つても居ように、あまりと云へばあまりの不覺……。世間の噂に嘘はない、ほんにそなたは阿呆ぢやなう。

（なみだながらに叱られて、晴次はたゞ悄々と控へてゐる。夕暮の鐘きこゆ。）

橘。　おゝ、もう日が暮るゝ。百合、あかりの用意をしませい。

百合。　かしこまりました。

（百合も悄々起つて奥に入る。庭口より五郎出づ。）

五郎。　唯今お歸りでござりまする。

橘。　殿はお歸りか。これ、次郎どの。兄上へはわたしが術好う執りなしてあげますほどに、部屋へ退つて控へておいでなされ。

晴次。　どうぞおわびをして下さりませ。

（晴次は打凋れつゝ奥に入る。たちばなは縁に出でゝ向うを見る。六位の藏人晴頼、廿七八歳、綾したる冠をかぶり、縹色の袍に太刀をはき、指貫をくゝりて藁のはゞきに藁沓を穿ち、拳に大鷹をすゑて出づ。あとより十二三歳の童、水干をつけ、袴を膝のあたりにくゝりて、素足に草履をはき、肩に二羽の雉をかつぎ、犬をひきて出づ。）

橘。　今日はお役御苦勞に存じまする。

晴頼。　幸ひにけふは日和もよし、追鳥狩の御遊も首尾よう相濟んだぞ。かねて案内を見きはめたる交野の原、こゝの樹間、かしこの草間より、狩り立て狩り立て追ふほどに、一响餘りにおよそ廿二三羽の獲物。ちかごろ稀なる功名と、上にも御感なゝめならず、それがしも面目を施したよ。（打笑みつゝ沓をぬぎ、童を見かへる。）そちも定めて疲れたであらう。早う退つて休息せい。

童。　では、御免を蒙りまする。

（童は犬をひきて去る。）

橘。　それはお手柄、おめでたう存じまする。そのおよろこびの折柄に、申上ぐるも如何なれど隱しては濟ませぬこと……。頼光殿よりおあづかりの鳥が、ゆくへも知れずに相成りました。

晴頼。　なに、冬の山がゆくへ知れずに……。それは又いかなる次第ぢや。

（庭口より六郎出づ。）

六郎。　申上げまする。頼光殿御屋形より、平井保昌どの、お使者としてみえられました。

橘。　折も折とて頼光殿から……。

晴頼。　いや、先刻約束いたしたのぢや。なには兎もあれ、これへと申せ。

六郎。　はあ。（去る。）

晴頼。　冬の山紛失の仔細は奥で聞かうよ。橘、まゐれ。

橘。　はあ。

（晴頼と橘は奥に入る。引き違へて奥より百合は燈臺を持ちて出で、よきところに据ゑる。庭口より晴次は忍び足にて出づ。）

晴次。　これ、百合。兄上はえらう御立腹のやうであつたか。

百合。　今お歸りなされたばかりで、詳しいことはまだお聞きなされませぬ。

晴次。　兄上の御立腹はどのやうにもお詫をせうが、唯だ氣がかりは頼光どのぢや。彼のお人は大江山の鬼を退治したといふ強い大將、又その家來には獨武者の保昌をはじめとして、綱金時貞光季武の四天王も控へてゐる。あの人々が一度におしかけて來て、大切の鳥を逃したは晴次ぢや、おのれ摑み殺してくれうなどと喚かれたら、わしのやうな氣の弱いものは、おびえて死んでしまふであらう。それを思へば斯うしてゐても、わしや生きてゐる心地はせぬぞよ。

百合。　なんぼ頼光殿ぢやとて、鳥のかはりに人の命を取らうとも云はれまい。まあ、安心しておいでなされませ。

晴次。　いや、いや、めつたに安心はならぬ。今聞けば、平井保昌が使者にまゐつたとやら……。詰開きの模樣次第で、どのやうな難題をいひ出して、兄上を困らさうも知れぬ。わしは物蔭にしのんで、一伍一什を立聽きせうほどに、そちも耳を引立てゝ、なにから何まで聞き外すまいぞ。

百合。あい、あい。心得て居ります。

（五郎に案内されて、平井保昌、三十餘歳、引立烏帽子、直垂、草履にて出づ。かくと見るより晴次はあわてゝ逃げ去る。）

五郎。なにとぞあれへお通りくださりませ。

保昌。御案内、かたじけなうござつた。

（五郎は一禮して去る。保昌は縁にあがる。）

保昌。最早たそがれを過きたれど、主人の使、推參いたした。

百合。主人晴頼は衣服をあらためて、唯今お目にかゝるでござりませう。しばらくお控へ下さりませ。

保昌。今日は追鳥狩のお役相勤められ、定めてお疲れでござらう。ゆる〳〵御休息の上と申しておくりやれ。

百合。申し傳へますでござりませう。

（百合は會釋して奥に入る。ひきちがへて晴頼は立烏帽子、狩衣にて出づ。）

晴頼。保昌殿、早速に御出迎へもつかまつらず、失禮御免くだされ。

保昌。承はればけふの御狩にも、拔群の功名を立てられたと申すこと、保昌ひそかに感服いたして居りまする。ついては早速ながら、主人頼光申すには、先達て羽がひを傷け、手あてをおたのみ申したる冬の山、もはや傷み所も癒えしとあれば、あつくおん禮を申述べて、受取りまゐれとのことでござつた。

晴頼。近頃面目もなき次第、おあづかり申したる冬の山は、それがし留守の間に、いづかたへか飛び去りました。

保昌。さりとは思ひもよらぬこと……。して、それは誰の粗相でござるか。

晴頼。弟晴次は生れ付いてのおろか者、それがし留守の間に、おあづかりの冬の山を端近う持ち出し、試みに庭へ放たんとせしところへ、市原野の鬼童丸といふ奴、不意に當屋敷へ亂入し、頼光殿に遺恨ありとか申して、彼の鳥をうばひ去らんとす。こなたも渡さじと爭ふうちに、鳥はおどろきて飛び立ちしまゝ行方しれず。鬼童丸も家來どもを投げ退けて、これまたいづこへか立退き申した。

保昌。その鬼童丸といへる奴は、主君にうらみを懷くべき仔細あり。さてこそ當家へ忍び入つて冬の山を奪はんと巧みしよな。執念くもお家に仇なす奴、取逃せしは無念でござつた。

晴頼。なにはあれ、大切のお鷹をうしなひしは、晴頼が重々の不調法、いくへにも御勘辨下さるやう、頼光殿へよろしくお取りなし下され。

保昌。まことに餘儀なき次第、お察し申す。さりながら、みやこに鷹を飼ふ人あまたあれど、彼の冬の山はおそらく日本一、關白大臣の持物もその右に出づるものあるべからずと、人にも羨まれ、われも誇れる名鳥を、むざ〳〵失ひたる主君の恨、これまた察するに餘りあり。はてなう。（思案す。）

晴頼。萬一頼光殿の怒とけずば、弟のあやまちは叱つて返らず、晴次の罪は兄の身にひき受けて、いかなるお恨みをも受けませうぞ。兎にもかくにも鷹飼があづかりの鳥を失ひしは、言語道斷……。おのが職に對しても申譯がござらぬ。

保昌。いや、左までの御覺悟にも及び申すまいが、こゝに一つの思案がござる。なんとお聞きくださらぬか。

晴頼。その思案とは……。

保昌。和殿は世にきこえたる名譽の鷹飼、鷹の傷を癒べき祕方を知りながら、かつて人に洩らさず。主君頼光も屢々その傳授を請へど、和殿拒んで許さずと聞き及ぶが、このたびのあやまちの償ひとして、右の祕方御傳授くださらぬか。左ある時は主君も滿足……。

（云ひも果てぬに、晴頼ト頭をふる。）

晴頼。折角のお勸めなれど、この儀は平にお斷り申す。いかにも晴頼、多年の辛苦をつみて、鷹の傷をかならず癒すべき祕方を、たしかに存じて罷りあれど、これを知るものは一天下に晴頼一人、他人に洩すこと思ひもよらず。

保昌。それは和殿のこゝろが狹い。（微笑みて。）左ほどの祕方を知るからは、あまねく人に教ふるが、道の爲、世のためとは思はれぬか。

晴頼。晴頼が辛苦して、祕方を知つたるはおのれの爲ぢや、人の爲ではござらぬぞ。それがし鷹飼の家に生れ、幼きよりその道をきはめしが、世に鷹を飼ふ人多けれど、鷹の傷を治すべき良藥を知らぬは、まことに口惜しき限りなり。あまたある藥草のうちには、かならず然るべき藥もあらんと、あるひは深山に分け入り、あるひは荒野にさまよひ、春夏秋のわかちなく、草といふ草は殆どあつめ盡して、一々試みたる果の果に、初めて見出したる無名の草あり。その葉を搾りて、鷹の傷所にぬるときは、三日を待たずしてたちまち癒ゆ、その效實に神のごとし。（云ひかけて嘆息する。）今でこそ斯うは申せ、そのあひだ幾年の辛苦

は、そも如何ばかりと思さるゝぞ。

保昌。　されば、こそこれまでは御遠慮もしたれ。われに二つなき名鳥を失はれしからは、和殿も二つなきその秘方を御傳授あつても苦しうござるまいが……。

晴頼。　いや、いや、冬の山は日本一と云はゞ云へ、つまりが黄金を以て買はれたものぢや。晴頼の辛苦は金では買はれぬ。それとこれと一つにならうか。はゝゝゝ。

保昌。　さらばどうでも御不承知か。

晴頼。　頼光どのは云ふもおろか、關白大臣大將の御所望たりとも、決して承知つかまつらぬ。この儀はかさねて申されな。

（面を正して云ひ切るに、保昌もうなづく。）

保昌。　この上は力およばず。兎もかくも立歸つて、この次第を主君に言上し、あらためて御懸合にまゐるでござらう。おいとま申すぞ。

晴頼。　お使者御苦勞でござつた。

保昌。　御免くだされ。

（双方式代して、保昌は立歸る。晴頼は思案の體。奥より橘と百合出づ。）

橘。　すまぬ事とは存じながら、物かげから窺うて居りましたるところ、冬の山を逃せし償ひに鷹の妙藥を傳授せよといふ當座の難題、すげなくお斷りに相成りましたが、扨この上の御思案は……。

晴頼。　差當つては思案もなけれど、頼光もきこゆる名將、われが惜む秘密の方を、強ひて傳へよとも申すまいよ。

橘。　たとひ如何なる名將でも、おのが好める道にかけては、眼の曇る例もある。萬一これを根に持つて、またぞろ難題を申してまゐらば……。

晴頼。　もとより我にも過失あれば、他の難題ならば兎も角もぢや。が、秘方を洩すことだけは、命にかへても相成らぬわ。

百合。　わたくし共が差出たやうではござりますが、武勇をほこる源氏の武士、强ひて難題を云ひ募らば、おまへ様ばかりか皆々様にも、どのやうな御難儀がかゝらうも知れますまい。はばかりながら今一應御思案なされてくださりませ。

晴頼。　思案せよとは秘方を傳へよといふか。馬鹿なことを……。

（叱り付けられて取付く島もなく、橘も百合も顔見合せてゐるところへ、奥より藤内出づ。）

藤　内。　殿様。大事の祕方を人に洩すは、さだめて御無念でもござりませうが、なにを申すも相手は源氏の大將、その家來には猪武者もござりますれは、お家に祟りのないやうに、御分別ねがはしう存じまする。

晴　頼。　揃ひも揃うて同じことを……。こりや、よう聞け。およそ何事にかぎらず、辛苦を積んで得たるものは、その人一人の寶にして、餘人がみだりに侵すべきでない。おのれは手を濕らさずして、ひとが苦心の賜物を盗まうとするは、人の寶をぬすむ盗賊も同然ぢや。鷹の妙藥は晴頼が辛苦して得たる寶、飽までも祕して人にはぬすませまい。たとひ頼光、源氏の威勢を以てわれに迫るとも、われはわが寶を守つて防ぐまでよ。晴頼をかたくなと笑ふものは笑へ、こゝろ狹しと誹るものは誹れ、われは人間の正しき道理を履んでゆくのぢや。

藤　内。　なるほど、御もつともではござりまするが……。

晴　頼。　もつともと思うたらそれでよい。かさねて申すな。

藤　内。　はあ。

晴　頼。　いらざる助言を致さうよりも、おのが勤を怠るな。鬼童丸のごとき曲者が入込むも、畢竟はそち達の油斷から起りしことぢや。かゝる折には又もや何者が襲うて來ぬともかぎらぬ。五郎六郎と交代して、奥庭の華壇をしかと護れ。よいか。

藤　内。　いつもの通り、屹と張番いたしまする。

晴　頼。　行け、ゆけ。

滕　内。　はあ。

（藤内は早々に立去る。月出でて庭の面うす明るく、笛の聲遠くきこゆ。晴頼は縁に立ちて月を仰ぐ。）

晴　頼。　歌によむ春の夜のおぼろ月、しづかに空を仰いでゐれば、夢みるやうな心地ぞする。折柄きこゆる笛の音は……。次郎のすさびか。

橘。　いえ、弟ではござりますまい。大事の鳥をうしなうて、いかなる祟りを受けうかと、それのみ案じて居りまする。

百　合。　おいとしや次郎様は、生きてゐる空もないとやら。そのさなかに優長らしう、笛など吹いてゐられませうか。

晴　頼。　弟はさほどに案じて居るか。おのが罪とは云ひながら、おろか者ゆゑ不憫ぢやなう。

（晴頼は嘆息す。たちばなも百合もぢつと差俯向く。笛の聲つゞいて聞ゆ。）

（二）

晴賴屋敷の奥庭。正面に華壇を設けて、無名の藥草を植う。これは後世にいふ弟切草なり。莖は一二尺、葉は長卵形にして、おもての色は青く、裏は青く白し。葉のながさは一寸四五分、四方に出でて相對す。左右には櫻の大樹ありて、花白くさけり。おぼろ月夜。蛙の聲きこゆ。

（藤内は樹の根に腰うち掛けて、空を仰ぎつゝ、ひとり言。）

藤内。　おゝ、よい月夜になつた。どこやらで蛙が鳴くわ。花の散るころの暖かい夜に、遠く蛙の聲を聽いてゐると、どうも睡氣がさしてならぬ。いや、いや、さつき殿様が仰せられた通り、とかく油斷は大敵ぢや。うか〳〵居睡りなどしてゐるひまに、大事の草の莖一本、葉一枚ぬすまれても、それこそ大變が出來するわ。眼を皿にして見張つてゐねばなるまい。

（上のかたの木かげより晴次忍び出づ。）

藤内。　誰ぢや、誰ぢや。

晴次。　藤内、騒ぐまい。わしぢや、晴次ぢや。

藤内。　おゝ、次郎様でござりましたか。今頃こゝへ何しにござつた。

晴次。　姉上がよんでゐるぞ。

藤内。　誰を……。

晴次。　わからぬ男ぢや。そちを呼んでゐるのぢや。

藤内。　奥様がわたくしを……。（考へる。）そりやほんたうでござりまするか。

晴次。　疑ひぶかい男ぢや。まあ、兎もかくも行つて見や。

藤内。　でも、ほかに誰も居りませねば……。

晴次。　こゝはわしが番して遣るほどに、早う行きや。

藤内。　では、些とのあひだお賴み申しまする。はて、なんの御用かなう。

（藤内は小首をかたげながら、これも上のかたの木蔭に入る。晴次はあとを見送りて打笑む。）

晴次。　ふだんは賢さうな顏する老爺めも、今夜はわしに一杯食はされた。どれ、今のうちに……

（晴次は華壇に近寄りて、彼の藥草を引きぬかんとす。下のかたの木かげより百合うかゞひ出づ。）

百合。　次郎様。

晴次。　や。（おどろく。）おゝ、百合か。なぜ不意に來て嚇すのぢや。さらでも怖々でゐるところへ、矢庭に聲をかけられて、氣もたましひも消えてしまうた。（胸を撫でる。）まだこのやうに動悸が止まぬわ。

百合。　それほど怖い事をなぜなさる。人にはみせぬ大事の藥草、一枚の葉でもおろそかにするなと、嚴しい御沙汰を知りながら、むざ〳〵引き拔かうとするお前のこゝろは、どうも合點がまゐりませぬ。

晴次。　おゝ、女子にはわかるまい。わしはこの草をひき拔いて、賴光殿の屋形へ持つてゆくのぢや。

百合。　え。

晴次。　そちも知つてゐる通り、鷹の傷をなほす良藥は、すなはちこの草ぢや。賴光殿かねて所望なれど、兄上が惜んで傳へられぬ。ところが、今度の冬の山紛失ぢや。

百合。　おゝ、では、申譯にその草を……。

晴次。　なんぼ惜いと云うたとて、相手が相手ぢや。もしも事がむづかしうなつたら、わしはいふに及ばず、そちにも兄上にも姉上にも……藤內にも五郎にも六郎にも……この屋敷中の者どもに、どのやうな難儀がかゝらうも知れまい。それが悲しさ、おそろしさに、わしはもう思ひ切つた。兄上には濟まぬことなれど、この草をそつと引拔いて、賴光殿にとゞけて來れば、なにも彼も無事に濟む。これ、かならず他言せまいぞ。

（云ひつゝあたりを見返れば、百合も不安らしく左右をみる。）

百合。　なるほどそれも一應はもつともなれど、さつきの兄上の御樣子では……。

晴次。　知れたら叱らるゝは眼のあたりぢや。知れぬやうに賢う遣るのぢや。

百合。　でも、それは……。

晴次。　はて、邪魔しやるな。兎かうするうちに藤內が戻つて來ようぞ。これ、あちらから人が來るとならぬ。よう見張つてゐてたもれ。よいか。

（百合の手をとりて、下のかたへ引き向くれど、百合はまだ躊躇してゐる。）

百合。　なにやらわたしは怖いやうな……。

晴次。　わが庭の物ながら、人目を忍んでぬすむと思へば、私もさつきから怖ろしうてならぬが、こゝが辛抱ぢや。これ、誰も來やせぬか。

百合。　誰も來やせぬけれど……。

（百合は恐る〳〵下の方をうかゞひ見る。上のかたの櫻の木かげより晴頼出づ。晴次ほかくとも知らず、華壇の前に忍びよる。晴頼は無言にてその背後に立つ。）

晴次。これ、よいかや。誰も來やせぬか。

百合。大丈夫でござります。

（晴次思ひ切つて、一本の草をぬき取る。その葉音に百合はおもはず見返りて、晴頼のすがたを認める。）

百合。あれ……。

晴次。や。

（晴次もおどろきて振向くところを、晴頼はたゞ一刀に斬り倒す。晴次は草をつかみしまゝ死す。）

百合。あつ。

（おどろきて駈け寄らんとすれば、晴頼は再び血刀をふりあぐ。百合は一旦ためらひしが、思ひ定めて、つか〳〵と進み出で、晴頼の顔を屹とみる。）

百合。もし、殿様。これは何事でござります。

晴頼。仔細はおのれの胸に問へ。憎い奴を成敗したのぢや。

百合。憎い奴とて、現在の弟御様ではござりませぬか。

晴頼。なんのこれが弟か。大事の祕密を洩さうとする晴頼のかたきぢや。憎い奴め。

（晴頼は弟の死骸を蹴る。百合は死骸にとりつきて泣く。）

晴頼。（あざ笑ひつゝ血刀を納め。）はて、なにを泣くぞ。くどくも申す通り、頼光はいふに及ばず、たとひ關白大臣の威勢を以て迫るとも、大事の祕密があかされうか。冬の山紛失の罪は身にひき受けて、腹切れといはゞ腹も切らう。かくても祕密は洩さじと、かたく誓ひし兄のこゝろを、知らぬ弟めが小才覺。われに隱してこの藥草をぬすむとは、重々の罪ゆるされぬ。成敗したに不思議はあるまい。

百合。それも人によりまする。次郎様が人並ならぬ生れといふことは、おまへ様もよう御存じの筈。おろかものゆゑ不憫ぢやと先刻云はれたはいつはりか。

（晴頼答へず。百合は晴次が手に持てる草をとる。）

百合。頼光殿の怒りに觸れたら、自分ばかりか兄上にも……。（晴頼を恨めしげに視る。）姉上にも……藤内にも……五郎にも六郎にも……どのやうな難儀がかゝらうかと、罪と知りつゝ盗んだものを……。

晴賴。それが愚ぢや。

百合。おろかは最初から知れてある。おろかながらも弟は兄をおもふに、兄は弟を思はぬか。これ、御覽じませ。おまへが切つた弟御の血潮が草の葉をあかく染めてゐますぞ。

（草を晴賴の眼さきに差付ける。晴賴は手に把りてぢつと視る。）

百合。このまゝ死んでは次郎様は犬死。せめてこゝろざしの通るやうに……。

晴賴。なに、こゝろざしの通るやうとは……。

百合。それをわたくしに下さりませ。

晴賴。むゝ。（思案する。）憎い奴とは思へども……おろかな弟がかたみの一本……。（嘆息して。）どこへなりとも持つてゆけ。

（彼の草をなげ出せば、百合は拾ひて押頂く。）

晴賴。その草の名を人問はゞ……。弟切草と申しつたへよ。

百合。はあい。

（百合は草をいだきて泣き入る。晴賴も顔をそむく。夜風に櫻の花みだれて落つ。）

——幕——

佐々木高綱

大正二年十一月作。
大正三年十月。新富座初演。

初演當時の主なる役割――佐々木高綱（市川左團次）娘薄衣（市川松蔦）佐々木定重（市川新之助）馬飼子之介（市川壽美藏）姉おみの（阪東秀調）僧智山（市川左升）など。

登場人物――佐々木四郎高綱。その娘薄衣。佐々木小太郎定重。馬飼子之介。その姉おみの。高野の僧智山。鹿島與一。甲賀六郎。侍女小萬。佐々木の家來など。

江州佐々木の庄、佐々木高綱の屋敷。建久元年十二月の午後、晴れたる日。中央より下のかたにかけて、大いなる廏あり。但し舞臺に面せる方はその裏手と知るべし。中央よりすこしく上のかたには梅の大樹ありて、花は白く咲きみだれたり。奥の方には、木立のひまに屋敷の建物みゆ。

（佐々木四郎高綱、三十七八歳、梅の樹の下に立ちて馬の洗足するを見てゐる。家來鹿島與一、四十餘歳。甲賀六郎、二十五六歳。おなじく馬の左右に立ちて見る。馬かひ子之介、二十歳前後の律義なる若者。名馬生月を廏のうしろに牽き出して洗足さしてゐる。）

高綱。　けふはよい日和になつたなう。比良のいたゞきに雪はみえても時候は俄に春めいて來たやうぢや。をちこちで小鳥が樂しさうに囀づるわ。

與一。　鎌倉どのが初めての御上洛に、かやうな日和つゞきと申すはまことにおめでたい儀でござりまするな。

六郎。　お先觸れの同勢はもはや尾州の熱田まで到着したとか申すことでござりまする。

（高綱は聞かざるものゝ如く、馬のそばに進みてその平首を輕く叩きなどする。）

高綱。　子之介、よう働くな。

子之介。　はあ。（無言にて洗足さしてゐる。）

高綱。　そちが陰ひなたなく働らいて、あさゆふ心をつけて養うてくるゝほどに……。（家來を見かへる。）これ、見い。一時はすこしく衰へた馬も、このごろは再びすこやかに生ひ立つて、毛澤もひとしほ美しうなつたわ。

子之介。　（惚々と馬をみる。）よい御馬でござりまするなう。

與一。　よい筈ぢや、これは鎌倉どのが御祕藏の名馬で、世にもきこえたる生月ぢや。そちも定めて存じて居らう。かの宇治川の合戰に、梶原の磨墨に乘り勝つて、殿が先陣の功名させられたも、一つにはこの生月の働きぢやぞ。

六郎。　あの折をありさまは思ひ出しても勇ましい。名に負ふ宇治の大河には、雪解の水が滔々とみなぎり落ちて來る。川の向ひには木曾の人數およそ五百餘騎、楯をならべて待ち受けてゐたわ。

與一。　まして河の底には亂杭を打つて、大綱小綱を張りわたし、馬の足をさゝへんと巧んである。なみ〳〵の者ではよも渡すまじと見てあるところへ、殿は生月、梶原は磨墨、黑馬二匹が轡をならべて、平等院の坤、たちばなの小島が崎よりざんぶ〳〵と乘り入つた。

高綱。　（遮る。）えゝ、珍らしうもない。おけ、おけ。（馬にむかひて。）なう、生月。彼の宇治川を初めとして、つゞいて一の谷、八島、壇の浦、高綱と生死を共にして、そちも隨分働いたなう。が、それも今はむかしの夢で、そちも高綱も再び功名をあぐる時節はあるまい。あたら名馬も飼殺しぢや。（嘆息しつゝ子之介にむかひ。）けふは二日、そちが亡父の命日ぢやぞ。もうよいほどにして身を清め、佛前に回向いたせ。

子之介。　はあ。

高綱。　もうそれでよい。廏へ牽いて繫いでおけ。

子之介。　はあ。（馬をひかんとすれど動かず。）えゝ、なにが氣に入らいで拗るのぢや。さあ、行け、ゆけ。叱つ、叱つ。

（馬はたほ動かす。與一と六郎も立寄る。）

與一。　えゝ、どうしたものぢや。叱つ、叱つ。

六郎。　さあ、行け、ゆけ。

（三人は無理に牽かんとすれば、馬は狂ひて蹴散らさんとす。六郎倒る。與一等はうろたへ騒ぐ。馬は狂ひて走りゆかんとするを、高綱は遮りてその轡を取る。）

高綱。　えゝ、なにを狂ふぞ。そちにも氣に入らぬことがあるとみゆるな。高綱も狂ひたいは山々ぢやが、狂うたとて藻掻いたとて所詮は無駄な世のなかぢや。まあ、鎮まれ、鎮まれ。（馬にむかつて諭すやうに云ふ。）

與一。　（馬にむかつて罵るやうに。）この横着ものめが……。殿様が直々にお手をかけられたら、この通り、おとなしくなつてしまふたわ。

（高綱は馬の口をとりて、子之介に渡す。子之介うけ取りて廏のうしろへ牽いてゆく。六郎は馬鹿など片附ける。高綱の娘薄衣、十六七歳、侍女小萬を連れて、下のかたより出づ。）

薄衣。　父上様、これにお出でなされましたか。

高綱。　日和がよければ廏に出て、馬に洗足さするを見てゐたのぢや。

薄衣。　石山寺參詣のかへり途に、ついそこで旅の御出家様にお逢ひ申しましたれば、お連れ申してまゐりました。

小萬。　お見受け申したところが、ありがたさうな御出家様。路をいそぐと一旦はお斷りなされましたを、無理にねがうて御案内申しました。

高綱。　今日はこゝろざす佛の命日。よくぞそこに心が注いた。して、その御坊は……。

薄衣。　（小萬を見かへりて。）早うこれへお通し申しや。

小萬。　はい、はい。（引返して去る。）

高綱。　（六郎を見かへる。）女子ばかりの出迎ひは無禮であらう。そちもまゐつて御案内申せ。

六郎。　はあ。（去る。）

高綱。　薄衣と與一は奥へまゐつて、齋をまゐらする用意などいたせ。

薄衣。　かしこまりました。

（薄衣と與一は奥へ去る。六郎と小萬は高野の僧智山を案内して出づ。智山は四十餘歳、旅すがたにて笠と杖とを持つ。）

高綱。　（會釋して。）聖にはゆく手を急がせらるゝとか承はつたに、ようぞお立寄りくだされた。毎

月二日はほとけの命日でござれば、誰にかぎらず、門前をすぐる出家をよび止めて、回向を頼みまゐらするが家例でござる。

智山。唯今御息女よりも右様の儀をうけたまはつたが、さりとは御奇特のことに存じまする。してお身が佐々木殿でござるよな。

高綱。申しおくれたれど、それがしは佐々木四郎高綱、なにとぞ御見知り置きくだされい。

智山。拙僧は高野の山にすむ智山と申す者、諸國修行のために陸奥へ下り、歸り途には鎌倉より伊豆をめぐりて、これより歸山の道中でござる。

高綱。では、東海道を上られたか。

智山。あたかも鎌倉の將軍が上洛の道筋とて、宿々は以てのほかの混雜、われ等のやうな痩法師はこゝでもかしこでも追ひ散され、いやさんざんの目に逢ひ申したよ。はゝゝゝゝ。

高綱。（打笑む。）それは定めて御迷惑のことゝお察し申した。（六郎を見かへりて。）床几を持て。

六郎。はあ。

（六郎と小萬は奥に入る。）

高綱。して、鎌倉の同勢にはどこらあたりでお逢ひなされた。

智山。熱田の手前で一つになりましたが、かの同勢は二三日そこに逗留とか承はつたれば、その間にわれ等は通りぬけて、一足先に發足いたした。が、その行列の華やかさ、實に眼をおどろかすばかりでござつた。（高綱は耳をかたむけて聽く。）先づその人數は四五千騎もござつたか。

（六郎と小萬は床几を持ち來る。高綱は頤にて智山にすゝめよと命じ、おのれも亦床几に腰をおろす。六郎と小萬は一禮して去る。）

智山。（床几に腰をおろして語りつゞく。）將軍はいづこにおはすか存ぜぬが、先供には北條、梶原、三浦、畠山、あとおさへには土肥、安達……なほ數々の大小名が平家の殘黨に備ふる用心もござらう、諸國に威勢を示すためでもござらう、いづれも甲冑爽かに扮裝つて、家々の紋打つたる旗をたてさせ、小春日和の海道筋を長々と練りゆくありさまは、勇ましいとも美々しいとも譬へて申すべきやうはござらぬ。まことに前代未聞との取沙汰、われ等もこの年になるまでに、かやうな目ざましい上洛は初めて見申したわ。われ等は出家の身で、うき世のことを兎かう申すではなけれども、賴朝といふ御人は果報めでたくおはすよなう。

佐々木高綱

高綱。（ひとり言のやうに。）それも皆この高綱故ぢや。恩知らずめが……。（罵る。）

智山。恩知らずとは……。（聞き咎める。）

高綱。（苦笑ひして。）いや、これはお聞かせ申しても詮ないことぢや。先づそれよりも、高綱の懺悔を一通りお聞きくだされぬか。今日御回向をたのみまゐらする佛と申すは、わが身寄りでも無し、敵でもなし、味方でも無し、罪なくして相果てたる紀之介といふ馬士でござる。

（高綱は眉を皺めて、空をあふぎつゝ起つて徘徊す。智山は珠數を爪繰りながら聽く。廏のかげより子之介忍び出でておなじく聽く。）

高綱。（しばらくして。）かぞふれば十年以前、治承四年の秋のはじめ、蛭ケ小島に於て頼朝が旗をあぐるといふ噂、ひそかに都へもきこえたれば、われ眞先に見參に入り申さんと、忍んで伊豆へ下りしが、浪人のかなしさには馬も有たず。徒歩にておぼつかなくも辿り〳〵て、八月二日のあかつきに野洲の河原にさしかゝると、まだ明けやらぬ朝霧のあひだより、雜鞍置いたる馬を追うて來る者がござつた。これ幸ひとよび止めて馬を借受け、むかうの岸まで渡りしが……。これより遠き旅をゆくに、馬の足を假らでは不便なり、ぬすみて逃げんと馬をはやめて、二三町ばかり駈けぬくれば、馬士はおどろき追ひ來りて馬盜人よと罵りさわぐ。かくては是非も無し、馬をかへさば大事の間に合ふまじと……。こゝろを鬼にして……。

智山。（思はず叫ぶ。）あら、無慚……。山なき殺生をせられたよな。

高綱。馬を返さんとあざむいて、油斷を見すまし……。（突く眞似をする。しばしの沈默。）斯くしてやう〳〵馬を得たれば、無事に伊豆まで乘りつけて、おなじ月の十七日には八牧の屋形を攻めほろぼし、源氏再興の基をひらく。その後のことは申すまでもござらぬ。が、たゞ不憫なるは彼の馬士にて、その名を紀之介と申す由、かれの口より聞きたるを手がかりに、平家沒落の後この國中を隈なく詮議したるも容易に相分らず、このごろに至りて栗田の里に子之介といふ若者あり。（廏のかたを見る。子之介あわてゝ隱れる。）これぞ彼の紀之介の忘れがたみと知れたれば、呼び取りてあつく扶持せんと存ぜしに、彼はほかに望み無し、おのがなりはひは馬士なれば、馬飼ならば奉公せんと申すによつて、その云ふがまゝに廏の小者として召仕ひ、けふまで屋敷に置きまするが、これだけにて高綱の罪が消えませうか。せめては亡人の菩提を弔ふために、月の二日を命日とさだめ、供養をおこたらず營んで居

りまする。

智山。（うなづきて。）して、その子之介と申すはいつの頃より當家に身を寄すること、相成りましたな。

高綱。三月ほど以前でござらうか。

智山。恨みを捨てゝかたきに奉公し、勤めぶりに如才はござらぬか。

高綱。かげひなたなく正直に立働いて居りまする。

智山。それもまた奇特のことでござる。み佛は恩怨無二と說かせられた。

高綱。恩怨無二……。（かんがへる。）佛の教を學べばそのやうに悟られまするか。

智山。ほとけの教を學ばずとも、悟らるゝものには悟らるゝ道理ぢや。現に彼の子之介とやらも、

高綱。お身をかたきと恨んでは居らぬと申すではござらぬか。

子之介が高綱を恨まぬは、心からその罪を謝するといふ人のまことに感じたのではござるまいか。至誠は神を動かすとかうけたまはる。もし我に心のまことがなくば、かれも飽まで我を恨みませうぞ。天下の人に皆まことがあらば、高綱にも不足はござるまいに……。

智山。佐々木殿ほどの勇士にも、なにかこの世に御不足がござるかな。

高綱。勇士なればこそ悶ゆる胸をおさへて、かやうに生きても居られまする。弱いものなら疾うの昔に、狂ひ死でもして居りませうわ。（衝と起つ。）御坊、なぜこの世の中にはまことなき奴儕がはびこつて、正しきものが虐げられるのでござらうな。

智山。（騷がす。）正法千年、像法千年の世はすぎて、今は末法の世でござる。それを救はんがために、われ等も努めて居るとは知られぬか。

（高綱はかんがへてゐる。奥より與一出づ。）

與一。御用意整うて居りまする。

高綱。（うなづきて。）さらば、御坊。

與一。どうぞお通りくださりませ。

智山。（起ちあがりて。）御案内おたのみ申す。

（與一は智山を案内して奥に入る。）

高綱。（廏を見かへりて。）子之介は居らぬか。子之介、子之介。

（廏のかげより子之介は着物を着かへて出づ。）

高綱。御坊を佛間へ招じたれば、やがて讀經も始まるであらう。そちも參つて回向いたせ。

子之介。　はあ。

（高綱は奥に入る。子之介もつゞいて入らんとする時、下のかたより佐々木小太郎定重、廿餘歳、出づ。）

定　重。　こりや馬飼のもの、叔父上はお宿にござるか。

子之介。　はい。唯今高野の御出家様がお越しなされて、御佛間へ御案内なされました。

定　重。　おゝ、左様であつたか。御佛事の場所へみだりに推參も如何。兎もかくも定重まゐりしと申上げてくりやれ。

子之介。　かしこまりました。（奥に入る。）

定　重。　（ひとり言。）合點のゆかぬはこの頃の叔父上のありさまぢや。鎌倉殿上洛の人數も早や美濃路まで進まれたと聞くに、御出迎ひの用意もなく、そしらぬ顔して日を送らるゝは、抑もいかなる次第であらうか。（奥にて鉦の音きこゆ。）おゝ、讀經ももはや始まつたと見ゆるな。

（奥より薄衣出づ。）

薄　衣。　小太郎どの、お越しなされましたか。

定　重。　おゝ、薄衣どの。叔父上は佛間にござるさうな。

薄　衣。　はい。先づ奥へお通りなされませ。

定　重。　いや、けふは少しく心もせけば、こゝにて暫時相待ち申さう。

薄　衣。　では、それへお掛けくださりませ。

（定重は上のかたの床几にかゝる。薄衣は梅の樹に倚りて立つ。）

定　重。　叔父上の御機嫌はこのごろ何うでござるな。

薄　衣。　別にかうといふこともござりませぬが、兎かくにお氣が暴々しくなつて……。瑣細なことにもおむづかりなされて……。そばにゐる者もはら〳〵するやうな。

定　重。　御病氣ともみえませぬか。

薄　衣。　御病氣のやうでもござりませぬが……。（眉をひそむ。）

定　重。　はてなう。（かんがへてゐる。）

高　綱。　（奥より出づ。）小太郎、まゐつたか。

（定重は起つて床几をゆづる。高綱は床几に腰をかける。定重は薄衣にすゝめられて、下のかたの床几にかゝる。）

佐々木高綱

定重。早速でござりまするが、將軍御上洛の同勢はもはや美濃路まで到着とうけたまはる。やがては當國へ進ませらるゝ御日取りでござれば、叔父上にも御出迎ひの御用意いかゞでござりまするな。（高綱答へず。定重はその氣色をうかゞひて。）父は昨夜すでに出發いたしてござる。（高綱はなほ答へず。）その砌、父が申しまするには、其方は叔父上のおん供して、今夕刻よりつゞいて出發いたせと……。

高綱。（不興げに。）兄上が左樣申し殘されたか。

定重。はあ。

高綱。其方は父の指圖にまかせて、ゆきたくば勝手にゆけ。叔父は忌ぢや。（定重おどろく。）高綱は行かぬぞ。

薄衣。このあひだからお勸め申して居りまするに、なぜ御出迎ひはなされませぬ。將軍の御上洛には途中までお出迎ひ申すが武家の習。なう、小太郎どの。

定重。鎌倉の將軍頼朝公がはじめての御上洛、武藏相模は申すにおよばず、海道の大小名はすべておん供に加はるなかに、叔父上ばかりが御不承知とは……。

高綱。おゝ、不承知ぢやよ。鎌倉の將軍がなんぢや。頼朝がなんぢや。あの大がたりの大嘘つきめが……。

薄衣。あ、もし、うか〳〵とそのやうなこと……。

定重。萬一餘人の耳に入りましたら……。

高綱。おそろしいと申すのか。（あざ笑ふ。）嘘つきなればこそ嘘つきと云ふたがなぜ悪い。こりやよう聞け。石橋山のたゝかひ敗れて、頼朝めは散々の體たらく。嚙合ひに負けた痩犬のやうに、尻尾をまいて這々の體で逃げまはる。暗さは暗し、雨はふる。木の根や岩角につまづいて顚つまろびつ、泥まぶれになつて這ひあるくそのざまは……。わはゝゝゝゝ。さりとてわれに取つては譜代の主君ぢや。命を捨てゝもその難儀を救はねばならぬと、高綱かけ付けて扶け起し、それがしおん名をたまはりて防ぎ戰ふあひだ、君には疾く〳〵落ちさせたまへと云へば、頼朝めは拜まぬばかりに嬉しよろこんで、おゝ、わが身がはりに立つてくるゝか、佐々木は日本一の大忠臣ぢや。われもし生きて天下を取らんには、その恩賞として日本の半分をわかち取らすぞと、諸人の聞く前でたしかに誓うた。右樣の儀はかねて父よりもうけたまはつて居りまする。そのをりに叔父上がおん身代りに相立たゞば、頼朝公の御運も危かつたかとも存じられまする。

定重。

高綱。　高綱が源頼朝と名乗つて……おもへば馬鹿な。大童となつて必死にたゝかふ間に、頼朝めは杉山まで逃げ込んだ。高綱も幸ひに命をまつたうした。つゞいては宇治川先陣の功名、それだけでも二ケ國三ケ國の値はあらう。さて頼朝めは思ひのまゝに世をとつて、天下の大將軍と仰がれながら、命の親の高綱にはなにほどの恩賞をくれたと思ふぞ。日本の半分は云ふもおろか、四半分の又その四半分にも足らぬ捨扶持をくれたばかりで、おのれはあつぱれ主人顔ぢや。征夷大將軍、源氏の棟梁とか勿體らしく名乗るものが、恩をわすれ、約束を破つてすむと思ふか。

定重。　一應御もつともではござりまするが……。（返事に困つてゐる。）

高綱。　勿論、高綱もだまつては居らぬ。石橋山の御約束はもはや御忘れなされたかと、たび〳〵催促に及ぶといへども、四の五の云うて埒があかぬ。それにまた土肥の、安達の、三浦のといふ腰抜どもが、かしこ振つた面をして、そのやうなことを申すは第一に不忠ぢやの、やれ君命には背くなの、長いものには卷かれろのと、理を非にまげて意見をし居る。（定重をみて。）其方の父なども同じくその腰ぬけ仲間ぢや。えゝ、ばか〳〵しい。主人は約束にそむく大嘘つき、まはりの奴儕はへつらひ武士や臆病者、右を見ても左をみても、癇に障ることばかりが疊まつて來るわ。

定重。　（高綱は立つて梅の枝をれぢ折り、落花微塵に引きちぎつて地に投げ付ける。）われ〳〵若輩者が押して申上げましたら。定めてお叱りもござりませうが、今もむかもし道理はかりでは濟まぬ世の中でござりまする。たとひ叔父上に十分の道理がござりませ、とも、いまさら鎌倉の將軍を相手取つて、理非を爭ふなどとは及ばぬこと。どのやうな御不足がござりませうとも、堪忍あそばすがお家の爲、このたびは何とぞそれがしをお供に連れられて、まげて國境まで御出迎ひを……。

高綱。　最前も申した通り、ゆきたくば其方ひとりで行け。

定重。　くどうも申すやうなれど、お家を大事と思召されて……。

高綱。　えゝ、面倒な。家がなんぢや。高綱がけふ限りで家を捨てたらなんとする。

薄衣。　え、、もし、父上様……。（思はず縋らんとす。）

高綱。　（ぢつと娘の顔をみたるが、又つき退ける。）こんな馬鹿々々しい世のなかに、生きてゐる奴の氣が知れぬわ。

定重。　では、どうあつても御出迎ひには……。

高綱。　まだわからぬか。くどい奴ぢやたう。

（高綱は奥に入る。あとにふたりは顔を見あはせる。）

薄衣。　今更ならねど父上のはげしい御氣性、一旦かうと云ひ出されたら、容易に思ひ返しはなされまい。困つたことでござりまするなう。

定重。　このたびの將軍御上洛には海道筋の大小名、いづれも人數をひき連れて、路次の警固をつかまつれとあるに、叔父上のみ御不參とこれあつては後日の御咎は逃れまい。まして將軍のお側には、日ごろより佐々木一家とは仲違ひの梶原父子もひかへて居れば、この機に乘じていかなる讒言を申立てんも測られず、油斷せば家の大事……。（思案して。）兎もかくも一旦は立歸り、出發の用意をとゝのへて、再びお迎ひにまゐるでござらう。

薄衣。　もし父上が飽までも御不承知と仰せられたら……。

定重。　是非に及ばず、それがし一人にてまゐるまでぢや。萬一叔父上が御不興を蒙るとも、それがし父子が申しなだめて、無事を計るが一族のよしみ……。（詞優しく。）かならず御心配あるな。

薄衣。　なにとぞ宜しくたのみまする。

定重。　さらば重ねて……薄衣どの。

薄衣。　御出發の折には今一度お立寄り下さりませ。

定重。　無駄とは思へどお誘ひにまゐらう。

（ふたりは會釋して、定重は下のかたに入る。薄衣はあとを見送りて思案顔にたゝずみしが、これも思ひ直して奥に入る。下のかたより子之介の姉おみの、廿二三歳の農家の娘、旅姿にて出づ。）

おみの。　（あたりを窺ひて。）子之介は廏にゐると御門で教へられたが、はて何處へ行つたことであらう。

（奥より子之介出づ。）

おみの。　おゝ、弟……。

子之介。　姉様か。（なつかしげに寄る。）ようたづねて來てくだされた。

おみの。　このごろは時候もおひ〳〵に寒うなつて來たが、別に變ることもないかや。

子之介。　はい。幸ひに淨者で暮してをりまする。

おみの。　それでわたしも安心しました。

子之介。　けふは月こそ違へ、父様の御命日で、今まで奥で御回向をして來ました。

おみの。奥で……。（かんがへて。）そなたひとりで御回向をしてゐやつたのか。

子之介。殿さまと御一緒に……。

おみの。殿様も御一緒に……。人間ひとりを慘たらしう殺して置いて、回向さへすれば、罪が消ゆるかなう。（冷笑ふ。）

子之介。（愁はしげに。）姉様。お前はやつぱり殿様を恨んでゐるのぢやな。

おみの。（左右を見まはす。）これ、そこらに人はゐぬか。（子之介うなづく。）恨むが無理か、積つてもみやれ。父様は正直律義のお生れで、日ごろから露ほども曲つたことはせられなんだに、よい人にも惡い報いが來て、十年以前野洲の河原で何者にか斬り殺され、牽いてゐた馬はぬすまれた。その時わたしはまだ十三、そなたは十一で碌々に物心もつかず、唯おろ〳〵と途方にくれて、姉弟手を取つて泣いてゐた。（なみだを拭ふ。子之介もうつむいて鬱く。）かたきは誰か知らねども、見つけ次第に唯は置くまいと、歎きのなかにも胸に刻んで今まで月日を送るうちに、神佛のひきあはせか、かたきは知れた……。（再び左右をうかゞひて。）かたきは佐々木高綱とおのれの口から名乘つて來た。

子之介。十年以前野洲の河原で馬士を殺したはわが仕業と、あからさまに名乘つて出て、ゆかりのものを探し求め、むかしの罪を償ふために、あつく扶持して取らせると、御領主様からお觸れが出たときには、夢かとばかりに驚きました。

おみの。おどろきと悲みと喜びとが一つになつて、一旦は思案にも惑うたが、かたきが我から名乘つて出たこそ幸ひ、その屋敷へ入り込んで、隙もあらば恨みの刃をかたきの胸に刺し透さうと、約束したを忘れはせまい。こゝへ奉公住みして足かけ三月のあひだに、討つべき隙はなかつたか。そのたよりが聞きたさに、けふはわざ〳〵尋ねて來ました。

子之介。隙もあらばかたきを討たうと、刃を呑んで住み込みましたが、あくまでも前非を悔いた佐佐木どの、この子之介のまへに兩手を突いて、ゆるしてくれとお詫びなされた。そのまごころが面にあらはれて……。

おみの。討つべきこゝろも鈍つたか。えゝ、云ひ甲斐のない卑怯者、臆病者……。最前もいふ通り、罪もない人間ひとりを殺して置いて、わびて濟まうか。回向して濟まうか。それで堪忍がなるほどなら、けふまで泣いて暮らしはせぬ。廿歳を越しても齒を染めぬ姉の覺悟をなんと見た。姉弟が心をひとつにして、馬盜人のかたきの奴めを……。

子之介。もし。（聲高しと制する。）

おみの。　そなたは疾うからこゝに住み込んで、屋敷の案内も知つてゐやらう。今夜にも姉を手びきして……。これ、默つてゐるは不承知か、但しは今更おくれが出たか。

子之介。　むかしの罪を後悔して、毎月二日を命日に、佛事供養をかゝさず營んでくださる殿様を、いまさら執念く恨むのは……。もし、姉様。父様の死んだは是非もない災難ぢやと……。

おみの。　なに。（屹となる。）

子之介。　どうぞ諦めてくださりませ。

（おみのは呆れた體にて弟の顏をぢつと眺めてゐたりしが、やがてわつと地に泣き伏す。）

子之介。　もし、姉様。（立寄つて取縋る。）

おみの。　（狂ふがごとくに突き退ける。）えゝ、寄るな、寄るな。現在の親のかたきを眼の前に置きながら、おめ〳〵と見てゐるやうな不孝ものに、姉と呼ばるゝおぼえはない。

子之介。　たとひ佐々木殿を討つたとて、死んだ父さまが返りませうか。よしない罪を作らうよりも……。

おみの。　えゝ、卑怯者……不孝者……。もうこの上はそなたは頼まぬ。なんの相手が武士ぢやとて怖ろしいことがあらうか。かたきは妾ひとりで見事に討つてみせう。

（おみのはかゝへたる絲柄なときて、山刀をとりだす。子之介おどろきておさへんとす。）

おみの。　（振拂ひて。）えゝ、邪魔するな。放しや、放しや。

（おみのは突退けて奥へ駈けゆかんとするを、子之介はあわてゝ遮る。）

子之介。　いかにお急きなされても、女ひとりで奥へ踏み込まうなどとは狂氣の沙汰……。もし仕損じたらなんとなさる。まあ、お待ちなされませ。

おみの。　とめるな、放しや。

子之介。　でも、このまゝに遣ることは……。

（おみのは又ふり切つて行かんとするを、子之介は必死となりて縋りとめ、無理に廏のかげへ連込む。下のかたより佐々木小太郎定重、花やかなる鎧をつけて弓を持ち、家來數人を引連れて出づ。）

定　重。　（家來を見かへりて。）先刻の様子では、叔父上にもまだ御支度はなされまい。それがし參つておすゝめ申す間、其方どもはこれに控へてをれ。

家來。　はあ。

（定重は奥へゆかんとする時、奥より佐々木高綱は頭髪を切りたる有髪の僧形、直垂の袴をくゝり腰巾をはきたる旅姿にて笠を持ち出づ。あとより薄衣、與一、六郎、小萬等は打凋れて送り出づ。）

佐々木高綱

定重。（おどろく。）や、叔父上には……。

高綱。弓矢は折つた。太刀も捨てた。熊谷蓮生坊の二の舞ぢや。（笑ふ。）

定重。これは又思ひもよらぬこと、佐々木四郎高綱と日本中にきこえたる弓取が、にはかに浮世を捨てられたは……。

高綱。戀しい浮世ならばなんで捨てよう。いつはり者が上にたつ世の中、へつらひ武士がはびこる世の中、けがれた世の中、面白からぬ世の中、このやうな世の中は高綱の住むべきところでない。

定重。では、この世の中を見限つて……。

高綱。（罵るやうに。）おゝ、この世の中に愛想がつきたわ。

薄衣。幾たびおとゞめ申しても、お聞き入れがないばかりか、高野の聖のおん供して、これからすぐにお立ちとは、情ないことでござりまする。

定重。これからすぐに高野へ山入りとな。

與一。折も折とて高野の聖が、こゝへお立寄りなされたので、にはかに出家の思召、まことに夢のやうに思はれまする。

六郎。さなきだに世の中が面白からぬと仰せられてゐたところへ、恰も將軍の御上洛、その御出迎ひを強ひらるゝ蒼蠅さに、いつそ武士を捨つるとのお詞でござりまする。

高綱。委細は今聞く通りぢや。かならず騒ぐな、おどろくな。兄上に逢うたらばそのおもむきを確と申傳へてくりやれ。

（定重茫然。奥より智山出づ。）

智山。方々のおどろきも嘆きももつともぢや。われ等も一應は頭をかたむけたが、勇猛直前は勇士の本意、たとへば風を剪つて飛ぶ矢のごとくで、おのれが向はんとするところへ向ふよりほかはござるまい。（風の音して梅の花散る。）おゝ、花がちる。佐々木どのにはこれをなんと見らるゝ。

高綱。（うち笑む。）西行のやうな涙もろい男なら、無常を感じて泣くでござらう。

智山。おん身の悟は……。

高綱。高綱に悟はござらぬ。

定重。悟らずして世を捨てらるゝは……。

高綱。こんな世の中にうろ〳〵してゐるのが、忌々しいからぢや。

智山。それも一種の悟であらうよ。はゝゝゝゝゝ。

高綱。はゝゝゝゝゝ。（廏にむかひて。）生月をこれへひけ。

（子之助は生月を牽いて出づ。）

子之介。殿様、委細はあれで伺ひました。

高綱。聞いたとあらば重ねて云ふまい。これより聖のおん供して、高野へまゐる。頭をそり毀てば高綱も法師ぢや。其方が父紀之介の後生安樂を禱るであらうぞ。

子之助。ありがたうござりまする。（馬の口を取る。）さあ、お召しなされませ。

高綱。いや、今からは聖の御弟子ぢや。（智山にむかひ。）師の御坊には鞍に召しませ。われ等が車匿童子となり申さう。

智山。鎌倉の將軍にも頭をさげぬ佐々木殿が痩法師の馬の口を取らるゝか。さりとは面白い。しからば御免。（馬に乘る。）

（高綱は馬の口をとりて行かんとす。薄衣、小冬、與一、六郎、左右より走せ寄り、無言にて袂にすがる。）

高綱。薄衣は小太郎といひなづけの仲ぢや。やがては祝言して睦じう暮せ。與一そのほかも堅固であれ。やあ、小太郎。

定重。はあ。（進み寄る。）

高綱。高綱一家のあとをたのむぞ。

定重。委細承知つかまつりました。

高綱。よし。（取られし袂をふりきつて。）さらば……。

（行かんとする時、廏のかげよりおみのは山刀をぬき持ちて走り出づ。）

おみの。父様のかたき……。（切つてかゝる。）

高綱。（身をかはしてその手をとらへ。）誰ぢや（顔をみて。）おゝ、子之介の姉か。（微笑みながら突きはなす。おみの倒れる。）こゝにも悟られぬ人があるなう。

智山。冬の日のくれぬうちに大津の宿まで。

高綱。はあ。

（高綱は馬の口を取りてゆく。皆々あとを見送る。おみのは又起ちあがりて行かんとするを、子之介は抱きとめる。三井寺の鐘の音きこゆ。）

――幕――

御影堂心中

大正十一年一月作。

大正十一年二月。新富座初演。

初演當時の主なる役割――八桝太夫（市川中車）八十之進（中村時藏）妹お政（尾上榮三郎）井筒屋源六（市村羽左衛門）下男角藏（中村鶴藏）石灰屋土右衛門（片岡市藏）折子おらん（尾上梅幸）伊賀屋おとめ（吾妻市之丞）手代八兵衛（尾上幸藏）など。

登場人物――街八桝太夫。街八十之進。八十之進の妹お政。井筒屋源六。下男角藏。下男三平。石灰屋土右衛門。大坂屋の折子おらん。御師四郎太夫。伊賀屋おとめ。大坂屋の手代八兵衛、與助。伊賀屋の手代平吉。馬士權作。ほかに折子。參宮の道者など。

上の巻

（一）

伊勢の御師、街八桝太夫の家。正面は式臺の附きたる玄關口にて、幕を打ちまはしてあり。（元祿の末年。九月下旬の朝。玄關には八桝太夫のせがれ八十之進、二十三歳、机をひかへて帳をつけてゐる。表には下男三平が箒を持ち、おなじく角藏が水を打つてゐる。神樂の音きこゆ。）

角藏。ゆうべの空合ではどうかと案じてゐたが、今朝はおあつらへの上天氣、旅立よしといふ暦も嘘ではないなう。

三平。この分では京までの道中も日和つゞきであらう。今度の京入りは大當りらしいぞ。

角藏。はゝ、羨ましがるな。毎年のことながら、これは物見遊山の旅といふでは無し、御用のお供となれば氣骨が折れるわ。

三平。それでもやつぱり羨ましい。來年は是非おねがひ申しておれがお供に立たねばならぬ。それは今から斷つて置くぞよ。

角藏。來年のことならなんとでも云へ。はゝゝゝゝ。さうは云ふものゝおれは深切者、今朝立つといふ出先にまで斯うして貴樣の手つだひをして遣るわ。さあ、もうこれで御掃除も濟んだ。おれは部屋へ戻つて自分の支度をしなければなるまい。あとは貴樣にたのんだぞ。

三平。よい、よい。

角藏。おれの留守にも横着するなよ。

（角藏は笑ひながら行きかけると、八十之進は筆をやめて聲をかける。）

八十。これ。角藏。

角藏。はい、はい。

八十。もう一切の支度はよいな。暦お祓のたぐひはもう馬につけて出したか。

角藏。殘らず積ませて遣りましてござります。

八十。おゝ、それでよい。毎年のことながら道中はよろしく賴むぞ。

角藏。かしこまりました。

八十。けふは巳の刻の出發、父上と源六どのは暇乞ひの御參宮にまゐられて、追つ付け戻らるゝ筈。そちも身支度をいたして置け。

角藏。すぐに支度をいたします。

（角藏は會釋して下のかたに去る。）

三平。けふは大々講の御參詣はござりませぬか。

八十。（帳を繰つて。）けふは無い。あすは三組ぢや。忙がしいことであらう。

三平。さやうでござりますか。

八十。父上お留守のあひだは、誰も彼も氣をつけねばなるまいぞ。

三平。はあ。

（三平はそこらを掃いてゐる。神樂の音。向うより街八桝太夫は烏帽子、素襖、五十歳前後。井筒屋源六は二十三歳、羽織袴、御師の手代のすがたにて出づ。）

八桝。源六、よい日和になつたなう。

源六。結構なことでございます。

八桝。これも太神宮の御加護、勿體ないことぢや。

（ふたりは話しながら玄關口に來る。八十之進は起つて出迎へる。）

八十。お歸りなされませ。

八桝。お暇乞ひの御參宮相濟んだればこれでよい。暦お祓そのほかは積み出したな。

八十。はあ。まだ巳の刻までには間もございますれば、ゆる〳〵と御支度なされませ。

八桝。荷物を送り出したれば、支度と申しても手廻りの挾み箱一荷を仕舞ふばかり。これ源六、そちは慌て者ぢや。いつものやうにそゝくさして忘れ物などをすまいぞよ。

源六。はい。ゆうべのうちに何も彼も取りそろへて置きましたれば、いつでもお供が出來まする。

八桝。それは早手廻しであつたな。

（二人は玄關にあがる。）

三平。お草履はもうよろしうございますな。

八桝。おゝ、よい、よい。

（三平はふたりの草履を持ちて下の方に去る。それと行きちがひに下のかたより御師四郎太夫は旅姿、供の男に挾み箱を持たせて出づ。）

八十。おゝ、四郎太夫どの。もはや御出立でございまするか。

八桝。手前もやがて出立つかまつる　先づお上りなされ。

四郎。いや、さうしては居られませぬ。御同道申す筈でござつたが、途中で松坂に立寄らねばならぬ所用出來いたしたれば、失禮ながら一足お先へまゐる。その御挨拶に鳥渡參上いたした。

八桝。それは御丁寧のこと。しからば御遠慮なくお立ちくだされ。手前もあとから參りまする。

四郎。御存じの通り、京の定宿は山城屋、お着きになつたればすぐにお尋ねくだされ。

源六。かならずおたづね申します。

八桝。手前の定宿は御影堂の大坂屋、御存じでござらうな。

四郎。よく存じて居りまする。では、ごめん下され。

八十。　道中御機嫌よろしう。

四郎。　留守中はよろしくおたのみ申す。

（四郎太夫は供をつれて下のかたに去る。）

八桝。　四郎太夫どのが出立とあれば、おれもどうやら心が急く。どれ、奥へ行つて支度にかゝらうか。八十之進も手傳うてくりやれ。

八十。　はい、はい。源六どの、しばらく頼みますぞ。

（八十之進附添つて、八桝太夫は奥に入る。源六は入れかはつて机の前に坐り、帳を繰りなどしてゐる。上の方より參宮の道者ひとり出で、そこらを見まはしながら玄關口に立つ。）

道者。　こちらは八桝太夫どのでござるな。

源六。　左様でござる。御參詣の御案内をおたのみかな。

道者。　いや、こちらに井筒屋源六といふ大坂のお人がござりまするか。

源六。　その源六は手前でござる。

道者。　では、こなたが源六どのか。わたくしは京の者、町内の伊賀屋といふ店の奉公人から源六といふ人にかならず手渡してくれと、この狀をたのまれてまゐりました。こなたは確にその源六どのでござるな。

源六。　さりとては疑ひぶかい。（玄關さきに出る。）神のまへで嘘が吐かれうか、兎もかくもその狀をお見せなされ。

道者。　たしかにお渡し申すぞ。

（源六はその文をうけ取り、上書の筆蹟を見ておごろく。）

道者。　よろしうござるな。

源六。　よろしうござる。たしかに源六がうけ取りました。

道者。　では、お暇申しまする。

源六。　御苦勞でござつた。

（道者は下の方に去る。源六はあたりを窺ひながら文の封を切つてよむ。奥の襖をあけて八十之進の妹お政、十八歳、出づ。源六はそれに氣がつかず、一心に文をよんでゐる。お政はそつと寄りて、その文をのぞく。源六は初めて心づき、あわてゝその文を隠さうとする。）

お政。　奥で父さまが呼んでゝござります。

源六。　叔父様が呼んでゐる。おゝ、さうか。

お　政。　その文はどこから參つたのでございます。

源　六。　え。

お　政。　（妬ましさうに。）誰から屆いたのでございます。

源　六。　なに、これは……あの四郎太夫殿からたつた今來たのぢや。

お　政。　四郎太夫殿はもう立たれたではございませぬか。

源　六。　その四郎太夫どのが立際にあづけて行かれたのぢや。

お　政。　して、その御用は……。

源　六。　その用は……あとからすぐに來いとある。

お　政。　それだけのことでございますか。

源　六。　おゝ、それだけでほかには何にも書いてない。

お　政。　それだけのことが、そんなに長く……。

（お政は又覗かうとするを、源六は押退けながら文をうしろに隱す。）

源　六。　はて、そなたの知つたことではない。

（源六は文を袂にねぢ込んで逃げるやうに奥へゆく。お政は妬ましげにあとを見送る。）

（二）

おなじく奥の廣間。平舞臺にて正面に神棚をしつらへ、注連を打ちまはしてあり。下のかたには中仕切の板戸の外に次の間ありて、その正面には出入りの襖あり。上のかたにも板戸の出入口あり。

（下の方の襖をあけてお政出で、人を探すやうに正面の廣間へ來る。上のかたの板戸をあけて八十之進出で、出逢ひがしらに顔を見あはせる。）

八　十。　妹、わしを探しに來たのか。

お　政。　いえ、いえ、おまへではござらぬ。源六どの……。

八　十。　源六は父上のところにゐる。なんぞ用か。

お　政。　もし兄様。（八十之進にさゝやく。）

八　十。　なに、源六のところへ女子の文が來た。して、それは誰がとゞけてまゐつた。

お　政。　それはわたしも知りませぬが、長い長い女子の文……。どうぞ詮議してくださりませ。

八十。はてな。（考へる。）さりとて源六も今は出先ぢや。そのやうな詮議してもゐられまい。

お政。出てしまうたら、なほ〳〵詮議が出來ぬではござりませぬか。

八十。それもさうぢやが……。いづれにしても時が悪い。父上の耳に這入つては面倒、まあ騒ぐな。

お政。でも、あの手紙はどこから來たやら、どうも氣がかりでなりませぬ。兄様が詮議して下さらずば、いつそ父様に云ひまする。（上のかたへ行きかゝる。）

八十。（お政を止める。）はて、めでたい出先に、そのやうなことを云ふものでないといふに……。

（上のかたより八桝太夫出づ。お政は父をみて走り寄る。）

お政。もし、父様。（泣く。）

八桝。はて、なにを泣く。むゝ、きこえた。また源六と喧嘩したか。（優しく。）さりとては困つたものぢや。いとこ同士といひ、やがては二人が祝言する仲、縁に縁をかさねたれば、親や兄にかくしても諸事に氣をつけて、いたはらいではかなはぬ筈。些とのことは我慢して、かならず源六と云ひ合ふまいぞ。ましてこれから旅へ出るといふ矢先に、不吉の涙など見せるものでない。たしなめ。

お政。それはよう知つてゐますれど、これはほかならぬこと。源六殿のところへ女子の文がまゐりました。

八桝。むゝ。（八十之進と顔をみあはせる。）もしや大坂から屆いたのではないか。

お政。大方さうであらうかと案じられてなりませぬ。

八桝。（八十之進に。）源六は奥で挾箱を仕舞うてゐる筈ぢや。これへ呼べ。

八十。呼びまするか。

八桝。呼べ、よべ。

八十。はあ。（起つて上の方に入る。）

八桝。お政。そなたはその文を讀んだか。

お政。たゞそつと覗いたばかりで、なにが書いてあるやら判りませなんだ。

八桝。いや、案じることはない。あしかけ二年越しこゝにゐて、たましひも入れ代つた源六、それはこの叔父も見きはめてゐる。併し一應は念のためぢや。こゝへ呼び出して聞いてみよう。

お政。どうぞさうしてくださりませ。

日本映畫學校圖書

（上の方の板戸をあけて、八十之進と源六出づ。）

源六。（下の方に坐る。）なんぞ御用でござりますか。

八桝。ほかでもない。そちのところへ女子の文がとゞいたさうぢやな。どこから參つた。

源六。はあ。（お政の方を見かへりて躊躇する。）

八桝。たしかに來たか。

源六。（思ひ切つて。）まゐりました。が、こゝでは……。

八桝。見せられぬか。

源六。はあ。（やはり躊躇してゐる。）

八桝。いや、こゝは内輪同士ぢや。遠慮にはおよばぬ。早く見せい。

源六。では、御覽に入れます。

（源六は袂より以前の文を出してみせるを、八桝太夫はうけ取りて讀みはじめる。三人は默つて八桝太夫の顏色をうかゞつてゐる。）

八桝。（よみ終る。）むゝ、判つた、わかつた。源六が昔馴染のおらんといふ女、今では京の伊賀屋といふ扇屋に奉公してゐるのか。

源六。その扇屋の折子に住み込んだと見えます。

八桝。しかしその伊賀屋にも住兼ねて、近いうちに又どこへか奉公がへをする筈。その節には又あらためて知らせると書いてある。次第に因つては大坂までたづねて行かうかと存じて居つたに、京へ奉公にのぼつたとは丁度幸ひぢや。この文の日附は八月の晦日、その後に住みかへしたとても伊賀屋で聞けば屹とわかる。いまさら念を押すまでもないが、このおらんと云ふ女に未練はあるまいな。（文を卷き納めて、源六の前に投げてやる。）

源六。決して未練はござりませぬ。

八十。（少しかんがへて。）妹、そなたは些との間あちらへ行つてゐやれ。

お政。え、あちらへ……。

八十。文の正體もわかり、源六殿の返事もわかつたら仔細はあるまい。しばらく遠慮しやれ。

お政。はい。

（お政は澁々起つて下のかたに入る。源六は文を拾ひて袂に入れる。）

八十。（一膝すゝめる。）源六どの。父上が今度の京のぼりは曆配り、お祓くばり、それは例年の御用、めづらしくもござらぬが、そのついでに、彼のおらんといふ女にたづね逢うて、こな

たと三鼎で縁切つてくる筈。その出立の矢先へ折よくか折悪くか女の文、久振りにそのたよりを聞いて折角の決心も鈍りはしませぬかな。

源六。これは思ひも寄らぬこと。文を見たゞけで心が鈍るほどなら、顔をみたら何としませうぞ。おらんは年上、しかも昔は勤めの女、若氣の迷ひから親の勘當うけ、京三界をうろたへ廻つて、果は叔父さまや八十之進殿のお世話に相成り、町人のせがれが御師の手代となつて二年越しの宮仕へ、その辛抱がお目にとまつて、從妹同士のお政どのを源六に妻合せて遣らうといふ叔父様のありがたい思召を、なんで疎略に存じませうぞ。たつた今うけ取つた女の文を焼きもせず隠しもせず、叔父さまの御覽に入れましたは、女に未練をのこさぬ證據、どなたもお察しくだされ。

八十。それを承はつて手前も安堵いたした。妹もさぞ喜ぶことでござらう。端下ない悋氣も所詮はこなたを思へばこそ、かならず愛想をつかして下さるなよ。

八桝。源六とお政とは從妹同士といひ、たがひに憎うも思はぬ様子、いつそ二人を女夫にしてはとおれも思ひ、せがれも云ふ。勿論そち達にも得心させて、大坂の姉のところへも竊に知らせてやつたれば、早速に返事が來て、源六の身性もなほり、お政どのとめでたく祝言するからは、おやぢにもその譯を打明けて、屹と勘當ゆるして遣らうと大喜びで云うてよこした。

源六。それもこれも叔父様の御恩、なんともお禮の申上げやうもござりませぬ。大坂で井筒屋といへば世間にも知られた七間間口の粉屋、そこのひとり息子に生れながら、おらんといふ女に迷うたばかりに身のおきどころもない始末。こちらのお情にあづからずば、今頃は孤を着てゐようも知れませぬ。思へばおらんといふ女は源六のかたきでござりました。立派にあいつと縁を切り、お政どのと祝言して、親どもの勘當ゆり次第に夫婦連れ立つて大坂へ立歸り、身を粉に碎く粉屋の商賣、井筒屋の屋臺骨をみごと踏みこたへて見せませう。立派の口上、滿足ぢや。縁切りが不得心なら初めから一緒にゆかうとは云はぬ筈。自分から進んで行かうといひ、且は神の御前で唯今の誓言、もう疑ふところはない。おもはぬ長詮議に時刻が移つた。どれ、出發いたさうか。

八十。それが宜しうござりませう。

八桝。源六。立際にこれへも參拜してまゐれ。

源六。はあ。

（八桝太夫と源六は正面の神棚に向つて拜む。八十之進もあとに下りて拜む。八桝太夫は拜し終りて起ちあがる。）

八桝。　さあ、これでよい。源六も早う支度いたせ。

（云ひすてゝ八桝太夫は上の方に入る。八十之進もつゞいて去る。源六はあとに殘りて、袂よりおらんの文を出してみる。）

源六。　折も折、丁度出先にこのやうなものが舞ひ込んだので、叔父様や八十之進どのには餘計な心配かけ、お政には疑はれる。もう忘れてしまつてゐる女、幾月振りで便りを聞いても、むかしの源六に復らうか。（文を疊に打ちつける。）

（下の方よりお政忍び出てそつと窺つてゐる。源六は文を持ちて起たうとして、不圖みかへりてお政と顏を見あはせる。お政はあわてゝ逃げようとするを源六は呼びとめる。）

源六。　あ、これ、お政どの。

お政。　え。

源六。　まあ、こゝへ來やれ。

お政。　あい。

（お政は前とは打つて變つて、恥かしさうに入り來る。）

源六。　さつきからそこに聽いてゐたか。

（お政はだまつて俯向いてゐる。）

源六。　聽いてゐたら諄くは云ふまい。そなたも大抵は知つてゐる通り、わたしにはおらんと云ふ女があつて、それがために親の勘當まで受けたが、今ではもうさつぱりと忘れてゐる。叔父様と八十之進どのと三人だけの相談で、こなたにはまだ隱してゐたが、今度叔父さまの供をして京へゆくのも、その次手におらんをたづねて、あいつと緣を切つて來る筈。なんと判つたか。

お政。　（小聲で。）それは今初めて知りました。

源六。　そのまゝに捨置いて、後日にいざこざが起つても面倒、お政と祝言せぬまへに立派に緣を切つてしまへと叔父さまは云はるゝ。わたしもその意見にしたがつて、今日出立といふ矢さきに、丁度ひさしぶりで女の文がとゞいた。今では未練のない女なれど、どうもそなたには見せにくいので、その文を隱したはわたしが惡い。かたらず氣まづく思うてくるゝな。叔父様にも見せたからは誰にも隱すことはない、あとで勝手に讀んでみやれ。（文をお政の

まへに置く。）

お　政。　それでお前の心はよく判りましたが、若しそのおらんとやらいふ人が、どうでも縁切りをきかなんだら……。

源　六。　なんぼ肯かぬと云うたところで、こつちが思ひ切つた以上、どうにもならぬことではないか。まあ安心して待つてゐやれ。今度京から戻つて來れば、吉日を擇んでめでたく祝言。そなたは忌か。

お　政。　（嬉しさうに。）なんの忌でござりませう。それはおまへもよう知つてゐる筈ではござりませぬか。

源　六。　さうなれば源六の勘當もゆりる。運が開けてめでたいことだらけぢや。喜んでくれ。

お　政。　あい。（源六のそばに寄る。）

（この時、上のかたより八十之進出づ。）

八　十。　これ、源六どの。

（二人はあわてゝ離れる。）

八　十。　まだ、支度をせられぬか。

源　六。　はい。すぐにまゐります。

（源六は彼の文を早く仕舞へと眼で知らせる。お政は文を袂に入れる。八十之進はそれに眼をつけて安心する。）

——幕——

下の巻

（一）

京の御影堂、大坂屋の店先。二重屋體の上のかたは帳場にて、正面に戸棚、壁には諸國へ送る荷づくりの帳面など澤山にかけてあり。まんなかは奥へ通ふ土間にて、正面に暖簾の出入口あり。下のかたは扇店にて、扇箱や地紙箱などが積んであり。軒には御影堂と書きたる扇の看板をかけ、軒の柱には大坂屋甚阿彌といふ札をかけてあり。店の前には大いなる柳の立木あり。下のかたには町家

御影堂心中

つゞきて見ゆ。

（九月の末、午後。扇屋の折子三人が店さきにて扇を折つてゐる。帳場の方には手代八兵衛が帳面をつけてゐる。馬士權作は柳の木に馬をつなぎて鞍の荷をおろしてゐるを、手代與助が手傳つてゐる。）

與　助。　もうこれで荷物はみんなか。

權　作。　さうでござる。送り狀と突きあはせて見てくだされ。

（權作は送り狀を出す。與助は荷物と引きあはせてゐる。八兵衛は筆をおいて聲をかける。）

八兵衛。　これ、これ、與助。このあひだは荷物の不足で、荷主どのからむづかしく云はれた。よく氣をつけねばなるまいぞ。

與　助。　あい、あい。大丈夫でござります。

八兵衛。　大丈夫か。念には念を入れろよ。して、荷主どのはどこの誰ぢやな。

與　助。　伊勢の八桝太夫どのでござります。

八兵衛。　お〻、八桝太夫どのか。今年はいつもよりも早いお上りぢやな。（立つて店さきに出る。）八桝太夫どのとあれば、猶以て氣をつけねばならぬ。よいか、荷物に別條ないか。え〻、貴樣では埒があかぬ。その送り狀をおれにみせろ。（送り狀と荷物とを引きあはせて見る。）お〻、よい、よい。たしかに相違ない。（權作に。）受取りかいて遣らうかな。

權　作。　いや、荷主殿もやがてこゝへ見える筈ぢや。受取りには及びませぬ。

八兵衛。　では、八桝太夫どのがすぐに見えるか。

權　作。　八桝太夫でも三莊太夫でも荷物さへ送りとゞけたら私の用は濟む。さあ、戻りませうか。

（馬の綱をとる。）では、手代どの。

與　助。　御苦勞であつたな。

權　作。　（馬をひく。）さあ、ゆけ、行け。ほてつぱらな。

折子一。　（笑ふ。）これ、馬士どの。なにがほてつぱらぢや。

折子二。　ほんに歌舞伎でも淨瑠璃でも、馬士さへ出ればほてつぱらといふ。

折子三。　さう云はにやかなはぬか、をかしいことぢや。

三　人。　は〻〻〻〻〻。

權　作。　はて、ほつこしも無いこと問ふ人達ぢや。どうでも私等の口ぐせで、ほてつぱらなと云はなければ、立つ機がなうて往なれませぬわ。

折子一。　そんなら立端のよいやうに……。

三　人。　（大きい聲で。）ほてつぱらな。はゝゝゝゝゝ。

權　作。　はゝゝゝゝゝ。

（權作は馬をひいて下のかたに去る。）

八兵衞。　これ、これ、與助。このお荷物は奥庭の井戸のそばの座敷へ運んで置きや。これ、これ、女子ども、おちついてゐてはならぬ。伊勢から八桝太夫といふお客が追付け見ゆるといふ。いつも上下ふたりか三人ぢや。その積りでお膳ごしらへをせねばならぬ。風呂も早う沸して置きや。秋の日はみじかいに、何をうぢ〳〵してゐるぞ。早う、早う。

三　人。　あい、あい。

（折子三人はそこらを片附けて奥に入る。）

八兵衞。　どれ、どれ、おれも手傳つてやらうか。

（八兵衞も與助に手つだひて、荷物を奥へ運んでゆく。向うより八桝太夫は旅裝束。源六と角藏も旅すがたにて挾み箱や手荷物をかたげて出づ。）

八　桝。　おゝ、これぢや、これぢや。家の作りも新しうなつたので、すつかりと見違へてしまうた。角藏、案内せい。

角　藏。　はい、はい。（奥にむかひて。）これ、これ、誰ぞ居らぬか。

與　助。　はい、はい。

（與助は奥より出で來りて、三人に會釋する。）

與　助。　おゝ、これは、これは。お早いお着きでござりました。先づ〳〵おかけ下さりませ。

八兵衞。　（奥より出づ。）おゝ、八桝太夫様。お久振りでござりました。お荷物は唯今とゞきまして、奥へ運び込んだところでござります。

八　桝。　去年の大火でどうあらうかと案じてゐたが、さすがは都ぢや。もうさつぱりと建揃うたので、すんでのことに見忘れるところであつた。いづれも無事で先づは珍重、主人にも變ることはないか。

八兵衞。　ありがたうござります。主人甚阿彌は用事あつて大坂までまゐりましたが、おほかた明晩の夜舟で戻るでござりませう。おゝ、角藏どの。こなたも無事でお供かな。

角　藏。　今年もお供をして來ました。

八　桝。　これ、これ　源六。みち〳〵も云ふた通り、こゝは御影堂の甚阿彌といふ店で、むかしか

らの習、扇屋もすれば旅籠屋もする。おれが毎年の定宿ぢや。手代衆とも近附きになつて置きやれ。

八兵衛。　なるほど知らぬ御家來ぢや。（源六をじろ〳〵見る。）わたくしは手代の八兵衛。

與　助。　わたくしも手代の與助。

八兵衛。　なにぶんお心安くたのみます。

源　六。　わたしは源六、よろしく頼みます。

角　藏。　その挨拶が濟んだら、早く旦那樣のおす〻ぎを……。

與　助。　ほんにうつかりしてゐました。これ女子どもや。おす〻ぎの水を持つて來やれ。御主人と御家來で三人ぢやぞ。

八　桝。　いや、こゝへ着いたら急ぐに及ばぬ。朝夕はめつきりと冷えてまゐつたな。

八兵衛。　まつたく秋風が身にしみてまゐりました。（奥にむかひて。）これ、なにをしてゐるのぢや。白粉つけて出るお客樣でない。これはずんと物堅いお人ぢや。

角　藏。　早う美しい折子たちの顔が見たいな。はゝゝゝゝゝ。

（奥より折子三人は盥を持ちて出づ。）

三　人。　ようお出でなされました。

八　桝。　今度もまた厄介になるぞ。

（八桝太夫は草鞋をぬぎ、女どもは手傳ひて足をあらふ。奥より折子おらん、廿六歳、盆に三つの茶碗をのせて出づ。）

おらん。　さぞお疲れでござりませう。先づ旦那樣からお出花一つめしあがりませ。

八　桝。　お茶なれば奥でゆつくりと飲まうものを……。いや折角ぢや。こゝでたべませう。（茶碗を取つてのむ。）

おらん。　さあ、御家來衆もお茶まゐれ。

（おらんは何心なく源六と顔を見あはせて、たがひにあつと驚きしが、左右を憚りてしばらく無言でゐる。）

角　藏。　あ、これ、あぶない。茶がこぼれる。さつきから喉が渴いてゐた。お先へ御免。（手を伸ばして茶碗を取りて飲む。）

おらん。　（源六に。）おまへもおあがりなされぬか。

（源六も茶碗をうけ取りて飲む。角藏はそれに眼をつけてゐる。）

八兵衛。　お茶が濟みましたら奥へ御案内。さあ、お通りくださりませ。

八　桝。　こゝへ來着いたら急にくたびれが出たやうな。どれ、奥で休息いたさうか。源六も角藏も洗ぎしまうたら早う來やれ。

八兵衛。　それ、御案内申せ。

與　助。　あい、あい。

（與助は草履を八桝太夫のまへに直し、案内して奥の暖簾口に入る。）

八兵衛。　これ、これ、女子ども。お膳もお風呂も支度はよいか。その用が濟んだらば、早う勝手へ戻つて來や。（云ひ捨てゝ奥に入る。）

おらん。　（折子等に。）もし、みなさん。こゝはわたしが引受けました。おまへ方は奥の御用や勝手の御用、よいやうに頼みますぞ。

三　人。　あい、あい、ようござんす。

（折子三人は奥に入る。）

角　藏。　はて、源六様には何をうつかり。早う草鞋をおぬぎなされぬか。

おらん。　いえ。まあ、おまへから先へお洗ひなされませ。わたしがおすゝぎを取りませう。

角　藏。　では、御免を蒙つて、おれから先きに洗ふとしようか。

（角藏は店に腰をかけ、おらんに手傳はせて草鞋をぬぎ、足を洗ふ。そのあひだもおらんは源六の方をたび〳〵見かへる。）

角　藏。　（おらんの肩をたゝく。）これ姐御、こなたも何をうつかりしてゐるのぢや。おなじお供でも、身分も違へば年も違ふ。第一に男振りが違ふ。やつぱりあちらに目移りがするとみえるな。こゝな浮氣者めが。

おらん。　え。

角　藏。　はゝゝゝゝ。さあ、源六様も早う洗つてお貰ひなされ。

おらん。　（角藏に。）おまへはもう濟みました。旦那様が待つてござらう。早う奥へお出でなされませ。（草履を土間になほす。）

角　藏。　はて、せはしない。旦那の前へ出れば窮屈、先づこゝで一服して行かうか。

おらん。　いえ、いえ、それは迷惑。早う行つてくださりませ。

角　藏。　迷惑とはなにが迷惑ぢや。

おらん。　迷惑と云うたのは……。かうして店先を塞いでゐられては、こちらが迷惑。どうぞ頼みま

す。早う奥へ行つてくださりませ。

角　藏。（笑ふ。）それほど頼むか。

おらん。あい。たのみます。

角　藏。頼むならば行つて遣らう。（起ち上る。）さあ、案内しやれ。

おらん。案内せいでもすぐに知れまする。その暖簾口を這入つて眞直においでなされば、そこらに誰か居りませう。

角　藏。さりとは不精な女子ぢやな。

（角藏は奥に入る。おらんは奥をうかゞひ、源六も起つてあたりを窺ふ。）

おらん。もし、源六どの。ようたづねて來て下された。（なつかしさうに摺り寄る。）

源　六。（ひやゝかに。）こゝにゐると知つて尋ねて來たのではない。顔を見ておれもびつくりした。先月末の日附で出したそなたの文は、伊勢を立つ日に丁度とゞいて、御影堂の伊賀屋にゐると書いてあつたが、いつからこゝに來てゐるぞ。

おらん。おまへも知つてゐる通り、初めは木辻、それから曾根崎となが れ渡りの仲居奉公。かうした姿におちぶれながらも、やつぱり故郷は忘じがたく、もう一つには五里でも、七里でもおまへの居所に近寄りたさに、先月から傳手を求めてこの御影堂の折子に來ました。それは文にも委しくかいてあげた筈。

源　六。（やはり冷かに。）いや、それは勿論知つてゐるが、來ると間もなく伊賀屋からなぜこの甚阿彌へ奉公がへをしたのぢや。主人が氣に入らぬか。それとも朋輩と折合でも惡かつたか。

おらん。さあ、すこし面倒なわけがあつて……。

源　六。面倒な譯があつて……。

おらん。一月ばかりで伊賀屋からこゝの家へ奉公換へしました。

源　六。むゝ。さうであつたか。（茶をのんでゐる。）

おらん。ほんになにが仕合せになるやら判らぬもの。こゝへ住み換へをしたればこそ、一日でも早うお前に逢はれて、こんな嬉しいことはない。二年越し逢はぬ間にお前は大層おとなびたやうな。（なつかしさうに再び男を見る。）まして三歳も年上のわたしぢや。さだめて老けて見ゆるであらう。それが今更かなしいやうな。これ、源六どの。ひさしぶりで逢ひながら、今までのやうになぜ打解けて物を云はれぬか。しばらく離れてゐるうちに、わたしに愛想が盡きたのか。

源　六。　え。（ぎつくりする。）

おらん。　ほゝ、これは常談ぢや。氣にかけて下さるな。おまへに限つてそのやうなことのあらう筈がないのは、わたしもよう知つてゐる。

（源六は迷惑さうに顏をそむけてゐる。おらんはなほ摺寄る。）

おらん。　それよりも先づおまへの身の上、一緒に連れ立つて來たのは伊勢の叔父様か、但しはよそ

源　六。　の御主人か。

おらん。　あれは正眞正銘の叔父で、伊勢の八桝太夫といふ人、後に引きあはすほどに挨拶しやれ

源　六。　わたしのことを何もかも知つてござるのかえ。

おらん。　知つてゐる。何もかも知つてゐる。

源　六。　それを知つてゐる叔父様に逢うて大事ござんせぬか。

おらん。　（云ひにくさうに。）どうで逢はずには濟まされまい。

源　六。　逢うてなんと挨拶しませう。

（いよ〳〵困つて。）さあ、何とでもよいやうに挨拶しやれ。どれ、おれも奥へ行かうか。

（源六は草鞋を解きかけるを、おらんは止める。）

おらん。　まあ、もう少し話しがある。おちついてゐなさんせ。

源　六。　一夜どまりと云ふではなし、どうで幾日も逗留する身の上、くはしい話はゆる〳〵聞かう。早く行かぬと叔父さまに叱らるゝわ。

（源六はおらんに手傳はせて草鞋をぬぎかゝる。この以前より石灰屋土右衛門、三十餘歳、下のかたより出で來りて、柳のかげに窺ひゐたりしが、この時ずつと進み出づ。）

土右衛。　やい、源六。久しいな。

源　六。　おゝ、貴樣は……。

土右衛。　粟田口からあとに附き、さつきからこゝに待つてゐるこの男が、おのれの眼にはかゝらぬか。石灰屋の土右衛門を見わすれたか。

（土右衛門はつか〳〵進みよりて、源六のむなぐらを摑む。）

土右衛。　おのれよくも五兩二分の金をおれから騙つて逃げ居つたな。見つけ次第に仕置をする。覺悟ひろげ。

源　六。　いや、かたりとは以ての外。こゝは店先、往來の人も聞く。めつたなことを云ふまいぞ。

土右衛。　えゝ、ぬすびと猛々しいとはおのれのことぢや。そのしやつ面を土足にかけねば、土右衛

門の腹が癒ぬわ。さあ、表へ來い。

（無二無三に源六をひき出し、頭髪をつかんで捻ぢまはせば、おらんはうろ〳〵して止める。）

おらん。　あゝもし、落着いても話のなること。まあ、まあ、待つてくださりませ。

土右衛。　えゝ、邪魔するな。

源　六。　そなたはあぶない。退いて居れ。かうなつたら問答無益ぢや。

（源六も土右衛門の胸ぐらをつかみ、ふたりは組んづほぐれつ挑み合ふ。）

おらん。　（奥にむかひて呼ぶ。）もし、喧嘩ぢや、喧嘩でござんす。早う來て止めて下され。

（奥より八兵衛、與助と折子ども等はどや〳〵と出づ。そのうちに土右衛門は源六を大地に捻ぢ伏せる。）

八兵衛。　これ、土右衛門どの。なんとしてその狼藉ぢや。

土右衛。　いや、狼藉でない。仔細をきけ。こいつが親の勘當うけ、京三界をうろたへ廻るときに、この土右衛門がふと近附になつた。伊勢にゐる叔父をたよつて身の落着きをきめたいが、義理のわるい借金や買ひかかりを踏み倒して夜逃げもならず。質においた着物も一通りは受戻したい。それには五兩二分の金がいると云うて、おれからその金を借りて行つた。やい、源六。なんと嘘か。

源　六。　いかにもその金子は借りたに相違ない。その延引の申譯は……。

土右衛。　その云譯はもう遅い。金が返せぬなら返せぬでよし。文のたよりにでも一筆斷つてはなぜよこさぬ。あしかけ二年越の無沙汰、おのれになんと云譯があらうとも、おれの方では料簡せぬ。みれば竹切れのやうな刀をさして、寺侍か御師の手代にでも出世したか。そんなことでびくともする土右衛門でない。貸した金を取らぬ代りに、腹の癒るほど踏んでやる。さあ、どいつでも加勢したらおれが相手ぢや。默つておとなしく見物せい。

（土右衛門は源六を酷たらしく踏み又打つ。）

おらん。　なんぼ腹が立つとても、踏まずと叩かずと仕様があらう。もうよいほどに堪忍してくださりませ。

（おらんが取り付くを土右衛門は突き倒す。）

土右衛。　これで二年越しの胸も開けた。やい、源六。すこしは骨にこたへたか。土右衛門が住家は昔のところぢや。云分あらばいつでも來い。

（土右衛門は源六を突き放して下のかたに立去る。暖簾口より角藏うかゞひゐて、土右衛門のあと

な迫はんとするところへ、八桝太夫も出づ。）

八桝。こりや待て、角藏。かれのあとを追つて何とする。

角藏。でも、あんまり口惜うござります。彼奴、そのまゝにしては置かれませぬ。

八桝。その無念はわれも同様、往來で家來を打擲され、たゞそのまゝに捨置くべきではなけれども、借りた金の斷り云はずに、二年越しも打過ぎたは源六の不行きとゞき。土右衛門とやらの仕方は憎けれど、かれの申すところにも一應の道理はあると、胸をさすつて堪へてゐた。急くところでない。まあ、鎭まれ。

角藏。はあ。

八兵衛。（氣の毒さうに。）ふだんから氣のあらい男、迂濶に止めやうもござりませずつまことにお氣の毒なことを致しました。

八桝。店先きを騷がしてこなたこそ氣の毒。こりや源六。この返報はな、又云ふ時がある。辛抱せい。それにつけても借用の金、そのまゝにして置いてはならぬ。すぐに行つて拂うて來い。

（懷中より金をとり出し、紙につゝみて與ふれば、源六はあつと押頂く。）

源六。わたくしの一分を立てさせて下さる御恩のほど、ありがたいとも勿體ないとも、お禮は口には盡されませぬ。土右衛門のところは存して居ります。すぐにこれから駈付けて、屹と濟ましてまゐります。（身づくろひして行きかゝる。）

八桝。待て、待て、源六。その腰のものを置いてゆけ。

源六。いや、これを放して丸腰では……。

八桝。丸腰がならずば、身がこの指添へをさしてゆけ。（脇差を出す。）その金を返した上は返報仕兼ねまじきおのれが日ごろの氣性、それを知つて腰のものを換へてやる。これは八桝太夫の刀、たとひどのやうなことがあつても、勝手にぬくことは許さぬぞ。よいか、呑み込んだか。

源六。よく呑み込んで居ります。唯今もおつしやつた通り、この返報は又かさねて……。今はお

源　六。　すぐに戻つてまゐります。

（源六は八桝太夫の脇差をさしかへて、下のかたへ足早に去る。おらんはあとを見送る。）

八　桝。　これで先づ埒があいた。これ、八兵衛。

八兵衛。　はい、はい。

八　桝。　あす早朝よりお祓を配りたいと存ずれば、みやげ物の品々いつもの通りにたのみ申すぞ。

八兵衛。　それは萬々心得て居ります。とんだことで色々の御心配、唯今御膳を差上げますれば、奥へ戻つて御休息なされませ。

八　桝。　角藏、まゐれ。

（八桝太夫を先に、角藏もつゞいて奥に入る。折子共も奥に入る。）

八兵衛。　おゝ、もう日が暮れる。これ、おらん。奥の御座敷へ燈火を持つてゆきや。これ、これ、何をうつかり。これ、おらん。

おらん。　（心づく。）あい、あい。なんでござります。

奥　助。　はて、判らぬか。早くお座敷へあかりをつけに行けと云ふのぢや。

おらん。　あい、あい。

（おらんは早々に奥に入る。）

八兵衛。　おゝ、云ふのを忘れた。（奥助に。）店へもあかりを持つて來いと女子どもに云うてくりやれ。

奥　助。　あい、あい。

（奥助は奥に入る。八兵衛は帳場に入る。やがて奥より折子一人は行燈をとぼして出づ。時の鐘きこゆ。）

八兵衛。　暮六つぢやな。

折　子。　今夜はもうお泊りは無さゝうでござりますな。

八兵衛。　白粉代も稼げさうもないな。はゝゝゝゝ。

折　子。　相變らず口の惡いことぢや。

（折子も笑ひながら奥に入る。八兵衛は帳面をくつてゐる。下のかたより源六はあわたゞしく走り出づ。）

源　六。　これ、手代衆。こゝらに金は落ちてゐませなんだか。

八兵衛。　なに、金が……。（起つて出る。）

源　六。　今の金をどこへか落してしまうた。（そこらを見まはす。）

八兵衛。　いや、それは飛んでもないこと。今出たばかりであの金をもう落してしまはれたのか。

源六。　（急いて。）落したのか取られたのか、それも確とはわからぬ。こゝろが急くまゝ途中で人に突きあたつたが、もしやそれが巾着切りで、掏り取られたのかも知れぬ。なにを云ふにも薄くらがりで相手はわからず、落したにしても探す術もなし、實に途方に暮れてしまうた。

八兵衛。　それにしても念のために、兎も角もそこらを一通りさがして御覽なされ。

（八兵衛は行燈を持つて店さきに出る。源六は急いてしきりにそこらを見まはしてゐる。上のかたより加賀屋の女房おとめ、廿四五歳。頭巾をかぶりて足早に出づ。）

おとめ。　もし、もし、大坂屋の手代どの。

八兵衛。　これは伊賀屋のおいへ様。日が暮れてどこへお出でぢや。

おとめ。　どこへも行きませぬ、こゝの家へたづねて來ました。半月前までわたしの店にゐた折子のおらん、この頃はこゝに來てゐる筈、鳥渡よび出して逢はせてくだされ。

八兵衛。　え。

おとめ。　（聲鋭く。）さあ、早う逢はせてくだされ。ほんに〳〵呆れ果てたいたづら女、來るが早いか旦那どのを蕩し込み、男のさしがねか女の智慧か、眼と鼻のあひだの同商賣の店へ住み換へして、こつそりと逢曳してゐる。いゝえ、みんな知つてゐますぞ。

八兵衛。　（源六はそれを聞いて屹と耳を引立てる。）なんぼ日がくれたと云うて、店先でそのやうなことを喚かれては迷惑。まあ、まあ、靜かにしてくださらぬか。

おとめ。　こなたもおらんを庇ふのか。左もなくばこゝへ呼び出して逢はせてくだされ。わたしは思ふ存分の恨みを云はねばなりませぬ。さあ、早う呼んでくだされ。

八兵衛。　今も店先で一騒動あつたところ。さつきは男同士、今度は女同士、又むしり合ひなどされては堪らぬ。おらんにはわたしからよう云うて聞かせます。今夜は兎もかくもおとなしく戻つて下され。主人の留守なり、こゝで揉着起されてはわたし等が迷惑。これ、頼みます。戻つてくだされ。

おとめ。　いえ、なりませぬ、戻りませぬ。人の男を寢取つた女に、逢うて恨みを云はねばなりませぬ。どうでも逢はせぬと云ふならば、いつそ奥へ踏み込んで……。

（おとめは奥へ行かうとするを、八兵衛は支へる。）

八兵衛。それは悪い。お待ちなされ。

おとめ。なにが悪い。わたしの勝手ぢや。

八兵衛。いや、さうはなりませぬ。

（おとめは奥へ押して通らうとするを、八兵衛はしきりに支へる。源六はぢつと眺めてゐる。上のかたより伊賀屋の手代平吉出づ。）

平吉。おゝ、おいへさま。こゝに來てゐられたか。

八兵衛。よいところへ來て下された。おいへさんを、早う、早う。（眼で知らせる。）

平吉。店さきで外聞が悪い。まあ、兎もかくもお戻りなされませ。

おとめ。忌ぢや、いやぢや。なんでもおらんに逢はねばならぬ。

平吉。まあ、さう云はずにおとなしくお歸りなされ。

（平吉は無理に宥めておとめを連れて行かうとするところへ、奥より與助出づ。）

八兵衛。おゝ、與助。手傳つて伊賀屋のおいへさんを連れて行け。

與助。あい、あい。さあ、さあ、今夜は一先づお戻りなされ。

（與助と平吉は捨臺詞にて、忌がるおとめをなだめながら上の方へ連れてゆく。源六はあとを見送る。）

八兵衛。（ほつとして。）やれ、やれ、うるさいことぢや。

源六。もし、手代どの、（屹と云ふ。）

八兵衛。（びつくりしたやうに。）え、なんでござります。

源六。さつきから聽いてゐましたが、伊賀屋の主人とやらは、おらんと譯があるのでござるか。

八兵衛。伊賀屋はこゝらでも大身代、おらんがそこに奉公してゐるうちに若い主人と何かわけがあつたとやらで、こゝへ住換へをして來ましたが、今も逢曳をしてゐるとか云ふので、女房どのが悋氣して、見らるゝ通りの亂騷ぎ、ほと〳〵持餘ましてゐますのぢや。

源六。では、あのおらんは伊賀屋の主人と……むゝ。（考へる。）それが丁度幸ひであらうも知れぬ。

八兵衛。なにが丁度幸ひでござりませう。實に困り切つてしまひます。

源六。伊賀屋の主人といふのは、どんな男でござるな。

八兵衛。今おし掛けて來たのは家つきの娘、主人はそれに思はれて、無理に婿に貰はれて來たのでござります。

源六。では、戀婿でござるな。それで人柄もおぼかたは推量せらるゝ。その上に身代もよいとい

ふ。

八兵衛。色と慾とで、おらんめもなか〳〵離れ得ぬと見えますわ。

源　六。むゝ、さうでござらうな。

（源六は妬ましげにぢつと奥を見返り、やがてふら〳〵と奥へゆきかゝる。）

八兵衛。あ、もし、土足で通つてはなりませぬ。

（源六は心づきて引返し、店に腰をおろして考へてゐる。八兵衛はそこらを片附ける。）

（二）

大坂屋の奥座敷、縁付の二重屋體にて、正面の上のかたに床の間、それにつゞいて二枚の襖、庭には秋草など咲きみだれて、下のかたに井戸あり。

（座敷には行燈をともして、八桝太夫と角藏とは自分達のまへに膳を据ゑ、打解けて酒をのんでゐる。）

八　桝。どうぢや、角藏。もう一つ飲まぬか。

角　藏。ありがたうござりまするが、もうこれで十分でござります。

八　桝。ほんにそちはたんと飲まぬ方ぢやな。しかし旅へ出たれば上下の隔てなく、かうして打解けて飲むのが面白いのぢや。では、わしに注いでくれ。

角　藏。はい、はい。（酌をする。）

八　桝。酌の女子はどこへ行つてしまうたか。かういふ客では座敷を勤める張合がないと見ゆるな。（笑つてゐる。）

角　藏。もし旦那様。（小聲で。）今こゝに來てゐた女子、あれは源六様とかねて近附のやうでござります。

八　桝。源六とあの女子が近附らしいと申すのか。

角　藏。たしかにさうであらうとわたくしは睨みました。

八　桝。さうか。

（八桝太夫はさかづきを持つて考へてゐる。奥の襖をあけて、おらんは銚子を持ちて出づ。）

おらん。お銚子のお代りが遅うなりました。

八　桝。　ちびり〳〵と飲んでゐればなか〳〵捗が行かぬわ。はゝゝゝゝ。（思案して。）これ角藏。そちもけふは疲れたであらう。この女子が來たればそちの相手には及ばぬ。風呂にでも這入つて休息しやれ。

角　藏。　でも。まだ源六様が戻られませねば……。

八　桝。　いや、源六めはあとでよい。かまはずに風呂にゆけ。

おらん。　風呂場は御存じでござりますか。

角　藏。　毎年の定宿ぢや。建變つても大抵は知れてゐる。（八桝太夫に。）では、御めん下さりませ。（襖をあけて去る。）

おらん。　さあ、お熱いのをおあがりなされませ。

八　桝。　おゝ、ついでくれ。宿許とは違うて、旅へ出ての寢酒はまた格別ぢや。時にあの源六めはまだ戻らぬか。

おらん。　まだ戻られぬやうでござります。遠路をあるいた上に踏まれたり叩かれたり、又その上に金を持つて駈けてゆく。さぞ草臥れることでござりませう。ほんに〳〵お氣の毒でなりませぬ。

八　桝。　不憫であるが、それも心柄で是非もない。若いときの苦勞は身の藥ぢや。あゝ、これ、そのやうに重ねてついでは迷惑。去年來たときには見えなんだが、そなたはいつからこゝに勤めてゐるのぢや。

おらん。　あい。御縁があつて、この月から御奉公申します。

八　桝。　それでは、なるほど見知らぬ筈。して、そなたの名は……。

おらん。　らんと申します。

八　桝。　おらんと云ふか。（また考へる。）では、そなた。わしの家來を識つてゐるか。

おらん。　さあ。（躊躇してゐる。）

八　桝。　わしが家來の源六、たしかに識つてゐる筈ぢやが……。隱さずにお云やれ。

おらん。　さあ。

八　桝。　隱してはならぬ。正直に打ちあけて申せ。

おらん。　（思ひ切つて。）あい。

八　桝。　知つてゐるか。

おらん。　もうかうなつたら、なにを隱しませう。わたくしは京の生れ、大坂の新町に勤め奉公して

ゐるうちに、源六さまと末かけて云ひかはし、それがために源六様は御勘當、年が明けたら添ひとげうとの約束で、一昨年の春にわかれました。

八桝。　して、それからどうしてゐた。

おらん。　去年の五月に年があけたれど、すぐに男のところへはたづねて行かれず、奈良や大坂で仲居奉公、そこに半年、こゝに三月と、流れながれてこの八月から生れ故郷に戻りました。

八桝。　して、あの源六様はおまへ様の御家來でござりますか。

おらん。　（躊躇して。）むゝ。いかにも身が家來ぢや。

八桝。　お前様こそなぜ正直に打明けてくださりませぬ。源六様はおまへ様のまことの甥御でございませうが……。

おらん。　むゝ。

八桝。　伊勢の八桝太夫は自分の叔父、そこをたよつて行くと云ふことは、源六様から聞いてゐました。

おらん。　どうで名乘らねばならぬ仕儀、いかにもわしは源六の叔父ぢや。源六もそなたには色々の世話になつたと聞いてゐる。あらためて禮を云ひますぞ。

八桝。　その御挨拶では痛み入ります。この通りの不束者、なにとぞ末長くお目かけられてくださりませ。

おらん。　かうして名乘り合つたからは、こちらから些と尋ねたいことがある。そなたはどうでもあの源六と添ひ遂げる氣か。

八桝。　それを穿鑿して、なんとなさる。

おらん。　まあ、一つ飲め。ゆる〳〵と話さう。

（八桝太夫はおらんにさかづきを渡して、酌をしてやる。）

八桝。　憚りさまでござります。源六と三つ鼎で相談せうと思うてゐたが、丁度よい折柄ぢや。ふたりが膝組みで腹藏なく話し合ふといたさう。こゝらの扇屋は旅籠屋も兼ねてゐて、店の折子も紅白粉つけて酒の伽もする。かうした奉公をしてゐるうちには、また面白い相手が出來まいとも限らぬ。そなたは何歳ぢや。

おらん。　廿六になります。

八桝。　源六は廿三、三つちがひぢやな。

おらん。　あい。恥かしながら、弟のやうな男を持ち、一倍苦労をいたしました。（なみだを拭く。）

八　桝。　その苦労を今もつゞけてゐるのか。どうでも源六と添ひたいか。

おらん。　お察しなされて下さりませ。（うつむく。）

（八桝太夫すこし困つて考へてゐる。おらんはさかづきを渡す。）

おらん。　ありがたうござりました。

八　桝。　（杯をうけ取る。）おゝ、なみ〳〵と注いでくれ。（ぐつと飲み。）さて、おらん。さう聞くからは思ひ切つて云はねばならぬ。云ひにくいことながら、あの源六のことをさつぱりと諦めてはたもるまいか。

おらん。　え。

（八桝太夫の顔を屹とみる。八桝太夫もおらんの顔をぢつと見つめてゐる。）

おらん。　折角のお頼みながら、それはどうもなりませぬ。

八　桝。　それは一應もつともぢやが、そなたも知つてゐる通り、源六は大坂で井筒屋といふ粉屋のせがれ、放蕩ゆゑに勘當うけたれど、ひとり息子なれば遅かれ早かれ勘當の詫もかなうて、店の暖簾も繼がねばならぬ身の上、源六が母はこの八桝太夫が實の姉、それから内々にたのまれて、近いうちに身が娘と祝言さすことになつてゐる。

おらん。　それはほんたうのことでござりますか。

八　桝。　はて、急いてはならぬ。もう一つ飲め。（さかづきをさす。）

おらん。　（その杯を拂ひのけて。）もうお酒は飲めませぬ。して、それは源六どのも得心か。

八　桝。　勿論のことぢや。むすめとは從妹同士、娘は十八、源六は廿三、丁度似合の年頃でもあり、ふだんからの二人の仲もよし、それにちつとも故障はないが、たゞ一つの心がかりはそなたのこと。源六は沙汰無しにして置いても仔細ないと云うてはゐれど、それではわしの心が濟まぬ。

おらん。　では、源六殿はわたしに沙汰無しに祝言しても仔細ないと云ひましたか。

八　桝。　（八桝太夫うなづく、おらんは衝と起ちて行かうとするに、八桝太夫はその袂をとらへる。）これ、待ちやれ。どこへゆく。

おらん。　源六どのはやがて戻つてくる頃、歸るを待つて云ふことがござります。

八　桝。　いや、戻ればかならずこゝへ來る。逃げかくるゝ源六ではない。まあ落着いてもう少し聽きやれ。今いふ通りのわけぢやに因つて今度の上りを幸ひに、連れ立つてそなたに逢ひに

來たところ、伊賀屋にゐる筈のそなたがこゝに來てゐる。

おらん。　え。（ぎつくりする。）

八　桝。　（それとも氣がつかずに。）丁度幸ひとすぐにこの相談ぢや。

おらん。　して、わたしが伊賀屋を出たわけを、おまへはよく御存じか。

八　桝。　今聞いたばかりでなんにも知らぬ。

おらん。　（ほつとして。）さうでござりますか。世間の口は善惡ないもの、どんなことがお耳へ這入らうとも、かならず眞に受けてくださりますな。

八　桝。　そのやうなことはどうでもよい。肝心の相談をなんと聞いたか、その返答が早う知りたい。どうぢやな。

おらん。　その返事はおまへには出來ませぬ。源六どのが戻られたら、わたしから直に申します。

八　桝。　わしには云へぬか。

おらん。　申されませぬ。（きつぱりと云ふ。）

八　桝。　源六の前でなければ云へぬか。

おらん。　はて、しつこい。わたしはわたしの思ひ通りに……。

（この時、奥の襖をあけて角藏出づ。）

角　藏。　唯今風呂から上りましたところへ、山城屋の四郎太夫どのからお迎ひでござりました。

八　桝。　四郎太夫殿から迎ひが來たか。

角　藏。　なにか御相談がござりますので、お疲れのところをお氣の毒ながら、すぐにお越しを願ふとのことでござります。

八　桝。　相談をかこつけに又飲まうと云ふのであらう。この上に飲まされては迷惑ぢやが、これも附合で行かねばなるまいか。そちは遠慮なく休めよ。

角　藏。　いえ、途中だけはお供いたします。

八　桝。　湯上りに出てかぜ引くな。

角　藏。　なに、大丈夫でござります。お袴をめしますか。

八　桝。　いや、このまゝでよからう。

おらん。　行つてお出でなされませ。

八　桝。　源六が戻つたら……。（眼で知らせろ。）たしかに返事をしてくれよ。

（おらんは顔をそむけてゐる。八桝太夫は角藏が附添ひて去る。題目太鼓の音きこゆ。おらんは緣

に出て耳をかたむける。）

おらん。　となりの家では今夜はお通夜ぢやさうな。（しばらく考へてゐる。）あの源六どのはまだ戻らぬのか。

（おらんはそこらの膳や銚子を片附けかゝる。下の方の井戸のかげより源六うかゞひ出づ。題目大鼓の音つゞけて聞ゆ。）

源　六。　おらん。

おらん。　（見かへる。）誰ぢや。

源　六。　おれぢや。（すゝみ出る。）

おらん。　（行燈を持つて庭をすかし視る。）おゝ、源六どの。いつの間に戻らんした。叔父さまは留守ぢや。まあこゝへ。

（源六は無言にて縁に腰を掛ける。おらんは片附けかけた膳を持つて出づ。）

おらん。　叔父様の御膳がこゝにある。とりあへず一杯飲みなさんせ。銚子もまだ冷えますまい。

源　六。　むゝ。

（源六はおらんに一杯つがせて、一息にぐつと飲む。）

源　六。　もう一つ注いでくれ。

おらん。　むかしに比べると大分お酒が上つたやうでござんすな。（酌をする。）

源　六。　（飲む。）なんでもよい。今夜は思ひ切つて飲まねばならぬ。もう一つ注げ。

（おらんはあきれたやうに又注いでやる。源六は又ぐつと飲む。）

おらん。　日が暮れて、おまへ、冷えるのではござんせぬか。

源　六。　なんの冷えるどころか、總身は焼けるやうに熱つてゐるのぢや。（胸を撫でる。）いや、悪い時には悪いもの、久しぶりで京へ上ると、早々に土足で踏みにじられ、おまけに金はなくしてしまふ。腹がたつやら、口惜いやらで、この胸が煮え返るやうな。

おらん。　え、あの金をなくしたと……。そりやどこで……。

源　六。　（いら〳〵して。）何處でと知れたら拾うてくる。落したか、取られたか、それも判らぬ。さりとは忌々しい。土右衛門めのしやつ面に叩きつけて、存分云うて遣らうと、息込んで出て行つたに……。その上に叔父の手前、あの金落しましたとどの面さげて云はれうぞ。（いよ〳〵焦れて。）おらん。もう一つ注げ。（さかづきを出す。）

おらん。　お前、むやみに焦れ込んで、むしやくしや紛れに過してもよいかえ。

源　六。　よくても悪くてもかまはぬ。注げ、つげ。自分の酒でもないものを、なぜそのやうに惜むのぢや。

（源六はおらんの手より引ったくり、手酌で飲む。）

おらん。　（思案して。）もし、源六どの。叔父様から渡された五兩二分のお金、たゞ落しましたでは濟むまいが……。（摺寄る。）これ、よく思案して見なされ。あゝした譯で叔父様から惠まれたお金を、うつかりと落しました、取られましたとは云はれまい。叔父様には知らさずに、その工面する法がありさうなもの。

源　六。　それがなるほどなら苦勞はせぬ。（又注がうとするを、おらんは支へる。）

おらん。　もうよい程にしなさんせ。そのお金はわたしが工面する。

源　六。　え、（むき直る。）そなたが其金を工面するか。

おらん。　あい。

源　六。　一年の給金も多寡の知れてゐる扇屋の折子、酒の相手して貰ふ心附けも二百か三百、四季をり〳〵の着るものから紅白粉まで自分持の身の上で、五兩あまりといへば大金。それをどうして工面する。

おらん。　それはわたしの胸にあること。今すぐにも工面してあげまする。はて、嘘でない。屹とわたしが……。

源　六。　（屹となつて。）いや、頼むまい。その金の出所はもう知れてゐるぞ。

おらん。　知れてゐるとは……。

源　六。　恩にきせて、工面して遣らうといふその金は、伊賀屋の若い主人から貰うたか、又は借りて來るのか。

おらん。　え。

源　六。　この源六を盲と思ふか、つんぼうと思ふか。けふ來たばかりで何も彼もみんな知つてゐるぞよ。

（源六は脇差をぬかうとすれば、おらんはその手にしがみ付く。）

おらん。　まあ、待つた。伊賀屋のことを誰から聞いた。

源　六。　誰からも聞かぬ。たつた今、こゝの店さきへ伊賀屋の女房が押掛けて來たのを、おれが確かに見とゞけた。

おらん。　え。

源六。不眞實の人でなしめ。覺悟せい。

おらん。見とゞけたとあれば隱しませぬ。いかにもわたしは伊賀屋に奉公してゐるうちに、つい婿殿と懇切になりました。

源六。それが人目に立つたので、女房の手前、朋輩の手前、相談づくでこゝへ住換へしたか。

おらん。あい。（泣く。）

源六。えゝ、おのれ。

（源六は無理に振り放して脇差をぬけば、おらんは再びその手に縋る。）

おらん。せいてはならぬ、源六どの。云ふことがある、聽いてくだされ。

源六。えゝ、聞かぬ。聞かぬ。

（又ふり放して斬つてかゝる、おらんは飛び退いて逃げるはずみに、行燈を倒して座敷のなかは眞暗になる。）

おらん。伊賀屋の婿どのと馴染んだは、わたしが惡い。それは幾重にもあやまります。

源六。いよ〳〵さうか。

おらん。さりとて。命をかけて約束した源六どの。なんでお前を忘れてよいものか。

源六。なにを……。

（又斬つてかゝるを、おらんは搔いくぐりながら云ひつゞける。）

おらん。今もいふ通り、多寡の知れた折子奉公。いくら稼いでも働いても、一兩と纏まつた金が身につけばこそ。伊勢へたづねて行かうにも、おまへと一緒に暮らさうにも、先立つは金のこと。

源六。まだ云ふか。

おらん。まあ待つてくだされ。その金がほしいばつかりに、主人の婿どのに云ひ寄られたを幸ひに……。

源六。むゝ。

（斬つてかゝれば、おらんは又逃げろ。）

おらん。いえ、いえ、こちらから蕩しかけたのではござらぬ。漆濃く云ひよられて、つい靡いた。一日も早うおまへと添ひたさに、慾にころんでつい靡いた。今夜工面するといふ金はまつたく伊賀屋の婿どのから二歩三歩と貰ひあつめた金、それがお前の役に立つて、わたしは嬉しい、本望ぢや。

源　六。なんのそれが嬉しからう。いくら巧者に云ひまはしても、おのれ何うでも堪忍せぬぞ。

おらん。また云ふことがある。待つて、待つて……。

（おらんは逃げまはるを、源六はさぐり寄つて肩さきを一太刀斬る。おらんは縁より庭へころげ落ちる。源六はつゞいて飛び降り、探り寄つてまた突けば、おらんはその手にしがみつく。）

おらん。源六どの。どうでもわたしを殺すのか。

源　六。えゝ、卑怯ものめ。放せ、放せ。

おらん。卑怯なら聲を立てる。もうかうなつたら命は惜まぬ。いふだけのことを云はしてくだされ。身勝手は世の習と云ひながら、わたしばかりの罪を責めて、お前にはなんにも罪はないか。

源　六。え。

おらん。ひとの不眞實は眼にみえても、わが不眞實には氣がつかぬか。苦勞のありたけ仕盡して、おまへに添ふ日を待つてゐるわたしと云ふものを袖にして、從妹同士のむすめと緣を組み、よくも叔父さまと三鼎で緣切りにござつたな。男畜生、人でなし。まことを云へばわたしこそ、お前を斬つてもよい筈ぢや。

源　六。おゝ。（おもはず土に坐る。）

おらん。（源六の腕をつかんで小突く。）さあ、これでもおまへに云譯あるか。お前の罪とわたしの罪を業の秤にかけてみたい。あゝ、息が切れて物が云はれぬ。水を、水を……。

源　六。おゝ、待つてゐやれ。

（源六はふらへる足を踏みしめながら緣にあがり、そこらを探つて杯を手に取り、下のかたの井戸を汲みて、さかづきに水を入れて來る。おらんは這ひよるを、源六は抱へながら水をのませる。）

おらん。これ、いつまでもこゝにゐてはお前のためになるまい。わたしを捨てゝ早う逃げてくだされ。

源　六。おれの一徹短慮から、むざとそなたを手にかけたが、成程そなたに比ぶれば我身の罪は一倍重い。堪忍してくれ、ゆるしてくれ。

おらん。かうなつてもまだお前がいとしい。息のあるうちに姿をかくして下されば、云譯はわたしの胸にある。泣いてゐずと、早う、早う。

源　六。今死ぬるそなたを見捨てゝ、どこへ逃げ隱れがなるものぞ。せめてもの罪ほろぼしに、お

おらん。　いえ、いえ、こゝでふたりが竝んで死ねば、心中の名をうたはれて死骸は河原に晒さるゝ。わたしは兎もあれ、おまへの恥、叔父さまの恥、一門一家の恥。やつぱり意趣斬の積りにして……一旦はこゝを立退いてくだされ。これ……判りましたかえ。(云ひかけて、だん〳〵に弱る。)

源六。　(おらんをかゝへる。)これ、おらん。もう云ふことは何にもないか。これおらん。おゝ、もう息が絶えたか。

源六。　(題目太鼓の音きこゆ。)もう一度しみ〴〵と顔が見たけれど、星明りではどうもならぬ。

源六。　(源六はさかづきにて釣瓶の水を汲んでのむ。)おらんの意見も一應はもつともぢやが、どうもこのまゝ捨てゝは行かれぬ。なきあとの名はなんとでもなれ。

八桝。　(源六は決心して、おらんの死體のかたを拜み、井戸側の傍によりて脇差を腹に突き立てる。奥より八桝太夫は角藏をつれて出づ。)これは暗いな。

角藏。　早う燈火を持つて來い。(呼ぶ。)座敷は眞暗ぢや。

八兵衛。　はい、はい。(八兵衛は手燭を持つて出づ。)

八兵衛。　おゝ、そこら中を取散して、これはどうしたこと。(そこらを照らして見ておどろく。)庭には人が倒れてゐる。

八桝。　なに。(八兵衛の手より手燭を取りて庭に降りる。)や、こゝには女が斬られてゐる。そこには男……おゝ、源六か。(八桝太夫ははつとして、源六のそばに進みよる。)

八桝。　源六。おのれ、その脇差をぬいたな。

源八。　(苦痛のうちに。)恐れ入りましてござります。

八桝。　女はたしかにおらんと見た。心中か、意趣斬か。

源六。　心中……心中でござります。

八桝。　むゝ。(八桝太夫は手燭をさしつけて照して見る。源六は落ち入る。八兵衛と角藏はおらんの死體をかゝ

へ起してあらためる。題目太鼓の音きこゆ。）

――幕――

この悲劇二幕は西澤一風作の淨瑠璃を土臺として、それにわたしの創意を加へたものである。（作者）

曾我物語

大正十年一月作。

大正十年三月。明治座初演。

初演當時の主なる役割――京小次郎（市川左團次）曾我十郎（守田勘彌）曾我五郎（市川猿之助）禪司坊（市川壽美藏）大磯の虎（市川松蔦）など。

登場人物――京小次郎親家。曾我十郎祐成。曾我五郎時致。越後の禪司坊。大磯の虎。箱根の兒。

箱根湖のほとり、賽の河原の景。正面は廣き湖水をへだてゝ富士の峰遠く見ゆ。舞臺は一面の河原にて、大小の石佛、石塔などあまたならび立てり。ところ〴〵に杉の立木もあり。河原には大小の石散亂して、石のあひだに小さき流れなどあり。河原撫子うつくしく咲けり。建久四年五月の午後。

（水の音しづかに幕あくと、曾我十郎はあり合ふ石に腰をかけ、禪司坊、十八歳、旅姿にてたゝずみ、うしろ向きになりて湖水を見てゐる。ゆふ七つの鐘の聲きこゆ。禪司坊は俄にひざまづき、形をあらためて上のかたを拜す。十郎ち默して鐘の聲に耳をかたむける。鐘の聲つゞけてきこゆ。鐘の聲終りし時、十郎はむき直りて空を仰ぐ。）

十郎。もう申の刻か。

（禪司坊も無言にて空を仰ぐ。上のかたより京小次郎、廿七歳、人を尋ぬるさまにて鞭を持ちて出づ。）

小次郎。禪司坊はいづれにある。（禪司坊をみて。）おゝ、それにある旅僧……。お身は越後より上れる禪司坊ではおはさぬか。

禪司。いかにもそれがしは越後の禪司法師。して、われらをたづぬる御仁は……。

十郎。兄の小次郎どのぢや。

禪司。おゝ、兄上……。（進みよる。）

小次郎。幼少のをりからに別れたる兄弟、たがひに見識らぬも是非がない。それがしは兄の小次郎ぢや。

禪司。さては京の小次郎どの。おなつかしうござりました。

（二人はなつかしげに摺寄る。）

小次郎。お身は越後、われは相模と、遠く引きわかれて年を經るまゝに、兄弟名乘り逢ふ時節もなく、唯をり〳〵の文のたよりに、たがひの無事を知らするのみぢや。して、このたびはなんとして上つたぞ。

禪司。父上御墓參をおもひ立ちまして……。

小次郎。父上の御墓參、それは奇特ぢや。遠々の道中をよくぞまゐつた。

禪司。父上御最期のみぎりには、それがしいまだ母の胎内にありておん顔すらもわきまへず。生まるゝとすぐに越後へ差下され、かやうに出家の身とは相成つたれど、見ぬ親戀しくなつかしく、せめては伊豆へまかり越して、一度は御墓を拜まんと、あけくれ念じ祈りながら、時來らねは力およばず、いたづらにこの年まで打過ぎ申した。

小次郎。然るにこのたび時節到來、なき父上の御墓を拜みに來たか。それはよい仕合せで、お身も滿足、それがしも嬉しい。實はけふの午前に曾我の母御をたづねたら、越後の禪司坊が久久でのぼつて來て、けふは取りあへず箱根に參詣、あすは伊豆へまゐるといふ。いづれ戻りにはゆる〳〵逢ふことゝは存じながら、さう聞いては一刻も猶豫はならす、馬に鞍置かせてすぐに追つてまゐつた。山の案内は十郎か。

十郎。いかにもそれがしが案内して、午のころに登山、別當の阿闍梨にも引合はせ申したところ、阿闍梨も奇特におぼされて、後刻かさねて逢はうとねんごろのお詞をくだされました。

小次郎。それは重々の仕合せであつた。兎にも角も、兄弟三人が久々の對面ぢや。まあ掛けい。ゆる〳〵話さう。

（小次郎はあり合ふ石を鞭にて指せば、禪司坊は會釋して下のかたに腰をかける。小次郎はまん中の石に、十郎は上の石に腰をかける。蟬の聲きこゆ。）

小次郎。母御はお身の顏を見てなんと云はれた。

禪司。（愁はしげに。）なき父上に生寫しぢやと、仰せられました。

小次郎。河津どのが赤澤山御最期の砌りには、それがしは十歳、十郎は五歳、五郎は三歳、いづれも幼い者ながら、父の顏はそれがしが一番ようおぼえてゐる。ほかの兄弟に比ぶれば、なるほどお身が生寫しぢや。一番似付かぬが五郎めであらうか。

十郎。（ほゝ笑む。）さうかも知れませぬ。

小次郎。母御からも聞いたであらうが、十郎五郎の兄弟は曾我の苗字を名乘りながら、伊東の血筋をひいたる者とて、可哀や今も日かげの身ぢや。この小次郎もおなじ母の腹をかりたれど、父がちがへば奉公にも構ひなく、鎌倉どのに召出されて、先づ一廉の武士となつてゐる。就いてはこのたびの道中にも、頼むことあらば心置きなくおたのみめされ。力の及ぶかぎりはお世話いたさうぞ。

禪司。ありがたうござりまする。

（上のかたより兒一人出づ。）

兒。越後の御僧はそれにおはすか。

禪司。はあ。

兒。師の御坊が唯今御對面申さうと仰せられまする。

十郎。阿闍梨が御對面くださるとか。それ、禪司坊。

禪司。（起ちあがる。）しからば御案内をねがひまする。兩兄上へ、しばらく御免くだされ。

（禪司坊は兒のあとに隨きて、早々に上のかたに立去る。）

小次郎。（見送る。）禪司坊は仕合せ者、阿闍梨が直々に御對面くださるゝとは……。

十郎。それも越路よりはる〳〵と、見ぬ親の墓をたづねてまゐつた、かれの孝心をめでられてのことでござる。

小次郎。さうか。（うなづく。）さうであらう。ぢやに因つて仕合せ者と申すのぢや。たとひ顏は見識らずとも、かれの父といふは唯ひとり、そのひとりの親に一筋の孝養を盡せばよいのぢ

や。それに引きかへて小次郎は母こそ一つなれ、まことの父と假の父と世にふたりの父を持つた。われ〳〵四人の母滿江どのは、そのむかし京家に宮仕へして、京ざむらひと馴れ親しみ、うみ落されたはこの小次郎ぢや。その後それがしを連子として伊豆の伊東へ下られ、河津三郎祐泰どのを二度目の夫として、その腹に儲けたはお身と五郎と禪司坊との三人……。いや、今更らしくこのやうな身の上話するでもないが、禪司坊が羨ましさについ此のやうなことも云ひ出した。いづれも今はこの世に亡き人ながら、まことの父も戀しく、假の父も捨てがたい。

十郎。それは我々もおなじことで、河津三郎祐泰どのをまことの父に持ちながら、幼少のみぎりに死別れ、曾我太郎祐信どのを、二度目の父と呼びかへて、苗字も曾我をなのる身の上。

小次郎。揃ひも揃うて兄弟が……。

十郎。ふたりの父を持つといふは……。

（二人は顔を見あはせる。）

小次郎。（嘆息する。）おもへば禪司坊は羨ましい。うまるゝとすぐに出家して、この世にもあの世にも父といふものは唯ひとりぢや。孝行の道をふみ迷ふ筈がないわ。

十郎。兄上の惱みはわれ〳〵の惱みぢや。が、もう猶豫はならぬ時節、禪司坊がはる〳〵とたづねてまゐつたも、亡き父上尊靈のおん導きであらうも知れぬ。兄上。

小次郎。なんぢや。

十郎。（左右を見かへる。）十郎五郎の味方してくだされい。

小次郎。なに、味方せよと……。（かんがへる。）むゝ、扨はかたき討……。いよ〳〵工藤を討つにきめたか。

十郎。叱つ。

（十郎はたち上りて再びあたりをうかゞふ時、上のかたの杉のあひだより曾我五郎忍び出で、十郎と顔を見あはせる。五郎は十郎に云ふなと扇にて制しながら、小次郎のうしろに立ちたる大いなる石佛のかげに隱れる。）

十郎。われ〳〵兄弟が工藤祐經をかたきと狙ふことは、兄上にもおほかた御存じの筈。かたきは大敵、兄弟にとつては一期の大事、若輩の十郎五郎ではなにぶんにも心許なければ、分別に長けたる兄上の御助勢、いくへにもおねがひ申す。知らるゝごとく鎌倉どのには富士の御狩の御用意もとゝのひて、近々に御出發とうけたまはる。これぞ我々に取つては優曇華

の時節到來、雜人ばらにまぎれて狩場に入込み、かたき祐經の……。

小次郎。よい、よい。それまで聞けばもうわかつた。明暮れにかたきを狙ふお身たち兄弟、おそらくはこの圖を外すまいと小次郎も薄々察してゐた。

十郎。（よろこぶ。）では、味方してくださるか。

小次郎。味方してよいか、惡いか、このあひだから色々に思案してゐる。今も思案の最中ぢや。

（小次郎は起ち上りて、思ひ惱めるごとく河原を徘徊す。十郎も起ち上りて、そのあとを追ふやうに附いてゆく。）

十郎。兄上。なにを申すも工藤は大敵。

小次郎。（うるさゝうに。）おゝ、知つてゐる。

十郎。狩屋の固めも定めて嚴重でござらう。

小次郎。（あるきながら。）勿論のことぢや。

十郎。十郎五郎たゞ二人では……。

小次郎。（かんがへながら。）二人ではなう。

（石佛のかげより五郎は衝と出でんとす。十郎は心づきて、先づ待てと制しながら、やはり小次郎のあとに附いてゆく。）

十郎。出家の身ですら禪司坊は、父の御墓を拜みたきに百里の路をのぼつてまゐつた。われ〳〵は武士の身でありながら、父のかたきを眼の前にみて、いつまで空しく月日を過されませうぞ。もし、兄上。（袂をひく。）

小次郎。（少しく形をあらためる。）お身達に取つては父のかたきであらうが、工藤に討たれた河津どのは、この小次郎のまことの父でない。

十郎。や。

小次郎。名ばかりの親、假の親ぢや。

（小次郎は袂をふりはらひて、元の石に腰をかける。）

十郎。まことの親でないゆゑに、そのかたきを討たぬと云はるゝか。加勢はならぬと申さるゝか。

小次郎。（決心して。）おゝ、加勢もせぬ、味方もせぬ。河津殿のかたきといふ工藤祐經、討ちたくばお身たちが勝手に討て。

十郎。むゝ。（失望する。）

（この時、小次郎のうしろの石佛は突然に倒れかゝる。小次郎は早くも身をかはせば、石佛は倒れて五郎は跳り出で、小次郎のまへに突つ立つ。）

小次郎。おゝ、五郎。この石佛を不意に倒しかけて、小次郎を傷けようと巧んだは、おのれの仕業か。

五郎。傷くるばかりでない。おのれの命を取つてくるゝわ。

（五郎は太刀をぬきて斬つてかゝるを、小次郎は鞭にてあしらふ。十郎はあわてゝ割つて入る。）

十郎。はやまるな、五郎。かりにも兄と呼ぶ人に、なんの狼藉、なんの無禮。

五郎。えゝ、あのやうな男がなんの兄ぞ。さればこそお止めなされと申したに……。弟ふたりが十八年の辛苦して、いまぞ仇を討たうとする時に、味方もせぬ加勢もせぬといふ卑怯者、たゞそのまゝに捨置かれうか。

小次郎。（あざ笑ふ。）相も變らぬ五郎めのあばれ者、その性根が直らねばこそ、母御の勘當も免りぬのぢや。云ふことあらば兄のまへに手をついて、おとなしう云へ。

五郎。おゝ、云うて聞かすわ。兄の小次郎、よう聞かれい。われ〳〵兄弟が父のかたきを狙ふことは、おん身もよく知つてゐる筈ぢや。その一大事の場になつて、まことの父の、かりの父の、なんの彼のと理窟をつけて、味方せぬといふは卑怯でないか。およそ男と云はるゝほどの者、たとひ他人なればとて、見込んでたのまれたら肯かぬといふ法はあるまい。父は違ふとも一腹の兄弟、その弟どもが一生に一度のたのみを、肯くか肯かぬか、今一度たしかに返答せられい。口外せぬうちは兎もかくも、かうと打明けた以上は生死の境ぢや。（詰めよる。）

十郎。（遮る。）こゝでいつもの荒氣はならぬ、短慮は功をなさずといふぞ。先づその太刀を鞘に納めい。

（眼顔で諭されて、五郎は澁〳〵ながら太刀を納める。）

十郎。五郎が無禮は十郎が代つていくへにもお詫つかまつる。なにとぞ御免くだされい。まことに兄上の仰せのごとく、兄弟三人おなじ腹とは申しながら、別々の父を持つたる因果、われ〳〵がまことの父も兄上に取つては假の親、そのかたき討に同意せぬとは、一應御もつともには似たれども、十郎五郎が志をたゞ〳〵不憫と思召されて、義によつての御加勢御助力、ひたすらにおねがひ申す。

小次郎。むゝ。（すこしく苦悶の色あり。）義に因つてかたき討の助力する、それが武士の習かも知れ

ぬ。

五郎。勿論でござる。武士の習、武士の道、そこを篤と御思案あれ。これほどの大事を口外して、すなほに同意めされば格別、どうでも不同意とあるからは、大事露顯をふせぐために我々も覺悟をせねばならぬ。（再び太刀に手をかけて詰めよる。）

十郎。（絶えず五郎を支へながら。）このこと萬一他人の耳に入り、更に祐經にも覺られ、鎌倉どのにもきこえなば、我々の身はなんとなりませうぞ。五郎が兎かくに焦燥つも、所詮はその懸念あればこそ。くれ〳〵もお察しくだされい。

小次郎。（うなづく。）その懸念は一應もつともぢや。が、十郎も聞け、五郎もうけたまはれ。お身達兄弟はかたき討のために生きてゐると云つてもよい位で、十八年の長いあひだ工藤祐經を附狙ひ、このたびの御狩を幸ひに、狩場へ亂入して本意を遂げうといふ。それはお身たちの思ふまゝで、それがし決して止めはすまい。心置きなく本意をとげい。但しこの小次郎はどうでも不同意ぢや。お身達の味方にはなるまいぞ。

五郎。むゝ。

（五郎は又詰めようとするを、十郎は支へる。小次郎はしづかに起ち上りて、そこらに咲ける撫子の花を折り、扇を開きてその上にのせて來る。）

小次郎。これをみよ、兄弟。この花に撫子の名あるに因つて、子になぞらへて昔より歌によむ。おなじ草とは云ひながら、その種異ればその花もおのづと變りて、あるひは唐撫子やまと撫子、思ひ〳〵に咲き出づるが自然の道理ぢや。われ〳〵とても同樣。河津殿の子といふ名はおなじけれど、胤を異にすれば心はおなじからず。うみの親より育ての親と世のことわざには申せども、十歳まで育てられた假の親よりも、當歳で別れた生みの親がこの小次郎はやはり懷かしい。そこがお身達と心の違ふところで、どう思うてもそれがしは、たゞ名ばかりの親のために、あたら我身を投げ出してかたきを討たうといふ、突きつめた心にはなられぬ。たとひ卑怯と云はれても、武士の道には缺くるとも、おのが心のすゝまぬことには一味も同意も出來ぬが無理か。お身達とそれがしとは、おなじ撫子でも違うた花ぢや。（扇の上の花を拂ひすてる。）とは云ふものゝ、兄弟の好みは格別、お身たちが今度の企てを小次郎決して他言すまい。その懸念は無用におしやれ。

五郎。では、どうでも不同意か、味方せぬとお云やるか。

十郎。（思ひ切つて。）いや、この上はもう是非がござらぬ。兄上の味方はお頼み申すまい。たゞこ

のことは御他言無用、これのみくれ〳〵もお願ひ申す。

小次郎。　念にはおよばぬ。箱根權現の見そなはす前で小次郎がたしかに誓ふであらうよ。

（小次郎は上のかたに向ひてひざまづき、持つたる鞭を額にあてる。）

小次郎。　當社權現も照覽あれ。萬一この誓にそむくに於ては、小次郎が身はまつこの如く相成りませうぞ。

（小次郎は鞭をふたつに折りて捨つ。）

十郎。　その御誓言うけたまはる上はなんの疑ひもござりませぬ。山なき御苦勞相かけ申した。

（上のかたより禪司坊出づ。）

禪司。　おゝ、どなたもまだこゝに……。五郎殿もまゐられたか。

五郎。　阿闍梨に對面せられたか。

禪司。　はい。かず〳〵のありがたいお詞を下されました。（倒れたる石佛に眼をつける。）や。いつの間にか御佛がこのやうに……。勿體ないことぢや。

（禪司坊はあわてゝ石佛を起しにかゝる。）

五郎。　それはわしが倒したのぢや。（立寄る。）はて、手傳ふには及ばぬ。これほどの石佛、五郎ひとりの手で引起してみするわ。

（五郎はその石佛を輕々と引き起して元のごとくに据ゑる。禪司坊はその强力に呆れてながめてゐる。）

小次郎。　けふは測らず兄弟四人がひとつに出逢うた。こんなめでたいことは無いなう。

（小次郎はまん中に、上のかたに十郎と五郎、下のかたに禪司坊、思ひ〳〵に腰をかける。）

禪司。　唯今阿闍梨の御物語によれば、十郎五郎の兩兄上がこのたび御狩のおん供めさるゝ驩として、鞘卷の刀一腰、兵庫鎖の太刀一口を、阿闍梨がおん手づから下されしとかうけたまはりましたが、まことに左樣の儀もござりましたか。

十郎。　われ〳〵は元より浪人の身の上、表立つておん供申すではなく、唯よそながら狩場のありさまを見物せうとてまゐるのぢやが、阿闍梨が格別の御芳志にて、十郎には刀、五郎には太刀を、おん驩としてくだされた。

禪司。　（思案する。）唯よそながらの御見物に、太刀と刀のおん驩は……。（うなづく。）むゝ、さてこそ案に違はぬ。

（十郎と五郎は顔を見あはせる。）

十郎　阿闍梨がなにか申されたか。

禪司　いや、なんにも申されませぬが、もうわたくしにも判りました。こゝにあるは兄弟四人。誰に憚かることもございますまい。（あたりを見まはして進み出る。）なにとぞこの禪司坊にも狩場のお供させて下さりませ。（土に手をつく。）

五郎　なに、お身が狩場へ一緒にまゐると……。

（十郎と五郎は再び顔を見あはせる。）

十郎　なにも彼も覺りし上は包んでも詮なけれど、狩場へ連れ立つことはならぬ。お身は出家の身でないか。

禪司　たとひ出家の身でござらうとも、一腹一生の兄弟が親のかたきを討つとあるに、おめ〳〵と見物がなりませうや。それがしの覺悟を御覽くだされ。

（禪司坊は持つたる珠數を地に抛つ。）

小次郎　十郎五郎の兄弟ほどあつて、勇ましくも思ひ切つたるよ。人はめい〳〵の心次第、推して兎やかう云ふべきではないが、兄弟ふたりがこのたびの討入りに、仕損ずれば勿論のこと、たとひ首尾よう本意を遂ぐるとも、命はもとより無きものぢや。そのふたりの後生菩提は、誰がとむらひ、誰が祈るぞ。

禪司　でも、どうもこのまゝには……。

十郎　さりとてそれは肯かれぬことぢや。小次郎どのも云はるゝごとく、いづれにしても我々は世になき命、お身はあとに留まつて二人の後世を弔らうてくだされ。それがまことの出家の勤めぢや。

五郎　また二つには兄弟が武運めでたく本意を遂ぐるやう、梵天帝釋に祈つておくりやれ。お身にたのむは此事ばかりぢや。心はいかばかりに猛くとも、太刀ぬく術もよう知らぬ出家の身が、狩場へ斬入つてなんとならうぞ。却つてわれ〳〵の足手まとひぢや。

禪司　では、どうでもなりませぬか。

五郎　ならぬと云ふに……。

禪司　はつ。

十郎　かなはぬ事とあきらめい。

禪司　はつ。

（禪司坊はまだ思案してゐる。小次郎は起ちあがりて落ちたる珠數を拾ひ、無言にて禪司坊の手に

わたせば、禪司坊はうけ取りてしづかに押頂く。）

小次郎。（嘆息する。）小次郎にお身の心があつたら、兄弟も定めて滿足であらうが……。では、兄上には……。

禪司。たのまれたが行かぬと申した。

小次郎。（小次郎を見て。）たのむ兄上はゆかぬと云ひ。

十郎。（禪司坊をみて。）ゆくといふ弟は連れられず。

五郎。所詮ふたりは。

十郎。いつまでも二人ぢや。

五郎。（十郎と五郎は顏を見あはせる。小次郎は苦悶の體にて、始終無言。）

禪司。して、お二人にはすぐに御出發でござりまするか。

十郎。いや、一旦下山して曾我の里に立ち歸り、母上にもよそながら御暇申して、こゝろおきなく出發いたさう。

五郎。禪司坊はすぐに伊豆へまゐるか。

禪司。（力なげに。）この上は是非がござりませぬ。狩場のお供は思ひ切つて、すぐに伊豆へまゐりまする。

五郎。それがよからう。では、十郎どの。

十郎。なにかの用意に心も急けば、日のくれぬ間に下山いたさう。（小次郎に。）御めん下され。

五郎。禪司坊も堅固で暮せ。

禪司。（十郎と五郎は行きかゝる。禪司坊はふた足三足追ひかけて聲をかける。）兄上。

禪司。（十郎と五郎はたちどまる。禪司坊はひざまづきて二人の顏を見あげる。）めでたう御本意。

十郎。おゝ。

五郎。（十郎も歩み寄らうとするを、五郎は隔てる。）未練でござるぞ。

十郎。むゝ。

（十郎は袖にて眼をぬぐひ、思ひ切つて上のかたに去る。五郎もつゞいて上のかたに去る。うすく雨の音きこゆ。禪司坊は上のかたまで慕ひゆきて、のび上りて見送る。小次郎も立つて見送る。下

のかたより大磯の虎、忍びすがたにて塗笠を持ちて出で來り、おなじく二人のあとを見送る。）

小次郎。（虎に心づかず。）いつそ二人と一緒に……。小次郎も武士ぢや……。

禪司。（上の方へゆきかけて、また立停まる。）

小次郎。おゝ、杉の木立に隔てられて……。（悲しげに。）おふたりの姿はもう見えぬ。

禪司。（苦しげに。）ふたりの姿はもう見えぬ。二人は……あのふたりは……。

（小次郎は迷ふが如くにふら〳〵と上の方にあゆみ去る。）

小次郎。（屹と心づく。）今更泣いてゐるところでない。この河原にある御佛の數、なん百體あるか知らねど、一體ごとに普門品一卷、今宵ひと夜よみ明かして、十郎五郎おふたりの本願成就を祈り申さう。

（禪司坊は腰に負ひたる經筒より經卷をとり出して、先づまん中の佛龕のまへに坐し、うしろ向きになりて經をよむ。虎は忍び足にて近づき、その經筒に流れの水を汲み入れ、そこらに咲きたる撫子の花を折りて筒にいけ、無言にて禪司坊のむかへる佛の前にささげる。禪司坊は一心に經をよんでゐる。うすく雨の音。虎は空を仰ぎて、更に塗笠をもち來りて禪司坊の上にかざせば、禪司坊は初めて心づきて見かへる。）

禪司。出家のかたはらに女人、殊に今は大事の祈りでござる。近よつて下さるな。

（云ひすてゝ再び經をよむ。虎はやはり無言にて退き、下の方にひざまづきて同じく佛に手をあはせる。上のかたより小次郎は馬の口をとりて出づ。）

小次郎。おゝ、虎御前か。ひと足の違ひで十郎はもう歸つたぞ。それがしもそのあとを追はうとしたが、足の早い兄弟。もうそこらに姿は見えぬ。この馬にひと鞭くるれば、すぐにも追ひ付かうが……。（考へてゐる。）

虎。（しづかに口を開く。）追ひ付いてどうなされまする。

小次郎。いや、追ふまい。所詮ふたりはいつまでも二人ぢや。餘人のかゝり合ふべきことではあるまい。（空を見る。）おゝ、又さみだれか。禪司坊、大事の經文をぬらすまいぞ。

（時鳥の聲きこゆ。）

虎。あれ、ほとゝぎすが……。

小次郎。おゝ、ほとゝぎすか。

（小次郎は馬の口を取りながら再び空をみる。虎も笠をかざしながら空を見あげる。禪司坊は一心に經をよみつゞけてゐる。雨の音。ほとゝぎすの聲。）

仁和寺の僧（喜劇）

——幕——

大正十年四月作。
大正十年十一月。有樂座初演。

初演當時の主なる役割――長老（市川左升）第一の僧（市川猿之助）第二の僧（市村龜藏）第三の僧（市川荒次郎）第四の僧（市川左喜之助）第五の僧（市川段猿）第六の僧（片岡市壽郎）猪熊悪右衛門（阪東壽三郎）さすらひの女（市川松蔦）絹屋五郎兵衛（市川壽美藏）赤鬼（市川米左衛門）青鬼（河原崎長十郎）など。

登場人物――仁和寺の長老、第一の僧。第二の僧。第三の僧。第四の僧。第五の僧。第六の僧。第一の兒。第二の兒。絹屋五郎兵衛。さすらひの女。猪熊悪右衛門。地獄の赤鬼。地獄の青鬼。

（一）

時代は衆好法師が『つれ〴〵草』をかきし頃、春の末。

京都仁和寺の一室。平舞臺にて、正面には床のやうなものありて、これに阿彌陀佛の立像を安置し、その前には櫻の大枝と山吹とを供へてあり。その傍には大いなる木魚あり。左右は佛畫を描きたる板戸。下のかたには地獄の圖を描きたる大なる衝立、その傍には可なりに大いなる三足の鼎あり。

仁和寺の僧